正岡子規の「新題」の研究
―俳句革新とのかかわりを中心に―

2023年３月

新潟大学大学院
現代社会文化研究科
氏名　中本　咲久良

正岡子規の「新題」の研究―俳句革新とのかかわりを中心に―

目次

凡例　vi
序章　1
第一章　明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に　20
はじめに　21
第一節　季を持ちやすい新事物と持ちにくい新事物　23
第二節　『俳諧開化集』「発句の部」の「新題」の処理　25
（一）季語になりうる可能性をもつ「新題」の場合　25
（二）季語になりえない「新題」の場合　29
1、有季句の場合　29
2、無季句の場合　32
第三節　季寄せにおける新事物の取り込み　36
おわりに　39
第二章　子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に　40
はじめに　41
第一節　旧派の「新行事」詠――『俳諧開化集』を中心に　46

第二節　日本派の「新行事」詠――子規を中心に　53
おわりに　60
第三章　俳句革新期における「新題」　62
はじめに　63
第一節　明治期の「新題」についての先行研究と問題の所在　63
第二節　『俳諧開化集』の「新題」と季の扱い　65
第三節　無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景　69
第四節　子規らの「新題」と季の扱い　73
おわりに　85
第四章　正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――芭蕉句と蕪風俳諧を中心に　86
はじめに　87
第一節　俳句実作者にとっての古句　87
（1）実作への古句の活用法その一――古句の消極的活用　87
（2）実作への古句の活用法その二――古句の積極的活用　91
1、子規が重視した俳書　91
2、子規が初学者のために挙げた俳書群の概要　92
①「俳諧七部集」と「続七部集」　92
②「蕪村七部集」　94

③「各家の集」と「故人五百題」　95
④子規が俳句初学者に薦めた俳書の特徴　95
3、『俳諧七部集』などを重視した理由　96
4、事物をありのままに見ることと、見た事物をありのままに表現すること　101
第二節　旧派俳諧のあり方　103
第三節　事物をありのままに言葉で表現することと「即景」　105
おわりに　107
第五章　「紀元節」とその異称「梅花節」について　110
はじめに　111
第一節　近代和歌や旧派句の「紀元節」詠　114
第二節　短歌や新派句の「紀元節」詠　120
おわりに　127
第六章　高浜虚子編『新歳時記』の三版種　129
はじめに　130
第一節　高浜虚子編『新歳時記』の三版種　131
第二節　高浜虚子編『新歳時記』三版種間の「季題」の異同とその傾向　133
第一節　外地を想定した「季題」　137
（一）「パカチ」　137

（二）「バナナ」 144
おわりに 149
第七章　高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係 **151**
はじめに 152
第一節　虚子編『季寄せ』誕生の背景 153
第二節　虚子編『季寄せ』の修改訂 154
おわりに 163
終章 165
注 **177**
序章 178
第一章 注 180
第二章 注 184
第三章 注 187
第四章 注 189
第五章 注 192
第六章 注 195
第七章 注 200

終章　注　206
あとがき　208

凡例

一、本論文に諸先学の学説を引用する場合、すべて敬称略とした。

一、書名・雑誌名・新聞名は『　』、論文名は「　」で表すことを原則とした。

一、引用に際し、旧字や異体字を通行の字体に改めた箇所がある。

一、引用に際し、ふりがなを付した箇所がある。その場合は、ふりがなを（　）にて囲った。

一、引用に際し、傍線や文字囲等を付した箇所がある。傍点・圏点は、引用本文による。

一、引用に際し、句や句集、季寄せに付した通し番号は、便宜上私に付したものである。

一、引用に際し、判読不能で翻字できなかった文字、および、新聞等の引用の際、印刷不明瞭で判読不能であった文字は■で表した。

一、本文中に引用した文献のうち、本文中で特に触れなかったものは。次の各書に拠った。また、和歌は『新編国歌大観』によった。

『子規全集』：講談社版『子規全集』全二二巻＋別冊三巻（昭和五〇年四月―昭和五三年一〇月）

『碧梧桐全集』：文藝書房版『碧梧桐全集』全二〇巻（平成一三年八月―平成二三年二月）

『俳文学大辞典』：加藤楸邨ほか監修、尾形仂ほか編『俳文学大辞典』普及版（平成二〇年一月、角川学芸出版）

序章

序章

第一節　明治の新事物を発句に取り込むということ

明治維新、文明開化、新時代の到来。明治の新事物を取り入れる動きが起こったのは、伝統的詩歌の世界も例外ではない。文明開化を扱った伝統的詩歌の作品集には、漢詩集の『日本開化詩』（1）（明治九年）や、和歌集の『開化新題歌集』（2）（明治一一年）、『明治開化和歌集』（3）（明治一三年）などがある。

それでは俳諧においてはどうかというと、俳諧の場合、新事物の取り込みについて考える際には、発句と平句を区別して考える必要がある。そもそも俳諧とは、新しさや俗であることがその特質なので、新事物を取り込むことは必然的であり、平句の場合には特段問題なく新事物が取り入れられていったと考えられる。

発句の場合も、単なる素材として新事物を導入するならば、平句の場合と同様で特に問題はない。しかし、新事物を発句の主たる題として詠もうとするときには、季の問題を無視できなくなる。

では実際、発句の場合はどのような方法で新事物を取り込んだのだろうか。季語以外の題のもとに詠まれた近世の発句の場合、一句において季語と題が分離するという現象が見られ、そのことは先学のすでに指摘するところである（4）。

さて、明治期の、子規が「旧派」と呼んで強く批判した俳人たちが新事物を題として発句に取り込もうとした際にも、この、題と季語が分離するという様相がやはり見られる。第一章で詳しく取り上げる西谷富水編『俳諧開化集』（5）「発句の部」は、その代表的なものといえるだろう。

さて、このような手段で「発句」に新事物を取り込むことは、一見革新的な動きであるように思われる。しかしながら、次節で取り上げるように、子規の俳句革新についての先学では、俳句における新事物の取り込みを、俳句革新の要素として挙げていないのである。

第二節　正岡子規の俳句革新についての先行研究と問題の所在

正岡子規の俳句革新とは、どのような運動であったのであろうか。俳句革新については、多くの先行研究が存在する。例えば『現代俳句大辞典』から、「俳句革新」の語を含む記事を抜き出し、引用、列挙すると、次のようになる（傍線は稿者による）。

子規は古俳諧の分類を進めていくうちに、俳句革新の必要性を認め、一八九二（明25）年六月、新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載、翌年には俳句欄を設けて新しい俳句の方向を示した。子規はこの新聞「日本」を拠点として俳句革新運動を推進する。

（黒川悦子「伊予派」項）

（稿者注：近代俳句は、）正岡子規の俳句革新を出発点とする見解は一致しているが、どこまでをその範囲とするかは漠然としている。

（仁平勝「近代俳句」項）

これらの画家（稿者注：浅井忠、中村不折、下村為山等）と交友のあった正岡子規は「写生といふ一事は少くとも西洋画をして日本画の如き陳腐に陥らしめざるの利あり」（『松蘿玉液（しょうらぎょくえき）』）とその効果を認め、文芸上の指導法としてこれを取り入れた。殊に俳句については、自分の目指す「俳句革新」の手段として掲げ「写生論」を成したのである。

（今井千鶴子「写生」項）

（稿者注：『獺祭書屋俳話』の）俳人論では、其角、嵐雪等元禄の俳人を中心に評している。「俳諧初句指南の評」等の俳書批評で、旧派に対し相入れない点を述べる等、子規の俳句革新の最初の書であった

（清水弓月「獺祭書屋俳話」項）。

子規が、負の評価であることを含意して「月並」なる言葉を初めて用いたのは、子規の俳句革新の第一声としての『獺祭書屋俳話』（一八五三・五　日本新聞社）の九二年九月一七日の条においてである。〈略〉子規が「月並」なる評語を創唱したことによって、子規の俳句革新は間違いなく加速することになった

（復本一郎「月並」項）。

子規は九二年（稿者注：一八九二年）一二月に日本新聞社に入社し、新聞誌上（ママ）において俳句革新を唱えた。

（小林祐代「日本派」項）

同年（稿者注：一八九二年）一二月、母の弟加藤拓川の紹介で陸羯南の「日本新聞社」に入社。月給一五円。同社入社前から同紙に「獺祭書屋俳話」を連載（九二年六月～一〇月）、読者の反響は大きく、子規の俳句革新運動の第一声となった。彼は同時代の俳句界に覚醒を促す見解を次々に披瀝したが、機知と諧謔に飛んだ文章は、二〇代半ばですでに堂々たる指導者の風格を備えていた。子規は驚くべき短期間に俳句革新の事業を成し遂げた。彼は九三年頃から洋画家浅井忠（ちゅう）、中村不折、下村為山らを知り、写生に眼を開かれ、これを俳句制作に応用する。

（大岡信「正岡子規」項）

また、『俳文学大辞典』普及版には、「俳句革新」に関して次のような記事が見られる。

同二五年（稿者注：明治二五年）一二月、叔父加藤拓川の親友である陸羯南社長の新聞『日本』に入社、すでに『獺祭書屋俳話』で発句の独立を説き、俳句革新に着手。〈略〉子規は、近世末以降の旧派の弊風を打破し、明治新時代の写実説を深めて、俳句革新・短歌革新・写生文の提唱に写生の平淡味を実践し、近代短詩系文学の偉業を達成した。

（和田茂樹「正岡子規」項）

以上を整理すると、先学の定義する子規の俳句革新とは、次のようなものと言えるであろう。

Ⅰ　子規は古俳諧の分類を進めていくうちに、俳句革新の必要性を認めた。

Ⅱ　子規の俳句革新は、新聞「日本」に連載した「獺祭書屋俳話」（明治二五年六月―一〇月）に始まった。

Ⅲ　子規は文芸上の指導法、ひいては俳句革新の手段として、洋画の「写生」を掲げ、「写生論」を成した。

Ⅳ　発句の独立が、子規の俳句革新において重要な要素であった。

以上のように、従来の先行研究は、新事物の取り込みの問題を論じていない。そればかりか、先学が俳句革新の肝であったとする「写生論」や「発句の独立」についても、その具体的な内容や実態までは明らかにしていなかった。従来の先行研究は、子規の偉大な事績として俳句革新を掲げながら、その実態解明にまでは及んでいなかったのである。

その背景には、子規が「旧派」と呼んで強く批判した俳人たちの事績が明らかにされていなかったことがある

のではないかと、稿者は考えている。

子規の俳論や俳句の革新性を述べるには、「旧派」の俳論や発句との比較が不可欠である。が、肝心な「旧派」の活動実態が、長らく不明のままであったのである。

この問題に対しては、越後敬子が論考を積み重ね、旧派の中でも特に有名有力な俳人については、その事績や活動実態を明らかにした（6）。本稿も同氏の事績に多くを依っている。

さらに、青木亮人は、旧派と新派の活動を比較対照することで、子規の俳句革新の中心部である「写生」の実態解明に迫った（7）。

最近では田部知季が、子規から碧梧桐、虚子に至るまでの俳句言説の研究を発表している（8）。

特に題についての子規や虚子の文学論については、筑紫磐井に『伝統の探求〈題詠文学論〉――俳句で季語はなぜ必要か』（9）という論考が存する。

しかし、これらの先行研究を含めてもまだ、子規の俳句への新事物取り込みについての議論が、尽くされたとは言いがたい。

では、そもそも子規は、俳句に新事物を取り入れること、つまり新時代の題材である「新題」を取り込むことをしなかったのであろうか。

結論から言うと、そのようなことはない。子規が明治の新事物を俳句に取り入れていたことについては、すでに先学の指摘がある（10）。

従来の先行研究の指摘する通り、俳諧からの「発句の独立」が俳句革新の重大要素に当たるならば、発句の構成要素である題と季の折り合いの問題を乗り越えて、俳句に新事物を取り入れるという事象は、子規の俳句革新の議論において、もっと積極的に扱われてよいのではないか。

本論文は、この問題に対し、明治期の「新題」を手がかりに、子規やその周辺の俳論や俳句作品を検討して、

子規の俳句革新の実態を明らかにしようと試みるものである。さらに、子規の俳句革新の手法が後世にどのような影響を与えたかを、「紀元節」とその異称「梅花節」の句作例や、虚子編の『新歳時記』、『季寄せ』を主な材料として論じる。

第三節　本稿の構成

第一章　明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に

第一章は「明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に」と題し、三章に分けて論じた。

明治になって、新事物を題とした発句をどのように扱うかは大きな問題であったに違いない。題として取り込むには、原則的には季をもつものであることが最適だからである。季語以外の題のもとに詠まれた近世の発句の場合、一句において季語と題が分離するという現象が見られ、この方法が、明治期の新事物を発句に題として取り込む上での先例となったと言えるのであろう。

本章ではこのことを西谷富水編『俳諧開化集』（以下『俳諧開化集』）を通して指摘する。さらに、発句の世界に取り込まれたはずの新事物が、なかなか季語化するには至らなかったことを、『俳諧開化集』前後刊行の「季寄せ」の調査結果から指摘し、その背景を「季寄せ」という書物の性質と関連づけて考察した。

第一節　季を持ちやすい新事物と持ちにくい新事物

本節では、『俳諧開化集』「発句の部」の題一覧より、新事物の中で、「新行事」のような季の定まりやすい語は少数であり、季を確定できないものが殆どであることを確認した。

第二節　『俳諧開化集』「発句の部」の「新題」の処理

『俳諧開化集』の句は、有季句であっても、題と季の語が別である場合が多くあり、無季句の場合は初めから

題と季とは無関係というあり方で詠まれたものであると判断しうる。明治の新事物の題としての発句への取り込みの多くは、このような方法をもって成されたのである。そしてこの方法を支えた大きな要因の一つは、近世以来行われてきた、発句において題以外に季を詠み込むという手法であったと考察した。

第三節　季寄せにおける新事物の取り込み

本節では、「季寄せ」における新事物の取り込みは、「新行事」題程度にとどまっていることを確認した。その背景には、「季寄せ」という書物の、季語の持つ伝統を重んじるという性質が考えられるとした。

第二章　子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に

第二章は「子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に」と題し、三節に亘って「新行事」題について論じた。

正岡子規は明治二五年（一八九二）からの俳句革新を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。その際、子規が何を基準に旧派を「陳腐」と判じたのかについては、青木亮人が「古人の類句」の多寡がその基準となった形跡があると指摘している。この点から言えば、単純に考えて「古人の類句」が理論上殆ど存在し得ない明治の「新題」を季語として詠んだならば、「新奇」な句になり得たはずだという推測も成り立つ。ところが、明治三一年（一八九八）、子規の校閲による日本派初の類題句集『新俳句』の新題採用状況を見ると、先行する旧派の類題句集と比較してかなり慎重である。

実施日が定まっている「新行事」は、季の問題が絡んでくる他の「新題」と違って、季語としても取り込みやすかったと思われる。しかし、『新俳句』での「新行事」題の立項は「クリスマス」「一月」の他見られない。これに対し、旧派では当時すでにこれら「新行事」題を類題句集や季寄せに多く取り入れていた。一見「新奇」に見える「新行事」題の取り込みに対し、旧派に比べ子規の態度が慎重であったのはなぜか。

第一節　旧派の「新行事」詠――『俳諧開化集』を中心に

本節で取り上げた旧派類題句集の「新行事」詠からは、

Ⅰ　旧時代の常識的感覚で、もしくはそれとのずれを楽しむかのように新時代の新常識を詠む

Ⅱ　古典の趣向を応用して明治の新事物を詠む

Ⅲ　旧来の季語を応用して明治の新事物を詠む

という、少なくとも三つの傾向を看取できた。このように、旧派による「新行事」の取り込みは、一見革新的なようでありながら、その実態は、近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかったように思われた。

第二節　日本派の「新行事」詠――子規を中心に

本節では、子規を中心に日本派の「新行事」詠を取り上げた。「新行事」は表面的には新しい題である。しかし、「新行事」が負っている、あるいは明治新政府によって付与された歴史的背景は、むしろ古典的かつ伝統的なものであった。加えてその儀式も厳粛あるいは盛大で、かつ典型的なものであることが求められた。子規は「新行事」を始めとする「新題」の導入が、旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いていたのではないか。加えて子規自らも、「新行事」詠の実作を通して、「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることも自覚していたのではあるまいか。その意識が、『新俳句』における「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がったと考えられた。

第三章　俳句革新期における「新題」

第三章は「俳句革新期における「新題」」と題して、俳句革新期における「新題」について四節に分けて論じた。

具体的には、旧派の発句と、子規ら一派の俳句の両者における、「新題」の扱い方を取り上げ、その姿勢を比較検討した。

明治維新によって様々な新事物が社会に導入されると、文学の中にそれらを取り込もうとする動きが起こったが、俳諧もその例外ではなかった。しかし、新事物を平句ではなく発句の中へ、それも単なる句の一素材ではなく、発句の主たる題として詠もうとするときには、季の問題を無視できなくなり、一筋縄ではいかなかった。つまり明治の「新題」を発句に取り込むのは、容易なことではなかったと考えられた。

第一節　明治期の「新題」についての先行研究と問題の所在

本節は、明治期の「新題」についての先行研究を整理し、本節で扱う問題の所在を明らかにした。具体的に、本節は『俳諧開化集』の「新題」取り込みの背景を改めて考察し、同書のこのような姿勢の、当時の旧派俳壇全体の動静の中における位置づけについて再検討することを目的とした。さらに子規ら新派の動静と照らし合わせることで、新派旧派双方の動静や「新題」取り込みの姿勢を相対化させることも試みた。

第二節　『俳諧開化集』の「新題」と季の扱い

本節では『俳諧開化集』「発句の部」の無季句や、題と季語を分離させた句を主として扱った。発句にとって無季であることは異例なことである。したがって、問題の在処を、『俳諧開化集』の編者たちがなぜ、無季句、もしくは題と季語を分離させた句を多く含む発句集を編まなければならなかったかにあると明らかにした。

第三節　無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景

前節での問題提起を受け、本節では、無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景を考察した。

結果、無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景としては、

Ⅰ　発句において題と季語は分離可能なものであるという近世以来の伝統

Ⅱ　和歌以来、題は四季以外に恋・旅・名所などが存在し、後世俳諧の発句においても四季以外の題に季語

を結んで詠むこともできたという伝統

Ⅲ　蕉門の俳論の無季許容論と、先例となる芭蕉らの無季句の作例

Ⅳ　俳諧教導職としての国民教化の任を負った発句集であったこと

少なくともこの四点が考えられる。

以上に加え、Ⅴとして、発句における挨拶性の不要化が、発句において当座性を示す季の不要化へと繋がったことも考えられるかもしれない。しかし、以上五つの要素や背景の中でも、特に影響が大きかったものは、越後敬子の指摘する、「俳諧教導職」としての責務を果たすというものであったと考えられた。

第四節　子規らの「新題」と季の扱い

前節までの旧派の「新題」と季の扱いに対して、本節では、子規ら新派の「新題」と季の扱いを論じた。

子規は「新題」についてはこれを認め、積極的に取り入れようとする姿勢も見せていた。しかしながら、「新題」には選択の必要があるとし、『獺祭書屋俳話』「新題目」に述べているように、新事物を闇雲に「新題」として取り込む姿勢には批判的であった。この批判は、旧派の中でも「特異」でありながら、強い影響力を持っていたが故に、本来の俳諧の伝統を無視した無理な「新題」を用いていた俳諧教導職に、特に向けられたものではなかったかと考えられた。

加えて子規の発言や『新俳句』からは、彼が「新題」を、季を持つ語として俳句に取り入れることに対して心を砕いていたことが端々に見て取れた。

子規の、俳句における季を持つ「新題」の選定態度は慎重なもので、一見すると、消極的なもののように見えた。しかし、実際に類題句集『新俳句』を取り巻く子規の発言や句集内の「新題」の句例を検討するに、子規の裡に秘められた、「新題」取り込みの意欲そのものは、むしろ実際には精力的かつ積極的なものだったのではないかと思われた。つまり、「新題」を選定する目は厳しいものであったが、それに相応しいと感じた「新題」の

取り込みには意欲的であったと窺えた。

第四章　正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――芭蕉句および蕉風俳諧を中心に

第四章は、「正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――芭蕉句および蕉風俳諧を中心に」と題し、三節に亘って論じた。

「新奇」を生むために古句に学ぶという一見矛盾したような手法をとる必然性は、どこにあったのであろうか。また子規は古俳諧からどのような点を学び取ったのであろうか。本章では、俳句実作者に対し、古句を読むことを奨励する子規の発言に焦点を当て、古句を読む意義について、子規がどのように考えていたのかを検討した。

第一節　俳句実作者にとっての古句

（1）実作への古句の活用法その一――古句の消極的活用

本項ではまず、実作への古句の利用法に関する子規の発言を整理した。俳句初学の段階での古句の利用という一点目は、積極的に古句を活用せよという種の指南ではなかった。むしろ「時には」という条件付きの、初学者向けの消極的な活用法であったという方が正確であることを確認した。

続く二点目は、俳句の最終的境地に達した者たちに対して、同類句に陥らないための、いわば確認作業ができるようになることの必要性を説いたものであった。これもやはり、「新奇」な作品を生むための古句の積極的活用とは言いがたい。要するに、先の二点いずれをとっても、子規が目指す「新奇」な俳句を生むことに直接的につながるとは考えがたいと結論した。

（2）実作への古句の活用法その二――古句の積極的活用

前項をうけて、本項では実作への古句の積極的活用法について論じた。

まず、「1、子規が重視した俳書」、続く「2、子規が初学者のために挙げた俳書群の概要」では、二つの子

規の記述から、子規が俳句初学の者に対し読むのを認めた書物の条件を、次のように整理した。

第一に、芭蕉や蕪村の活動期の俳書であること。

第二に、その中でも、柳居編『俳諧七部集』、闌更編『俳諧続七部集』、菊舎太兵衛ほか編『蕪村七部集』、車蓋編『発句三傑集』、土芳編『蕉翁句集』など芭蕉の家集、几董編『蕪村句集』などを読むべきだとすること。

第三に、その中でも「悪句」が少ないのは、去来・凡兆編『猿蓑』、『蕪村七部集』、『蕪村句集』であること。

第四として、松露庵烏明（うめい）編『故人五百題』が、市中に広く流布していて、俳句の初学の者には都合が良いとしていること。

3、『俳諧七部集』などを重視した理由

俳句初学者が句を読むとき、とかく句に込められた「理想」を追究しがちであるが、実際は「事物をありの儘に詠みたる」句が最も多く、またそのような句の方に「趣味」が多いと説いている。この、「事物をありの儘に詠」む姿勢こそ、芭蕉の俳諧に子規が認めた「新奇」な句を生む可能性であり、それと同時に、俳句初学者に子規が求めた、実作の姿勢だったのではないかと考察した。

要するに、子規は、俳句革新の方向性や方法論を蕉風俳諧から汲み取ろうとしたのであり、反対に蕉風俳諧の側から言えば、蕉風俳諧が、子規の俳句革新の方向性や方法論に大きな影響を与えたということになるとした。

4、事物をありのままに見ることと、見た事物をありのままに表現すること

子規の発言は、要するに、古句を、事物をありのままに詠んだ句を作る参考にせよとの意であると考えられる。

第一に、芭蕉の句は、事物をありのままに詠んでいる点に「新奇」な句を生む可能性が存すると、子規は評価していた。

第二に、事物をありのままに詠んだ句を実際に作ることにおいて、芭蕉や蕉風の数多の句の中には、その手本となりうるものが多く含まれていると、子規は考えていたと推測されるとした。

第二節　旧派俳諧のあり方

第二節では、旧派俳諧のあり方に対する子規の見解を整理した。

旧派の句が、仮構の中の、人工物を、古来の伝統的なものの捉え方で捉え、さらに伝統的かつ反復的な表現で言語化するという、尻すぼまりのような形で形成されていく過程が見て取れる。

これに対し、子規の提唱する「新奇」な句の作り方は、箱庭を出て「造化」の中にいくらも存する事物を、あるがままに見て捉え、さらに伝統にとらわれることなくあるがままに言葉で表現するという、末広がりの様相を呈していると言えるのではないか。そして、この裾野の広がりが、「新奇」な句を生むと、子規は考えたのではあるまいかと推測した。

第三節　事物をありのままに言葉で表現することと「即景」

第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくること。

第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現すること。

子規が芭蕉や蕉風俳諧に以上のような姿勢を看取し、これを評価していたことを確認してきた。そして、蕉風俳諧から子規が俳句革新の方向性や具体的手法を汲み取ろうとしてきたものと考察した。

第三節では、子規のこのような古典研究が、俳句の実作にどのような影響を与えたかを考察した。具体的には、「即景」という句作法による俳句作品を取り上げた。「即景」とは、「まのあたりに見る風景。眼前の景色」（小学館『日本国語大辞典』第二版）の意である。したがって、目の当たりにした風景をありのままに言葉で表現し、俳句にまとめたのだとしたら、先の芭蕉や蕉風俳諧の姿勢に重なる。

第五章　「紀元節」とその異称「梅花節」について

第五章は「「紀元節」とその異称「梅花節」について」と題し、二節に分けて旧派と新派における、「新題」「紀

元節」および「梅花節」の扱いの違いを論じた。

「紀元節」の異称「梅花節」は、一体いつ頃、どのような背景で使われるようになったのであろうか。

一般語としては今日殆どつかわれていない「紀元節」および「梅花節」という語が、現行の歳時記にはまだ収録されていること、加えて「梅花節」については、現段階で俳句以外の用例が非常に少ないことから、本章では、和歌・短歌、および発句・俳句といった明治以降の短詩系文学作品を中心に取り上げ、「梅花節」という異称がつかわれるようになった経緯を検討した。

第一節　近代和歌や旧派句の「紀元節」詠

本節では、旧派の近代和歌や発句における「紀元節」詠を主として取り上げた。

「紀元節」の語を詠み込んだ句が多く見られる理由として、有季という発句の条件を満たす目的が第一義にあろうし、「紀元節」という題の句作の手本としやすい句が集められているということもあるだろうが、そればかりではなく、句作上の問題として、「紀元節」という語を詠み込まなければ、他の「新行事」句との差別化が図りがたかったという理由もあったとした。

さらに、旧派の句も和歌も、「紀元節」の作例は、いずれも梅との関係が見られず、またつかわれている語彙も発想も似通っている点を指摘した。

第二節　短歌や新派句の「紀元節」詠

本節では、子規ら日本派を中心とする新派の俳句や、根岸派の短歌における「紀元節」詠を主として取り上げた。

まず、少なくとも日本派に於いて、

ⅰ　明治二三年（一八九〇）の碧梧桐の「紀元節」詠――「紀元節」と梅との関係見られず

ⅱ　明治二五年（一八九二）の子規の「紀元節」詠――「紀元節」と梅を関連づけた詠み方。「梅花節」の

句例見られず

ⅲ　明治三九年（一九〇六）の碧梧桐の「梅花節」詠――「梅花節」という（季）語、成立済

という流れがあることを明らかにした。

さらに、子規の短歌が、表面的には現実に即した内容を述べたものであり、さらに紀元節の象徴が梅であるという知識と合わせて読めば、そこに紀元節に寄せた歌ならではの祝意が読み取れるという性質のものになっているあることを指摘した。

第六章　高浜虚子編『新歳時記』の三版種

第六章は、「高浜虚子編『新歳時記』の三版種」と題して、正岡子規の高弟であり、子規の俳句の「後継者」を自認していた高浜虚子の、「新題」の扱い方を、『新歳時記』を材料に検討した。

俳句革新を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかったとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は『袖珍俳句季寄せ』を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった。彼の俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実からも十分察せられる。そして虚子の生涯最後の単独責任編集歳時記であり、虚子の歳時記・季寄せ編集の集大成とされるのが、初版昭和九年（一九三四）刊の虚子編『新歳時記』である。今日も増刷され続ける『新歳時記』はまさに、虚子の生んだロングセラーである。

しかしながら、『新歳時記』についての先行研究は決して多くはなく、それらは『新歳時記』に少なくとも三版種が存し、三版種間に異同や差異がみられることを自明の理としつつも、この異同や差異について論じる際、その全体像にはあまり触れていない。

本章では虚子編『新歳時記』三版種間のすべての立項「季題」の異同を調査することによって、『新歳時記』の改訂、再改訂のあり方を明らかにし、さらに異同の見られた立項「季題」を複数取り上げて、二度の改訂の実

施の背景を考察した。

第一節　高浜虚子編『新歳時記』の三版種

本節では、まずはじめに、問題の所在を明らかにした。

虚子は昭和九年（一九三四）に初版『新歳時記』を三省堂から刊行し（以下「初版」）、その後昭和一五年（一九四〇）に改訂版（以下「改訂版」）を、さらに終戦後の昭和二六年（一九五一）に再改訂版（以下「増訂版」）を同じく三省堂から刊行した。版ごとに内容に変更点がある旨は虚子が『新歳時記』内で明言している。この変更点、すなわち異同について、「熱帯季題」に関する先行研究は見られるものの、『新歳時記』三版間の季題の異同の全体像についてはまだ議論の余地を残しているように思われた。

第二節　高浜虚子編『新歳時記』三版種間の立項「季題」の異同とその傾向

本節では、『新歳時記』三版種間の異同を、立項「季題」の配列と有無の二つの観点から確認、検討した。まず三版間の立項「季題」の配列について見るに、異同は殆ど見られない。このことから、『新歳時記』初版の季題配列に対する、虚子の自信が窺える。次に立項「季題」の有無について確認すると、これも『新歳時記』全体の収録立項「季題」数からすれば、異同はやはり少ないと言えようが、いわゆる「熱帯季題」群がまず比較的大きな異同として指摘でき、それ以外にもわずかずつだが版によって立項「季題」の有無が認められる。

さらに、昭和二二年以降の奥付を持つ改訂版『新歳時記』に共通して、「入営」「徴兵検査」「大演習」「除隊」の四つの、軍事に関する「季題」が機械的に削除されている。つまり『新歳時記』改訂版には、戦後修訂版とも呼ぶべきものの存在が認められる。

このようなことから再確認すべきは、『新歳時記』における修訂、つまり軍事季題の削除と、より広範囲な改訂の問題を、同列に扱ってはならないということであると指摘した。修訂は、「季題」の選択に関する本質的な歳時記編者の意向とは関係なく実施され、改訂は、時勢に即しつつも新時代の季題としてどのようなものがふさ

わしいかを熟慮し取捨しようとする、編者の意識の表れであるとした。

第三節　外地を想定した「季題」

本節では初版と改訂版に見え、増訂版には見えない「パカチ」や「バナナ」などの「季題」を中心に異同について検討した。

まず朝鮮半島由来と考えられる「パカチ」などの例からは、虚子編『新歳時記』の立項「季題」の増補ないし削除の方針と、外地の誕生、拡大、喪失との関係性が、また、傍題、季題解説文、例句にまで及ぶ『新歳時記』の改訂・再改訂の緻密さが浮かび上がってきた。と同時に、虚子の、朝鮮はじめ大陸や新地への強い関心も見て取ることができた。

続いて「バナナ」の異同については、増訂版における「熱帯季題」の削除の背景として先行研究が指摘した、太平洋戦争敗北による日本の外地の喪失に起因するものと考えられる。つまりこれも、虚子の意図によって生じた異同であると考察した。

第七章　高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性

第七章は「高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性」と題し、高浜虚子編『季寄せ』を材料として、虚子の「新題」の扱いを二節に分けて論じた。

昭和一五年（一九四〇）六月に初版が刊行された高浜虚子編『季寄せ』は、虚子単独責任編集の最後の季寄せである。同書は、昭和九年（一九三四）一一月初版刊行以来のロングセラーである虚子編『新歳時記』に拠っている。

本章では、虚子編『季寄せ』について虚子生前の改訂の有無を明らかにし、さらに同書の改訂と虚子編『新歳

時記』の改訂の関係性を検討した。

第一節　虚子編『季寄せ』誕生の背景

本節では、虚子編『季寄せ』誕生の背景を確認した。虚子編『季寄せ』刊行は、三省堂側の編集依頼、それを受けての虚子側の編集受諾、両者の思惑の結果であったと推測された。

第二節　虚子編『季寄せ』の修改訂

本節では、虚子編『季寄せ』各版と虚子編『新歳時記』の各版の修改訂の流れを明らかにした。昭和一五年（一九四〇）の虚子編『新歳時記』改訂版刊行に遅れること数ヶ月、これに準拠した虚子編『季寄せ』が誕生した（以下「初版」）。やがて敗戦をうけて、昭和二二年（一九四七）九月頃、改訂版『新歳時記』が修訂されると、『季寄せ』初版もそれとほぼ同時期に修訂されたと見られる（以下「修訂版」）。その後、昭和二六年（一九五一）に『新歳時記』が再改訂され増訂版が刊行された頃、『季寄せ』にも改訂が行われた（以下「改訂版」）。そして、虚子没後の昭和三九年（一九六四）には、高浜年尾による改訂の施された『季寄せ』改訂版（以下「〈改訂版〉」）の刊行に至るのである。

『季寄せ』改訂版と『新歳時記』増訂版を比較すると、『季寄せ』改訂版が示す改訂の独自性が浮かび上がってくる。これを、虚子編の歳時記や季寄せに載せる立項「季題」の再考、整理をした結果であると見るならば、編者の時勢への敏感さをさらに裏付けることにもなり、注目に値する。

もしくは、『新歳時記』増訂版には歳時記用の、そして虚子編『季寄せ』改訂版には季寄せ用の、立項「季題」の取捨が行われた結果であると見るならば、昭和一五年の初版刊行以来、『新歳時記』の簡便版である以外に、積極的な存在意義があまり見出されてこなかった『季寄せ』に、ここで初めて、編者によって季寄せとしての新たな存在意義が見出されたということになり、やはり注目に値すると思われた。

第一章　明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に

第一章　明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に

はじめに

明治維新、文明開化、新時代の到来。明治の新事物を取り入れる動きが起こったのは、伝統的詩歌の世界も例外ではない。文明開化を扱った文学作品には、漢詩集の『日本開化詩』（1）（明治九年（一八七六））や、和歌集の『開化新題歌集』（2）（明治一一年（一八七八））、『明治開化和歌集』（3）（明治一三年（一八八〇））などがあり、広く当時の流行だったのである。

それでは俳諧においてはどうかというと、俳諧の場合、新事物の取り込みについて考える際には、発句と平句を区別して考える必要がある。そもそも俳諧とは、新しさや俗であることがその特質なので、新事物を取り込むことは必然的であり、平句の場合には特段問題なく新事物が取り入れられていったと考えられる。しかし、発句の場合は一筋縄ではいかない。発句の場合も、単なる素材として新事物を導入するならば、平句の場合と同様で特に問題はない。しかし、新事物を発句の主たる題として詠もうとするときには、季の問題を無視できなくなるのである。

この問題は、俳諧（発句）集編纂に際しても、困難さをもたらした。一句中の季語（4）を題と見て、それによって分類配列するという四季による分類が、近世以来の伝統的な類題発句集（5）の分類法であったからである。もっとも、近世類題集においても、季を持たない題を、蝶夢編『類題発句集』（安永三年（一七七四））、同編『新類題発句集』（6）（寛政五年（一七九三））などのように、「雑之部」を設けて処理している例は見られる。このような「雑」という句のまとめ方の存在が、今回取り上げる西谷富水編『俳諧開化集』（7）（明治一四年（一八八一））編纂の背景になったことも十分考えられるであろう。ただし、一般的に雑の部は四季部に

比して少数であり、例外的な扱いであったと思われる。また、特にその当時の新事物を題としたものでもない（8）。このような例が近世にあるものの、明治になって、新事物を題とした発句をどのように扱うかは大きな問題であったに違いない。題として取り込むには、原則的には季をもつものであることが最適であるからである。現に、明治期の旧派の類題句集のうち、新事物を題として取り込んだものの殆どは、四季部に行事題を取り込むにとどまっていることが報告されている（9）。

ちなみに和歌集はどうかというと、『明治開化和歌集』では、「新題」歌が四季部ではなく恋や雑の部に取り込まれている（10）。和歌集の場合、新事物を題として詠んだ和歌を、必ずしも四季に分類する必要はなく、雑など四季以外の部に分類すれば事足りたのである。ここに、俳諧、特に発句の新事物の取り込みにおける、他の詩歌との差異が出てくるのであった。

では実際、発句の場合はどのような方法で新事物を取り込んだのだろうか。季語以外の題のもとに詠まれた近世の発句の場合、一句において季語と題が分離するという現象が見られ、そのことは先学のすでに指摘するところであるが、明治期の作者が新事物を題として発句に取り込もうとした際にもこの、題と季語が分離するという様相がやはり見られるのである。

このことは先に示した近世類題集でも同様である。結果的にせよ、この方法が明治期の新事物を発句に題として取り込む上での先例となったと言えるのであろう。本章ではこのことを『俳諧開化集』を通して指摘する。さらに、発句の世界に取り込まれたはずの新事物が、なかなか季語化するには至らなかったことを、『俳諧開化集』前後の刊行の「季寄せ」の調査結果から指摘し、その背景を「季寄せ」という書物の性質と関連づけて考察する。

第一節　季を持ちやすい新事物と持ちにくい新事物

明治の新事物を題としておさめた類題句集の存在は複数知られているが、中でも題の収集の大規模なものとして知られるのは、西谷富水編『俳諧開化集』の「発句の部」（11）である。同書は発句の題がすべて明治の新事物で占められており、俳諧に取り入れられた明治の新事物を概観するには最適な書物と思われる（12）。同書の場合、まず新事物を題に据え、題ごとに句をまとめて配列している。題の並びは次のとおりである。

一月　一日　国旗　元始祭　陸軍始　陸軍　軍艦　御巡幸　皇政一新　皇国々体　敬神　愛国　天理
紀元節　春季祭　西洋餺　国法民法　太陽暦　靖国神社　楠公神社　神葬祭　公園　上野公園　山形公園
公園臨幸　自主自由　男女同権　僧侶妻帯　小学校　女学校　女教師　洋字　製糸所　秋蚕飼　媒助法
石筆　巻莨　摺附木　椅子　懐中時計　蝙蝠傘　靴　襟巻　勿大小　大和杖　玉転　玉突　千金丹
新聞紙　郵便　端書郵便　電信機　電信線　蒸汽車　鉄道　蒸汽船　飛脚船　川蒸汽船　灯台　瓦斯灯
洋灯　馬車　郵便馬車　人力車　人力車夫　風船　日曜日　写真　娼家写真　寄写真恋　娼家　黴毒検査
権妻　氷売　製氷　氷蔵　牛肉　牛乳　屠牛　開拓　新開地　士族　士族商法　帰農　地租改正　廃関
廃刀　天長節　神武天皇祭　神嘗祭　秋季祭　朝旨遵守　説教　耶蘇教　禁苑　華族独歩　博覧会
植物館　落花生　西洋覆盆子　博物館　上野新上水　船製造場　万国交際　貿易　輸出　石盤　玻璃
洋服　駆虫珠　西洋料理　西洋手品　油画　外人剃髭断髪　書生　書生羽織　巡査　水上警察　違式
裁判　勧解　代言人　徴兵　練兵　水雷火懲役　国立銀行　円金　米市場　午砲　祝炮　銕橋　万代橋
鎧橋　隧道　夜演劇　太陽暦二月閏　賞盃

また、「新題」を含む類題句集として『俳諧開化集』に先行する『古今俳諧明治五百題』（明治一二年（一八

八九）の場合には、「開化の部」を設けて（13）、新事物を題とする句はそこにまとめて掲載している。このように季語を題とする発句と、新事物を題とする発句を別立てにしている理由には、新事物を詠み込むという新しい課題を際立たせるという面があったであろう（14）。が、そればかりではなく、「新題」は四季による伝統的な分類に組み入れにくいという面もあったと思われる。

同じことは、発句という作品の分類ばかりでなく、題とされた新事物を示す語の扱いにも言えるであろうから、一句の題となりうる季語の集積である「季寄せ」における分類でもやはり、同様の悩みに苛まれたと想像される。このように考えると、新事物そのものが季を持ちうるか否かが、この扱いをめぐる一つの鍵になってくる。そこで以下、新事物を表す題が、季の問題とどのようにかかわって処理されていったのかを軸として、新事物の取り込みの諸相を見ていきたい。

左は、初の太陽暦句集である『ねぶりのひま』（15）（明治七年（一八七四））が、季語として取り入れた新事物を列挙したものである。

一月一日（一日）・元始祭・陸軍始・海軍始・三十一日

ここで挙げた新事物に共通しているのは、すべて「新行事（16）」である点である。これらの語が比較的早い時期に季語になり得たのは、行事であるがゆえに実施日が定まっており、したがって季が定まりやすかったためだろう。季の定まった新事物が「季寄せ」に取り込まれるのは、俳諧の横題からの伝統といえる。新事物のうちでも「新行事」の場合には、おのずと季が定まる。『俳諧開化集』「発句の部」の「新題」の中では、先の一覧中、四角囲みにしたものがこれに当たる。

しかし、『俳諧開化集』の一覧を見ると、新事物の中で、「新行事」のような季の定まりやすい語は少数であ

ることがわかる。残る題は、季を確定できないものが殆どである。それでは季を持ち得ない新事物は、どのようにして発句に題として取り込まれたのだろうか。以下、『俳諧開化集』においては、「新行事」以外の新事物が、一句の題として発句にどのように取り入れられているのかを見ていきたい。

『俳諧開化集』は、明治の新事物を題とする発句を集めた「発句の部」と、俳諧（連句）、俳文から成るが、先に確認したように、季の有無が大きな問題になるのは発句である。よって、ここでは「発句の部」を中心に取り上げ、各句において、題としての新事物がどのように処理されているのかを見ていきたい。

第二節　『俳諧開化集』「発句の部」の「新題」の処理

（一）　季語になりうる可能性をもつ「新題」の場合

左は『俳諧開化集』「発句の部」における、「西洋餝」を題とする句の全部である。

① 樫の葉も常磐の色よ門飾　漣々
② 青柴に木の実もまぜて門かざり　蘆水
③ 交りの丸きを門のかざりかな　菟好（17）

「西洋餝」とは「祝祭日などに、造花、テープその他を用いてつくりあげるアーチ式の装飾など」（18）のことである。河竹黙阿弥の歌舞伎「朝日影三組杯觴（憲法発布）」にも用例が見られることから（19）、一般的には正月に限った飾りではなかったとうかがえる。しかし、「西洋餝」の句群を見ると、いずれの句も「門飾」という正月の季語を詠み込んで新年の句に仕立てていることがわかる。

これらの句が「門飾」という季語を用いている理由としては、「飾」という語が共通しているという点、「門」という語がアーチを匂わせる効果を持つという点、どちらも祝日に飾られるという点など、特徴に共通点が多か

ったという面もあろうが、発句としての条件を満たすために季語が必要だったという面もあるだろう。

さて、①の句は、樫の葉も、一般的な門飾に使われる松などのように常緑であるので、門飾に相応しいと詠んだ句である。②の句は、青柴に木の実も取り混ぜて門飾としたという句である。③の句は、アーチ型の門飾を近隣との交流の円満さの象徴とした句である。このように三句はいずれも門飾のことを詠んだ句である。これを踏まえると、各句は「西洋餝」を、①、②の句では材料の面で、また③の句では形状の面で特殊な、「門飾」として表現していると解せる。つまり、「西洋餝」を「門飾」の一種のように捉えて、「門飾」の中に含み込もうとする態度がうかがえるのである。

これらの句には、句作の段階では、単に「西洋餝」と言葉や意味、用途が似通っていて、句作に都合が良いという理由で、「門飾」という季語が選ばれただけかもしれない。しかし、「門飾」を使って「西洋餝」を表現した句が詠まれたことによって、さらにそういった句に新年の季を認めていたらしい編者が三句まとめたことによって、結果的に特定の季を持たないはずの「西洋餝」に新年の季が付加しうる状況が生まれていると言えるのではないだろうか。この事情は史的展開から見れば、「西洋餝」という季語の成立のはじめと捉えうる様相を呈していると言えるのであろう。

同じように、一見季感に乏しい「新題」ではあるが、『俳諧開化集』においては季を見いだせる可能性を秘めている「新題」に、「太陽暦」がある。左は『俳諧開化集』「発句の部」における、「太陽暦」を題とする句の全部である。

① ふりかはる世や初雪を年の花　可尊
② 陽暦やおよそ去年とおなじ事　楓光
③ 吾国にゆかりある名よ日の暦　文礼

④　大陽のこよみ　ふくしぬ小百姓　可有
⑤　あらたまる今やまことの初日の出　梅宿
⑥　春近くまつ新年の柳哉　涼坪
⑦　金神もなくて陽気や初暦　等栽
⑧　夕月を三十日に見たり花の上　唫風

先に挙げた「新題」の一覧表からも分かるとおり、「太陽暦」の句は二カ所に分かれて収録されている。具体的には、①から⑦までの句が「発句の部」の比較的冒頭近くに収められ、⑧の句のみが末尾近くに収められている。後に触れるが、この配列にも注意が必要だろう。

この「太陽暦」を題とする句群では、題の「太陽暦」以外に季語を用いていることがわかる。ただし、「太陽暦」の例句の場合、「新題」の「太陽暦」が単語として現出する機会は少なく、むしろ⑥に代表されるように、一句全体で題の「太陽暦」を表現する例が多い。これは「太陽暦」を語として捉えることの困難さを示したものだろうが、ここではこの問題は重視しないことにする。

この点を留保しておいて、この句群においては②③④の三句が、それぞれ「陽暦」(②)、「日の暦」(③)、「大陽のこよみ」(④)という、「新題」「太陽暦」にあたる単語を詠み込んでいる。それでは季はどうであろうか。まずは①から⑦までの一連の句群について検討する。

①の句では、季語は「初雪」と「年の花」の二つある。「初雪」は冬の季感をもち、「年の花」は新年のことであるので新年の季感をもつが、一句全体は、旧暦から新暦に交替したことで、旧暦の折には旧年に迎えていた初雪を新年に迎えるようになったと詠んでおり、新年の句と見ることができる。②の句でも、「去年」に新年の季感が認められるので、新年の句と見ることができる。⑤の句は、太陽暦に改まった今迎える初日の出こそ、ま

さしく初日の出だという句であるので、これも新年の句と見ることができる。⑥の句では、「春近し」「新年」「柳」と、季語が三つ並んでいる。この句は、旧暦の折には新年を迎えることは春を迎えることであり、同時に柳の季節を迎えることでもあった。しかし新暦に変わった今は、新年に遅れて春がやってくるので、新年を迎えた柳は春を心待ちにしているという句意である。よって、新年の句と見ることができる。⑦の句の季語は「初暦」である。金神とは陰陽道の方位神であるが、新暦では意識されにくくなった。よって一句は、金神の記載がなくなって陽暦の初暦はまさに陽気だ、という意であるので、新年の句と見ることができる。

以上検討してきたように、「太陽暦」の一連の句群の中で、①②⑤⑥⑦は新年の句であると認定できる。そうであれば、一見季感に乏しく思われる③④の二句も、新年の句として処理されていた可能性が考えられる。「太陽暦」という題には新年の季感が付加されたと見なしてもよいかもしれない。

問題になるのは⑧の句である。旧暦は月の運行を基準にしているため、旧暦の三十日に月が見えるということはありえなかったが、新暦では三十日の夕方に、月を花の上に見上げることもあるものなのだという句であり、春の句であると見ることができる。しかし、今まで確認してきたように、「太陽暦」の他の例句は悉く新年の句と見なせた。そのような中で『俳諧開化集』の編者は、⑧の句を例外とする立場をとっていると考えられる。その態度が、⑧の句のみを別個に収録している点に端的に表れているのであろう。

つまり、『俳諧開化集』においては、「太陽暦」はそれ単独では未だ、季語として確立していなかった。それが、③④を除く句で他の季語を必要とした理由であった。しかしながら、③④のように、「太陽暦」単独で新年の季感を持つと見なされつつもあった。『俳諧開化集』はその過渡期の様相を呈していると言えるのであろう。

以上述べてきたように、「西洋餝」や「太陽暦」を題とする句の場合は、多くの句が題以外に季語を用いて発句の条件を満たしていた。また、例句の季はほぼ統一され、一見無季に見える句の場合も、その配列から季を推定しうるものであった。新事物全体から見るとこのように、比較的季が定まりやすい場合には題と季が一致し、

発句に取り込まれる際も大きな問題は起きないと言えるのであろう。

（二）　季語になりえない「新題」の場合

1　有季句の場合

では、次の場合はどうであろうか。左は『俳諧開化集』「発句の部」における、「自主自由」を題とする句の全部である。

① 起ふしも心がまゝや花の宿　錦岱
② 木戸明て置て汲すや苔清水　藍庭
③ 御所よりも鮓屋の早し青簾　帰童
④ 寝やうとも心まかせやすゞみ台　砥竹
⑤ 何事も心に足りて花の春　千瓢

まず一見して明らかなように、例句五句すべてに共通して、「自主自由」という単語は詠み込まれていない。①の句では「心がまゝ」、④の句では「心まかせ」といった言葉で、その他の句は一句全体で、題である「自主自由」を表現しようとしている。これは、「自主自由」を語として捉えることの困難さの現れであろう。

次に、季について見ると、季語が、いずれの句にも入れられている。これは、題である「自主自由」自体には季感を認めにくいということを意味している。さらに、傍線部の季語から、①の句には春、②の句には夏、③の句には夏、④の句には夏、⑤の句には新年の季感をそれぞれ看取できるが、例句全体を通してみると、季が共通していないことがわかる。このように、「自主自由」はそれ一語では捉えにくく、元々季感を認めにくい語で

ある上に、例句の季も一定でない。以上を考え合わせると、「自主自由」という題に特定の季が付加する可能性は、極めて希薄であると考えられる。すなわち、各句は、季を従来の季語で処理しつつ、一句の題にはあくまで新事物を据えているのである。

同様の傾向を示す題として「男女同権」がある。左は、『俳諧開化集』「発句の部」における、「男女同権」の例句の全部である。

① 木も草も同じ芽出しや春の雨　甚一
② 梅柳どちらも賢なあるじ達　正哉
③ ならはねばならぬものかもつがひをし　弄山
④ はしたなき身こそ安けれとも稼　可学
⑤ 色や香やいづれ劣らぬ桃桜　梅宿

こちらの句群の場合も、「男女同権」という単語を詠み込むのではなく、「同じ芽出し」（①）、「どちらも賢な」（②）、「つがひ」（③）、「とも稼」（④）、「いづれ劣らぬ」（⑤）といった表現で、「男女同権」という題を表現しようとしていることがわかる。やはり「男女同権」についても、これを語として捉えることの困難さがうかがえる。

次に、季について見ると、④を除くすべての句に、季語が入れられている。さらに、傍線部の季語から、①の句には春、②の句には春、③の句には冬、⑤の句には春の季感がそれぞれ認められるが、例句全体を通してみると、やはり季が共通していない。以上を考え合わせると、「男女同権」という題に特定の季が付加する可能性は、極めて希薄であると思われる。するとここでも、季は従来の季語で処理しつつ、一句の題にはあくまでも新

事物を据えているという状況を見てとれる。

発句にその句の題ではない季語が入って、季を必要とする発句の条件を満たすという詠み方は、季語であると同時に一句の題でもあるという「季題」の概念からすると、考えにくいことである。しかし、ここまで見てきたように「自主自由」「男女同権」の例句の場合、季語は一句の題にはならず、題と季語とは分離した存在になっていると言える。

では、季感に乏しい事物を題に据えた発句というものはかつて詠まれなかったのだろうか。実は、本稿「はじめに」でも述べたように、題と季語の分離は目新しいことではなく、近世にはすでに見られる詠み方である。清崎敏郎は、季語以外に題を持ち、季語自体は題を生かす有力な手段になっているというタイプの句は古今少なくないとし、例として、芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」や、一茶の「春雨や喰はれ残りの鴨が鳴く」を挙げ、それぞれ「立石寺の静けさ」、「鴨に寄せる憐愍の情―言いかえれば、それを捕って食う人間どもに対する怒り―」を題だとしている（20）。

ここで例に挙げられている芭蕉句は、『おくのほそ道』において「山形領に立石寺と云山寺有。〈略〉岩に巌を重て山とし、松栢年ふり、土石老て、苔なめらかに、岩上の院々扉を閉て、物の音きこえず。岸をめぐりて岩ヲ這て、仏閣を拝し、佳景寂莫として、こゝろすミ行のミ覚ゆ」（21）に続くものとして詠まれており、文中の「物の音きこえず」「佳景寂莫」が句中の「閑さ」に対応することがわかる（22）。この句の題は季語である「蝉」ではなく「立石寺の静けさ」にあるとした清崎の説は、首肯できるものであると思われる。よってこの句は、季感に乏しいことを題に据えた、季語と題の分離している句の例であると見ることができよう。

一茶句の大意は春雨の中鴨が鳴いているというもので、季語は「春雨」である。「喰はれ残り」とは、ここでは人に喰われた生き残りという意味で解釈されており（23）、この句は、鴨が捕食という残酷な死を迎える運命だという前提に立って詠まれているものと思われる。よって季語である「春雨」ではなくこの「喰はれ残りの鴨」

の方に一句の題があるという清崎の説は首肯できると思われる。なおこの句の場合、題である「鴨」が季感に乏しいとは言い難いものであるが、先述したように「喰はれ残りの鴨」では不明確かつ不十分な季感を「春雨」が補っていると言えるので、季感に乏しい事物を一句の題に据えている例に準ずると見てよいと思われる。

このほか、蕪村の句会においても、兼題以外に探題が出題され、「ときには季節とは無縁な〈物〉が題として列挙され」たという指摘がある（24）。このようにして詠まれた句の場合もやはり、題以外に季語が詠み込まれて一句を成すことがあったのではないかと想像される。

さらに近代に入って明治三六年（一九〇三）には、森無黄が発句における季語と題の分離を問題にする論を発表している（25）。この中で無黄は、「雑題」と「季題」という言葉を用いて、発句の事実上の題以外に、一句に季をもたせるための季語を詠み込む手法があることを指摘し、それを「傍用法」と名付けた。加えて筑紫磐井氏は、無黄のこの論を引用した上で、「元々、従来の「季の題」とは「主題」・「季題」未分離のところで名付けられていたものである。しかし、題詠が全盛となり、「題」に対する検討が進んだ結果、「主題」「季題」の分離が完成する」（26）とした。この指摘は非常に重要であり、『俳諧開化集』「発句の部」の「自主自由」「男女同権」といった、季を持ち得ない題の例句の特徴は、まさにこれに当てはまると言えよう。

このように、題と季語を分離させるという近世以来の句作法が、明治の季感に乏しい新事物をも、題として発句に取り込むのに一役買ったと考えられるのである。

2　無季句の場合

ここまでは、題とは別に季語を詠み込むことで、発句としての条件を満たす例を見てきたが、実はそれ以外に、『俳諧開化集』は無季の句も多く収めている。『俳諧開化集』の無季の句の多さは特徴的で、櫻井武次郎氏も解題でその点に触れている（27）。ところで、『俳諧開化集』「発句の部」の句の場合、「新題」を詠むことに眼目

があるので、必然的に、すべての句が題を持っているということになる。よって、これから取り上げる無季の句とは、題のみをもち季は持たない句ということになる。

左に挙げるのは『俳諧開化集』「発句の部」における、「石筆」「銕橋」の例句のそれぞれ全部である。

石筆やまさりおとらぬ墨の色　　宇雀
世を安くわたるしるしか銕橋　　唫風

この二句は、今日の感覚で言うと季感に乏しい。そこではじめに、これらの句が本当に無季かを検討する。具体的には、配列から季を読み取ることはできないかを考える。まず、「石筆」「銕橋」ともに、題に対して例句が一句ずつしかないので、「太陽暦」のように句群から季を推測することは不可能である。では前後の題の配列から季を見いだせないか、それを検討した上で、本当に無季句として読むほかないのかを判断しようと思う。

まず「石筆」の場合、試みに前二つの題を抜き出してみると、「秋蚕飼」「媒助法」である。それぞれ例句は①「年毎にひらくる秋の飼屋哉」②「津田縄に実のる頼みぞ稲の花」で、傍線を付した語から、共に秋の句であると分かる。続いて、後ろ二つの題も抜き出してみると、「巻莨」「摺附木」である。「巻莨」の例句は①「眼の先に霞みたつ也巻莨」②「風にちる灰のすゞしや巻莨」③「初秋の夕田めぐるや巻たばこ」の三句である。①の句は巻莨の煙を霞に喩えたもので季感は薄いが、「煙立つ」と詠まずに、あえて「霞みたつ」という表現をしているところから、春を想定して作られていると考えられなくもない。ほか、②の句には夏、③の句には秋の季感を見て取れる。

このように、「巻莨」の三つの例句は季が共通しておらず、よって「新題」「巻莨」に季感が付加されていると見ることは、『俳諧開化集』においては極めて困難である。後に扱うのでここでは重複を避けるが、「巻莨」

に続く「摺附木」の場合も、例句の季が共通していないので、季感が付加されていると見ることは難しい。このように考えてくると、「秋蚕飼」「媒助法」「石筆」「巻莨」「摺附木」という一連の流れから、「石筆」の句に季感を見いだすことは困難で、同句は無季だという結論に至る。

続いて「銕橋」の場合、前二つの題を抜き出してみると、「午砲」と「祝砲」である。「午砲」の例句は①「筒の音に覗く時計や日の永さ」の一句、「祝砲」の例句は②「雲のみね浜の祝砲きこえけり」、③「祝砲の音ものどかや春の海」の二句である。傍線を付した語から、それぞれ①の句には春、②の句には夏、③の句には春の季感が認められ、この三句は季が共通していないことが分かる。よって、「午砲」「祝砲」「銕橋」と続く流れからでは、「銕橋」に季感が付加されていると見ることは難しい。では反対に、「銕橋」の後に続く「万代橋」「鎧橋」の例句から遡って、「銕橋」の季を考えることはできないだろうか。「万代橋」の例句は①「都の秋は見えぬなり眼鏡橋」、②「橋の名の万代かけしめがね哉」の二句、「鎧橋」の例句は③「春雨の蓑の雫やよろひ橋」の一句である。傍線を付した語から、①の句には秋、③の句には春の季感が認められ、この三句も季が共通していないことが分かる。以上検討してきたように、「銕橋」の場合も、「午砲」「祝炮」「銕橋」「万代橋」「鎧橋」という一連の流れからでは、「銕橋」の句に季感を見いだすことは困難であり、同句は無季だと言わざるを得ない。

これらの句のように、「新題」を単語として一句に含み、季語は持たず、かつ例句の配列からも一句に季を認められない句の例は、『俳諧開化集』「発句の部」における、「摺附木」の例句の全部である。

左は、『俳諧開化集』「発句の部」における、「摺附木」の例句の全部である。

① むし鳴や摺こぼす火の片明り　連水
② 摺殻の附木流るゝ清水哉　魯石
③ 露の野に湿りも呼ず摺附木　藍庭

④　旧聞のかねて用意や摺附木　松屋
⑤　寝莨の弁利は是よ早つけ木　梅里
⑥　水もこの自由ありたし摺附木　閑茶
⑦　野遊びの間にもあふ也摺附木　よし彦
⑧　風すゞし莨もつかぬすり附木　可洗
⑨　手の内や涼ミ河原の稲光り　富水

「摺附木」とはマッチのことで、「早付木」ともいう。つまり「摺附木」の例句群のうち、④⑤⑥の三句は、題である「摺附木」という語をそのまま句の中に詠み込んでいる句ということになり、かつ、この三句は季感に乏しい。では、「太陽暦」の例句のように、例句の配列から季を見いだすことは出来ないかと考えると、それも難しい。というのも、傍線を付した語を参考に各句の季を検討すると、例句は順番に①秋の句、②夏の句、③秋の句と続き、さらに季感に乏しい三句を挟んで、⑦春の句、⑧夏の句、⑨夏の句（28）、と並んでいて、結果、全句の季が共通していないからである。④⑤⑥の三句は、やはり無季の句と言わざるをえない。

無季ということは、『俳諧開化集』「発句の部」の句の場合、題のみを持ち季を持たない句という意味であるということは先に述べた。題のみで季を持たないというのは、広い意味で、題と季語が分離しているということだと捉えることができる。

以上見てきたように、『俳諧開化集』の句は、有季句であっても、題と季の語が別である場合が多くあり、無季句の場合は初めから題と季とは無関係というあり方で詠まれたものであると判断しうる。明治の新事物の題としての発句への取り込みの多くは、このような方法をもって成されたのである。そしてこの方法を支えた大きな要因の一つは、先述したように、近世以来行われてきた、発句において題以外に季を詠み込むという手法であっ

たと思われる。

第三節　季寄せにおける新事物の取り込み

ここまで、明治の新事物を多く発句の題として取り込んだとされる、『俳諧開化集』での新事物取り込みのあり方を検証してきた。そこでは題と季語の分離という様相のあったことを指摘したが、それでは、明治の新事物が、ただの題ではなく季語として、つまり一句の題にも季語にもなりうる語として、発句の世界に取り込まれ、認知されたかについてはどうであろうか。そこで一つの基準として、『俳諧開化集』と同じ時期に刊行された「季寄せ」に、明治の新事物がどのように取り込まれているかを見ていくこととする。調査対象としたのは左の「季寄せ」である。

①先出『ねぶりのひま』（表中「①ねぶりのひま」）
②『俳諧貝合』能勢香夢編、明治七年八月、福井酒井文栄堂（表中「②俳諧貝合」）
③『新編俳諧題鑑』横山利平著、三森幹雄校、明治九年二月、三森幹雄・伊藤有終刊（表中「③題鑑」）
④『明治増題俳諧新部類』浜真砂著、岩波其波校、明治十三年三月、上諏訪藤森平五郎刊（表中「④新部類」）
⑤『新題季寄俳諧手洋灯』萩原乙彦編、明治十三年六月、千葉正文堂・東京玉海堂（表中「⑤手洋灯」）
⑥『明治新撰俳諧季寄鑑』山内梅敬編、花之本芹舎校、明治十三年七月、京都隅永真助刊（表中「⑥季寄鑑」）
⑦『俳諧発句早合点』萩原乙彦著、明治十四年三月、静岡文正堂（表中「⑦発句早合点」）
⑧『新撰掌中俳諧季寄大全　乾』明治十五年一月、松田文書堂（表中「⑧季寄大全」）
⑨『季寄部類俳諧発句早学』秋月亭寛逸編、清水庵五岳閲、明治二十五年九月、弘業舘（表中「⑨発句早学」）
⑩『絵入俳諧季寄手引草』一事庵史栞編、細鱗舎松江閲、明治二十六年一月、弘文舘（表中「⑩季寄手引草（29）」）

次の表は、『俳諧開化集』「発句の部」が題とした新事物の、各「季寄せ」における収録状況をまとめたものである。

【表】明治新事物の季寄せへの収録状況

	一月	一日	元始祭	紀元節	陸軍始	春季祭	神武天皇祭	秋季祭	神嘗祭	天長節	氷売
①ねぶりのひま 明治7年	△	△	○	×	○	×	×	×	×	×	×
②俳諧貝合 明治7年8月	○	×	○	○	×	○	○	○	×	○	×
③題鑑 明治9年2月	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○
④新部類 明治13年3月	×	×	○	×	×	○	○	○	×	○	×
⑤手洋灯 明治13年6月	△	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
⑥季寄鑑 明治13年7月	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦発句早合点 明治14年3月	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×
⑧季寄大全 明治15年1月	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑨発句早学 明治25年9月	△	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×
⑩季寄手引草 明治26年1月	△	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×

〈凡例〉
『俳諧開化集』「発句の部」の新題のうち、いずれの「季寄せ」にも無い新題は表に載せていない
○：有
×：無
「一月」の△：一季語ではなく部立名として登場
『ねぶりのひま』の「一月」「一日」の△：「一月一日」として登場

これを見ると、やはり行事題程度しか取り込んでいないことが分かる。

行事以外のものとしては「氷売」がある。この語は『俳諧開化集』では「新題」扱いとなっているが、氷売が現実に、社会的に広まった時期はともかくとして、淡水亭伸也『合類俳諧忘貝』（弘化四年（一八四七））にすでに見られる語である（30）。つまり、近世に季語と認められた実績があったということであるので、明治の「季寄せ」に収録されている理由を、近代の新季語として認められたためであると断定することはできない。

ではなぜ「季寄せ」における新事物の取り込みは、行事題程度にとどまっているのであろうか。先に検討したように、「西洋餺」や「太陽暦」には、少なくとも『俳諧開化集』においては、季が付加していると見えなくもない状況にあった。にもかかわらず、「季寄せ」が新事物を積極的に取り込まないのはなぜだろうか。

それは、「季寄せ」という書物の性質によるものではないかと思われる。「季寄せ」は、季語のうちでも、和歌以来の伝統のある語を特に縦題と呼んで、主軸に据える。また、これはむしろ「季寄せ」というより、「歳時記」の特徴というべきことであるが、故事を載せ、季語が伝統に根ざしたものであることを裏付けようとする。このような「歳時記」での語認識と重なる性質を持った「季寄せ」においては、やはり季語のもつ伝統ということを軽視できない。そもそも、季というものは約束事であり、少なくとも、その「季寄せ」の享受者の間では、共通認識でなければならないのであるから、あやふやな季感の事物は、どうしても「季寄せ」に取り込みにくいのである。ましてや、前章までで述べたように、季を認識しにくい「新題」を、「季寄せ」に登録することは不可能である。

これは翻って考えると、「季寄せ」や「歳時記」を重んじる限り、目新しいことを詠みづらかったということではないだろうか。

俳句革新運動を起こし、かつ様々な著作や大部な俳句分類を残した正岡子規に、「季寄せ」や「歳時記」に関しては著作がないことも、このことに関わっているのかもしれない。

おわりに

発句が明治の新事物を取り入れるには、宿命的に、題と季の兼ね合いの問題を乗り越えなければならなかった。季語と題を分離させるという近世以来の発句の詠み方が、季感に乏しい事物を題として取り込むにあたっては特に、解決の一助とはなったものの、こうして漸く発句に取り込まれ得た新事物も、「季寄せ」に取り込まれるにはなかなか至らなかった。新事物が季語として季寄せに取り込まれるとは、季を認められたというばかりでなく、一句の題にもなりうると認められることであり、言うなれば、分離した季と題を再び結びつける意味合いを持つことである。そこで、ここでもやはり、新事物は題と季の狭間で揺れ動くこととなった。このように考えてくると、俳諧の世界に新事物を取り込むことは、一見容易なことに見えて、実は題と季の問題にぶつかりやすく、難しい面もあったと言えるのであろう。『俳諧開化集』で検討した題と季の問題の複雑な様相は、そのことを示しているに違いない。

本章では、明治の新事物が発句の「新題」になる事象について、子規の活躍する明治二五年以前のあり方を中心に見てきた。本章で確認した内容を前提として、第二章、第三章では、「新題」をめぐる子規の取り組みや姿勢について見ていくこととする。

第二章　子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に

第二章　子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に

はじめに

正岡子規は明治二五年（一八九二）からの俳句革新を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。

その際、子規が何を基準に旧派を「陳腐」と判じたのかについては、青木亮人が「古人の類句」の多寡がその基準となった形跡があると指摘している（1）。この点から言えば、単純に考えて「古人の類句」が理論上殆ど存在し得ない明治の「新題」を季語（2）として詠んだならば、「新奇」な句になり得たはずだという推測も成り立つ。ところが、明治三一年（一八九八）、子規の校閲による日本派初の類題句集『新俳句』の「新題」採用状況を見ると、先行する旧派の類題句集と比較してかなり慎重である。

子規の新季語採用の慎重な姿勢については、『新俳句』（3）についてに限らず、これまでも先学が指摘している。柴田奈美は、「バナナ」、「ラムネ」などの新季語を個別に検討し、それぞれについて市民生活や文芸作品への定着を見極めた上で新季語として発表している点で、子規の慎重さと革新性を指摘できるとした（4）。

確かに、「新題」の季語としての採用の問題については、新季語を個別に見るという視点ももちろん重要である。が、新季語を性質や傾向で分類し、傾向ごとに分析する視座も必要ではなかろうか。つまり、本章で扱う「新行事」のように、季の定まりやすいはずの語、「風船」などのように、季の定まった過程の判然としにくい語、その中間的な存在で、「手袋」のように、感覚的に季が分かるが、暦に裏打ちされている「新行事」ほどは明確な季感の後ろ盾を持たない語などのように、新季語をいくつかの系統に分類し、各々について検討することも必要なのではないかと考える。本章ではその第一歩として、特に明治の「新行事」を詠んだ句に焦点を当て、子規

の旧派批判の根底にあった意識や俳句への新季語導入に対する意識について考察を試みたい。なお、他の傾向の新季語の問題や、秋声会はじめ他の新派の動静については、別稿を期したい。

なお、本章でいう「新行事」とは、明治の新行事や政府によって復興された行事に加え、「一月」「一日」など、行事とは言い難いが実施日が定まっている点で行事と共通するものまで含めることとする。

さて、左は、明治三〇年（一八九七）三月八日、子規が虚子宛てに書き送った手紙の一節である。

三川の発起にて「日本」の俳句等を出版せん（民友社より）との事小生も賛成致候冬の部だけ先づ版にせんとて小生只今校閲中也

此中へ冬帽　手袋　やきいも　毛布　襟巻　冬服　ストーヴ等の「新題」を季ノ物と定メテ入れんとす　貴兄も此題にて御つくり被下度御送附願上候　尤も最初の事故之を季に入れたりと見するにハ他の冬の季を結ばぬ方よろしと存候（5）

『新俳句』は、先学が指摘するように子規が選句に深く関与していることや（6）、また右の手紙の中で子規が冬の「新題」を「季ノ物」として取り込むことを画策していることから、題や句の選定に子規の当時の見識や意向が色濃く反映されたものと考えられる。したがって、当時の子規の新季語に対する意識を考察する上でも重要な資料と位置づけられるだろう。

『新俳句』は書名に「新」を冠しながらも、「一月」を春とする旧暦準拠の体裁をとっており（7）、また「新題」の採用も冬季に集中していて（8）、先行する旧派の歳時記や類題句集に比して限定的だという特色を持っている。

季の問題が絡んでくる他の「新題」と違って、実施日が定まっている「新行事」は、季語としても取り込みや

すかったと思われる。現に子規自身も次のように述べている。

古来季寄に無き者も略々気候の一定せる者は季に用ゐ得可し。例へば紀元節、神武天皇祭等時日を一定せる者は論を竢たず。（9）

また、後掲するが「天長節」等については子規自身の句作例も残っている。しかし、『新俳句』での「新行事」題の立項は「クリスマス」「一月」の他見られない。

それに対し、旧派では当時すでにこれら「新行事」題を類題句集や季寄せに多く取り入れていた。旧派の明治「新題」の取り込みの姿勢は明治一〇年前後から確認できる。例えば、明治一四年（一八八一）刊、教林盟社周辺で編まれたとされる『俳諧開化集』（10）は、旧派の中でも先進的かつ網羅的に「新題」を取り込んだ類題句集であるが、これは下巻の「発句の部」（11）に一三九の「新題」を立項している。そのうち「新行事」題にあたるものは左の表に掲げた十一題のうち、「クリスマス」以外の一〇題である。

【表】旧派季寄せ等における「新行事」題の採用状況

①『ねぶりのひま』（12）四睡庵壺公編、明治七年（表中「①ねぶりのひま」）※太陽暦による初の句集
②『俳諧貝合』能勢香夢編、明治七年八月、福井酒井文栄堂（表中「②俳諧貝合」）※太陽暦による初の季寄せ
③『新編俳諧題鑑』横山利平著、三森幹雄校、明治九年二月、三森幹雄・伊藤有終刊（表中「③題鑑」）
④『明治増題俳諧新部類』浜真砂著、岩波其残校、明治一三年三月、上諏訪藤森平五郎刊（表中「④新部類」）
⑤『新題季寄俳諧手洋灯』萩原乙彦編、明治一三年六月、千葉正文堂・東京玉海堂（表中「⑤手洋灯」）
⑥『明治新撰俳諧季寄鑑』山内梅敬編、花之本芹舎校、明治一三年七月、京都隅永真助刊（表中「⑥季寄鑑」）

⑦『俳諧発句早合点』萩原乙彦著、明治一四年三月、静岡文正堂（表中「⑦発句早合点」）
⑧『新撰掌中俳諧季寄大全　乾』明治一五年一月、松田文書堂（表中「⑧季寄大全」）
⑨『季寄部類俳諧発句早学』秋月亭寛逸編、清水庵五岳閲、明治二五年九月、弘業舘（表中「⑨発句早学」）
⑩『絵入俳諧季寄手引草』一事庵史栞編、細鱗舎松江閲、明治二六年一月、弘文舘（表中「⑩季寄手引草」）

【表】明治「新行事」題の旧派季寄せ等への採用状況

	一月	一日	元始祭	紀元節	陸軍始	春季祭	神武天皇祭	秋季祭	神嘗祭	天長節	クリスマス
①ねぶりのひま 明治7年	△	△	○	×	○	×	×	×	×	×	×
②俳諧貝合 明治7年8月	○	×	○	○	×	○	○	○	×	○	×
③題鑑 明治9年2月	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	×
④新部類 明治13年3月	×	×	○	×	×	○	○	○	×	○	×
⑤手洋灯 明治13年6月	△	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
⑥季寄鑑 明治13年7月	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
⑦発句早合点 明治14年3月	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×
⑧季寄大全 明治15年1月	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑨発句早学 明治25年9月	△	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×
⑩季寄手引草 明治26年1月	△	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×
新俳句 明治31年3月	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○

〈凡例〉
○：有
×：無
「一月」の△：いち季語ではなく部立名として登場
『ねぶりのひま』の「一月」「一日」の△：「一月一日」として登場
『新俳句』の「一日」の×：「一日」ではなく「元日」として立項
『新俳句』の「天長節」の×：立項なし。「秋詞書之部」に「天長節」を前書とする3句はあり

右の表は、これらの「新行事」題が、『新俳句』に先行するいくつかの旧派の季寄せや類題句集でも立項しているかをまとめ、傾向を概観し、さらに『新俳句』と比較したものである。ここからは、旧派のとる傾向に比して、『新俳句』の「新行事」題の採用態度がかなり消極的であった様相が窺える。

第一節　旧派の「新行事」詠―『俳諧開化集』を中心に

では、旧派の「新行事」詠は、実際のところ、どのようなものであったのだろうか。本節では当時の旧派の傾向を知る上でも、旧派なりに先進的な傾向を知る上でも適当な書と考えられる『俳諧開化集』「発句の部」の収録句を中心に取り上げ、旧派の「新行事」詠の特色について検討したい。

左は、『俳諧開化集』の「一月」項の句の全部である。

①一月や長閑とおもふ気はこゝろ　詢蕘斎
②山家へも来る一月や梅つばき　二洲
③一月を冬ともせぬや梅の花　左岳
④一月はまたあたらしき寒さ哉　文礼
⑤一月や寝倦しやうな牛の臭　唫風
⑥一月と成けり雪の中ながら　梅宿
⑦一月の床や寒菊添て花　林華

「一月」は年頭の月を新暦で指す呼称で、旧暦では「正月」と言うのが一般的であった。『俳諧開化集』と同じく教林盟社周辺で編まれたとされる『ねぶりのひま』の「新年の題」の一覧の末尾には、「正月又は元日、御

代の春、けさの春の類を用ひて、流行おくれの名をとる事なかれ」と書き添えられているので、教林盟社社中では特に「正月」は旧暦、「一月」は新暦が強く意識されたものと考えられる。

続いて、煩雑ではあるが、各句が「一月」をどのように句の中に詠み込み処理しているかを見ていきたいと思う。

①の句には、「一月」以外に「長閑」という春の季語も詠み込まれている。句意は、新暦の一月は実質まだ冬であるのに、つい長閑な気がしてしまうというものである。しかし、その前提には旧暦の正月が春であったという事実がある。そのために「一月」と聞くと旧暦の「正月」が想起されるのであろう。つまり、この句の作者は、旧時代の常識を捨て切れていないものと読みとれるのである。このような傾向は他の句にも看取される。

例えば③の句は「一月」を冬と思わずに、春の花である梅の花が咲いているという句意であるが、これも元々旧暦の正月が春であったことを前提として考えているからこそ、冬の季語である「帰花」などを使わずに、「冬ともせずや梅の花」と詠んでいると考えられる。④の句も、旧暦の正月ならば春だから新年と同時に暖かさがやってくるはずなのに、新暦の一月は実質冬であるから、新年と共にやってきたのは寒さであるという句意だと考えられる。⑦の句は、旧暦の正月であれば、春の花を床の間に飾れるところであるが、新暦の一月では実質冬であるため寒菊くらいしか咲いていないので、せめてそれを新年に飾る花としようという句意であると解せる。

⑥の句は、雪の中でありながら一月になった、という句意であるが、新暦の感覚で読めば、新暦の一月は実質冬であるので、雪のもつ冬の季感との間に齟齬はなく、「ながら」という措辞は無意味になってしまう。よってこの句も、旧暦の正月が春であったことを前提としなければ解釈しがたいものと思われる。

加えて、このように解釈してくると、⑥の句には、古典の趣向を応用して明治の新事物を詠むという手法も指摘できるかと思う。類例については後述するが、この句の場合、趣向は『古今集』巻頭歌「年の内に春は来にけり一年を去年とや言はん今年とや言はん」に代表される、「年内立春」の詠み方に大変似通っているように思

われる。「年内立春」は冬と春の間やずれを知的に愉しむ趣向である。これは、⑥の句のもつ趣向と共通していると言えるのではないか。つまりこの句は、旧来の「年内立春」の趣向を、新暦と旧暦のずれに応用したものと思われるのである。子規は、『再び歌よみに与ふる書』の中で先掲の『古今集』歌を取り上げた際、「日本人と外国人との合の子」のように「しやれにもならぬつまらぬ歌に候」（13）と評して非難している。したがって、⑥の句に限らず、旧時代の季感を捨てきれず、むしろそのずれや間を知的に愉しまんとする、先掲の「一月」項のような性質の句についても、同様の批判を抱いたであろうことは想像に難くない。

このように、『俳諧開化集』「発句の部」の「一月」項の句は総じて、類型的に旧時代との常識のずれ、旧時代と新時代の暦のずれを知的に処理したものと見ることができる。

このような傾向の句は、『俳諧開化集』の他の「新行事」項の句にも見られる。例えば、

⑧御代なれや一日とみな言覚え　詢蕘斎　（「一日」項）

は、明治天皇の時代となって、年始の日を『ねぶりのひま』が「流行おくれ」とした「元日」ではなく、「一日」と呼び覚えたという句意であると考えられる。また、同じく『俳諧開化集』「一日」の項に収められる

⑨一日や寒さおさへる日の光り　完鷗　（「一日」項）

という句も、旧暦ならば春の日差しであるはずの「一日」の光であるから、「一月」の冬の寒さを和らげるのだと解することができるだろう。

また、『俳諧開化集』に限らず、『ねぶりのひま』にも「一月」の部に次のような句が見える。

⑩一月も七日たちけり寒の梅　沙山

一月に入ってもう七日が経ったが、寒梅が咲いているという句意であろう。この句も、旧暦の正月であれば寒梅ではなく梅が咲くものだということを前提とし、新暦の一月は実質冬なので寒梅が咲いているとしたと考えられる。

また、同じ「一月」の部の、

⑪一月は花の春まつはじめ哉　精知

の句も、旧暦の正月ならば花の春そのものであるということを前提とし、新暦の一月は実質冬であるから、花の春を待つ年始めということになる、と詠んでいると考えられる。このように、いずれの句も、旧時代と新時代の暦のずれを知的遊戯のように詠んでいると考えられる。

さて、次に挙げるのは、先の⑥の句の検討の折に触れた、従来の古典的趣向や詠み方をつかって「新行事」を発句に取り込もうとした例である。

⑫積雪も貢ぎとうたへ元始祭　二洲
⑬ほの〴〵とよき雪晴や元始祭　黙平（以上『俳諧開化集』「元始祭」項）
⑭拍手にうちこむ雪や紀元節　蘆水
⑮旭に向ふ烏の声や紀元節　梅宿（以上『俳諧開化集』「紀元節」項）

⑯式の日や霰たばしる帽の上　　永機（『俳諧開化集』「陸軍始」項）

「元始祭」は明治五年（一八七二）制定の皇室行事で、毎年一月三日、天皇の位の元始を寿いだものである。「紀元節」は、「日本書紀」が初代人皇の神武天皇即位の日とする一月一日を、太陽暦に換算したという二月一日を祝日と定めたもので、同じく明治五年（一八七二）に制定された。「陸軍始」は旧日本陸軍で毎年一月八日の仕事始めの日に行なった観兵式などの儀式を指す。

⑫⑬⑭の三句は、いずれも雪を詠み込んでいる。季節的に雪の降る時期であるためもあろうが、このようにめでたいことを雪とともに詠むという詠み方は、『万葉集』巻末歌「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」（14）などから先例が見られる。⑫には、積もる雪を「貢ぎ」と称えよという内容が詠まれるが、これは「雪は豊年の貢ぎ」などという知識に基づいている。謡曲「難波」には、仁徳紀を引用する場面で「浜の真砂の数積もりて、雪は豊年満作の御調物」（15）のように引用されており、定型表現として広く認知されていたことが窺える。また『ねぶりのひま』収録句の

⑰一日や雪もめでたきものゝ数　　得水（「一月」の部）

にも、同様の趣向を看取できる。

続いて、⑮の句には烏が登場するが、これは神武即位前紀の神武天皇が烏に導かれた話に基づいていると考えられる。また⑯の句の場合、「陸軍始」という語を詠み込んではいないが、「もののふのやなみつくろふこてのうへに霰たばしるなすのしの原」（『金槐和歌集』三四八）という実朝歌を踏まえることで、「霰」という旧来の季語を得て有季という発句の条件を満たし、さらに「こて」を軍帽に詠みかえて当代の陸軍らしい一句に仕立

てたと考えられる。

先行する古典作品が踏まえられていると目される例は、明治一二年（一八七九）刊、明倫講社の三森幹雄が編者を務めた『俳諧新選明治六百題』（16）にも見いだせる。

⑱元日やけふりの立ぬ家もなし　清制（歳旦之部（冬）「元日」項）

この句の、元日というめでたい日に竈の煙が上らない家はないという趣向は、『新古今集』巻第七（賀）巻頭歌「たかき屋にのぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり」や、仁徳紀を踏まえてのものと考えられる。また、「新行事」には当たらないが、『俳諧開化集』には次の句も載る。

⑲御旗日や賤が竈も賑はしき　可洗　（「国旗」項）

右の句も、「賤が竈」の賑わいを詠むことで「御旗日」を寿ぐ趣向である点に着目すると、先出の⑱と同様に「仁徳天皇御製」を踏まえていると考えられる。「新行事」の執り行われる日は多くが「御旗日」でもあるので、「新行事」と同様の傾向を示すことも首肯できよう。

続いても、『俳諧新選明治六百題』からの引用である。

⑳一月の花とはなりぬ今朝の雪　柳叟（歳旦之部（冬）「一月」項）

右の句の、年の始めに木に雪が降りかかって花に見えるという趣向自体は、「雪の木にふりかかれるをよめる」

という詞書の素性法師の和歌「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく」（『古今和歌集』春上・六）を始めとして和歌に多く見られる。⑳の句は春の雪を詠んだ旧来の歌や句の趣向を、そのまま実質的に冬である新暦の「一月」の句に応用したものではなかっただろうか。

さて、以上に加え、旧派の「新行事」詠には、旧来の季語に寄りかかった趣向のものも見られる。

㉑陸軍や朝日かゞやく事始　　春湖（「陸軍始」項）

右の句は『俳諧開化集』の「陸軍始」項に載る句である。陸軍の仕事始めが朝日輝く中で執り行われているという句意と思われるが、この句では「陸軍」という語に「事始」という旧来の季語を併せることで、有季という一句の条件を満たしつつ、「陸軍始」を表現している。この点は、やはり「陸軍始」項に掲載の、先出の⑯の句が、「霰」という旧来の季語を詠み込むことで有季という一句の条件を満たしていたことと重なってくる。

ところで、「事始」という季語は元々、軍事に関することでも、特に年頭行事を指したものでもないとされる（17）。しかし、この句においては、「陸軍始」をも「事始」の一種のように捉えていると読むことができる。このように旧来の季語を応用して新事物を詠むという手法は、『俳諧開化集』において、「新行事」以外の新事物を詠んだ句にも見られる。例えば次の「西洋餝」項に見られるような例である。

㉒樫の葉も常磐の色よ門飾　　漣々
㉓青柴に木の実もまぜて門かざり　　蘆水
㉔交りの丸きを門のかざりかな　　菟好（以上「西洋餝」項）

「西洋餝」は『日本国語大辞典』第二版には、「祝祭日などに、造花、テープその他を用いてつくりあげるアーチ式の装飾など」とあり、正月に限ったものではない。が、これらの三句は、「西洋餝」を、㉒㉓の句では材料の面で、㉔の句では形状の面で特殊な、「門飾」として表現していると解せる（18）。つまり、「西洋餝」を旧来の季語である「門飾」の一種のように捉えて、「門飾」の中に含み込もうとする態度が窺えるのである。

「陸軍始」の例、さらに「西洋餝」の例からは、一見全く新しい素材を取り込んでいるようで、実は旧来の季語の概念を基盤とし、その上に新素材が詠み込まれたに過ぎなかったという様相が見えてくるのではないだろうか。

以上見てきたように、旧派類題句集の「新行事」詠からは、

Ⅰ　旧時代の常識的感覚で、もしくはそれとのずれを楽しむかのように新時代の新常識を詠む

Ⅱ　古典の趣向を応用して明治の新事物を詠む

Ⅲ　旧来の季語を応用して明治の新事物を詠む

という、少なくとも三つの傾向を看取することができた。このように、旧派による「新行事」の取り込みは、一見革新的なようでありながら、その実態は、近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかったように思われる。子規はこの辺りを見抜いていたのではないだろうか。

第二節　日本派の新行事詠――子規を中心に

ではここからは、子規を中心に日本派の「新行事」詠について検討していきたいと思う。

子規の「新行事」詠としては、「紀元節」「天長節」「クリスマス」詠が確認できる（19）。宮坂静生によると、明治三〇年三月には『新俳句』「冬之部」の子規の校閲が始まっていたので（20）、ここからはそれ以前の句を対象とすることとする。

左は『新俳句』に先行する子規の「天長節」詠である。

㉕宿の菊天長節をしらせばや（明治二五年（一八九七））（『寒山落木』巻一）

㉖海晴れて天長節の日和かな（明治二七年（一八九四））（「日本新聞」明治二七年一一月三日）

㉗草の戸や天長節の小豆飯（明治三〇年（一八九七））（『俳句稿』明治三〇年）

㉘唱歌聞ゆ天長節の朝日哉（明治三〇年（一八九七））（「日本新聞」明治三〇年一一月三日／『俳句稿』明治三〇年）

㉙畑打の天長節を知らぬかな（明治三〇年（一八九七））（『俳句稿』明治三〇年）

㉕の句は、天皇の象徴である「菊」と「天長節」を結んだ句であり、この点で旧派の「天長節」詠

㉚上も無き日がらを菊の盛哉　藍庭（『俳諧開化集』「天長節」項）

などと発想の共通する句と言える。また、㉖の「天長節の日和」も、先掲の㉚、旧派の句の「上も無き日がら」とほぼ同義である。さらに、明治三五年（一九〇二）刊の日本派の類題句集『春夏秋冬』「秋之部」（21）には、左の㉛のように、中七、下五の詞章が㉖と全く同じ句が収録されている。

㉛年々に天長節の日和かな　鳴雪

つまり同じ日本派の中で、比較的近い時期に類似句が作られていたことになる。

㉘の句の「天長節」と「朝日」を結ぶ発想は、旧派に、

㉜かゞやくや天長節の朝日かげ　月窓（『俳諧開化集』「天長節」項）

のような先行例がある。「唱歌」については、この句の指す唱歌「天長節」（22）を始め、小学校の儀式用の唱歌が「祝日大祭日唱歌」として公布されたのが明治二六年（一八九三）であるので、㉘の句が作られた明治三〇年（一八九七）当時は、「天長節」に唱歌はつきものだと言えるほどではなかったのかもしれない。しかし、このとき「紀元節」「神嘗祭」などの唱歌も同時に公布されており、他の祝日でも成り立つ内容の句であるとも言えよう。

以上のように見てくると、旧派との発想の差異が殆ど見られない句が多くを占めているのような印象を受けるが、中には類想を脱しているように見受けられる点を持つ句も散見される。

ここまで取り上げてきた旧派の「天長節」詠は、先掲の㉚や㉜のように、この上ないめでたさを華やかに詠むものであった。これに対し、子規の詠である㉗は、侘び住まいで「小豆飯」を炊いて祝う「天長節」を描いている。そもそも「天長節」に限らず慶事などに赤飯はつきものであり、その点では類句が存する可能性は十分考えられる。現に子規自身にも、

㉝冬枯や庚申堂の小豆飯（明治二九年（一八九六））（『寒山落木』巻五）

など、「天長節」以外で小豆飯を詠んだ句が存し、小豆飯自体は単独で「天長節」の特色を表すには不十分な素

材であったと言えよう。しかし、後に寒川鼠骨が「草の戸は（略）侘びたる住居である、（略）酒池肉林で祝ふよりかも却つて斯様な粗末なもので祝ふ方がゆかしい」（23）とこの句を評したように、大仰な描写をしていない点が、旧派の「天長節」詠とは一線を画しているとも言えるのではないか。

同様に、㉙は「天長節」というこの上ない祝日に、それとは知らずいつも通り畑を打っている農民の姿を詠んだものである。句中に「菊」「唱歌」「小豆飯」などの素材がないために、一句はこれまで見てきた子規の「天長節」詠の中でも特にそれらしさに欠けているように思われる。しかし、何もかもを置いて天皇を寿ぐべき日に、その日であることすら知らずいつも通り農事に携わる「大胆不敵」な農夫を詠んだ斯様な句は、俳諧教導職も多かった旧派にとって、容易く詠み得なかったはずであり、子規の狙いがそこにあったことは想像に難くない。

以上見てきたように、子規の「天長節」詠には、旧派のそれと一線を画そうとする意向や独自性が垣間見えるものも確かに散見されるが、概して、「天長節」らしく詠もうとすると類想に陥りかねず、類想を脱しようとすると「天長節」らしさを欠きかねない危うさを孕む傾向にあったと言えるだろう。

続けて、日本派の「天長節」詠も見てみよう。子規の後を引き継いで高浜虚子・河東碧梧桐が選に当たった類題句集に『春夏秋冬』「夏之部」「秋之部」「冬之部」（明治三五（一九〇二）―三六年（一九〇三））（24）がある。その「秋之部」には「天長節」項が存在する。

㉞年々に天長節の日和かな　鳴雪
㉟草の戸や天長節の小豆飯　子規（㉗と重複）
㊱卓上や菊の杯菊の酒　露月
㊲軍艦に天長節の夜会かな　五城
㊳日出づるところの天子菊の宴　把栗

㊴菊の花洋々として楽起る　　寒樓
㊵団欒や民喜びの菊の酒　　碧梧桐

㊱㊳㊴㊵の句はいずれも、菊に関することを詠んだものであり、その点で類想的であると言える。㊲は軍艦での「天長節」の夜会という、かなり特殊な状況の宴を詠んでいる。よって類句は現れにくかったかもしれないが、逆を言えば、ここまで特殊な状況を詠まなければ、「天長節」詠においてなかなか類想を脱し得なかったということかもしれない。

㊳は『隋書』倭国伝の記事を菊の宴と結んで「天長節」の内容を表現していると読め、その点で知識に偏重している。

先に指摘した㉟（㉗に同じ）に加え、㊱の「卓上」、㊵の「団欒」、「民」といった語からは、旧派の仰々しい「天長節」詠には見られなかった素朴な印象があると指摘できるかもしれない。しかしそれ以上に、㊱㊵の「菊の酒」や、㊴の「菊の花」に湧き起こる寿ぎの楽、㊵の「菊の酒」に「民」の「喜び」などから受ける、語彙や発想が画一的であるという印象は、払拭しがたいものがある。

「新行事」は表面的には新しい題である。しかし、「新行事」が負っている、あるいは明治新政府によって付与された歴史的背景は、むしろ古典的かつ伝統的なものであり、その儀式も厳粛あるいは盛大で、かつ典型的なものであることが求められた。「新行事」詠全体についてではないが、松岡満夫は『新俳句』の季題数、特に新年季題の少なさについて、「一般に新年の季題には古典的、時代的な臭味のあるものが多い」（25）と指摘している。松岡の指摘する、新年季題の「古典的、時代的な臭味」が新鮮な詩情を表わすのを阻害するのだとしたら、「新行事」題にも同様のことが言えたのではないだろうか。

つまり、本節の冒頭で触れたように、「類句」が少ないということが子規のいう「新奇」な句の十分条件であ

ったとすると、「新行事」詠ではこの条件をなかなか満たしがたかったものと考えられる。子規が『新俳句』の「新題」から「新行事」題を極力外した理由は、ここにあったのではないだろうか。

ところで、明治二八年（一八九五）に、子規は「写生」を提唱している（26）。先掲の㉗㉘㉙の子規の「天長節」詠（明治三〇年（一八九七））の中に類句や類想を脱しているようにも見える点が散見されたのは、あるいはその論理が実践されたためかもしれない。しかし、類想を脱しきれていなかったり、脱しようとするあまりなのか、「天長節」詠らしさを失いかねない危うさを抱えたりと、その実践が不完全なものになってしまったのは、「写生」論の実践経験がまだ不十分であったためというばかりではなかったであろう。むしろ、「天長節」という「新行事」の持つ「古典的、時代的な臭味」が、「写生」論実践の足かせとなってしまったからではないだろうか。

さて、『新俳句』で例外的に採用された「新行事」題は「一月」と「クリスマス」であった。しかし実際に『新俳句』の「一月」項に収められている句を見ると、左のように、㊶から㊹のいずれの句も「一月」という語はつかわず、「正月」「睦月」といった語を用いている。

㊶正月や橙赤き雪の門　愚哉
㊷あら惜しや早正月も三日立つ　数鶯
㊸睦月まだ川風寒し藪の花　宗重
㊹国亡んで寺の正月僧もなし　瓢亭（『新俳句』新年の部「一月」項）

これと同様の傾向が、子規の『寒山落木』巻四にも見られる。

㊺正月や里はきのふの古薄
㊻春王の正月書すと書かれたり
㊼うれしさの過ぎぬ正月四日なり
㊽ひもじさの餅にうれしき睦月哉
㊾正月の人あつまりし落語かな
㊿一月となりけり雪もふりにけり（以上「一月」項）

『寒山落木』巻四は類題句集の形式をとっているが、以上の六句はすべて「一月」という項に収められている。それを根拠に、子規が三者のつかい分けを全くしていないと結論するのはもちろん早計であろう。しかし、少なくとも旧派のような、旧暦か新暦か、あるいは春か冬かといった区別はしていなかったのではないか。要するに、子規は「一月」を「正月」に対する「新題」として捉えてはいなかったと考えられるのである。この事実も、古くからの行事に関わる題において「新奇」な句を詠むことの困難さを示していると言えるだろう。

一方、『新俳句』が実質的に唯一採用した「新行事」題である「クリスマス」は、洋語でありかつ宗教色の強い語ゆえ、「古人の類句」はもちろん、先行する旧派の作例も少なかったものと思われる（27）。子規が「クリスマス」のどのような点に新季語としての「意匠」を見出したかについては、煩雑に渡るので、洋語はじめ他の新季語採用の問題とも関連させつつ、稿を改めて検討したい。

以上から考察するに、子規は「新行事」を始めとする「新題」の導入が、旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いており、加えて自らも「新行事」詠の実作を通して、「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることも自覚していたのではあるまいか。その意識が、『新俳句』における「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がったと考

えられる。

青木亮人は「「意匠の陳腐なるを」避けたのが『新俳句』とすると、子規達が「類句」と異なる趣向や措辞を使用したのはむしろ意図するところではないのか」（28）と指摘するが、殊に「新行事」詠については「「類句」と異なる趣向や措辞の使用」が困難だったものと考えられる。

おわりに

ここまで、類句を避けて「新行事」題を詠むことの難しさを検討してきたが、本章冒頭で確認したように、子規は決して「新行事」を含む「新題」自体を否定していたわけではない。

子規には「新題」を採択する際、それが新しい季語としての「意匠」を持ちうるかの見極めが必要だったのではないだろうか。

本章では『新俳句』以降の子規の「新行事」詠にあまり触れられなかったが、子規は「新行事」の季語への取り込みを諦めたわけではなかった。例えば病床にあった明治三二年（一八九九）には

㊐人も来ぬ天長節の病哉　子規（『俳句稿』明治三二（一八九九）年、引用『子規全集』三巻）

などの詠を残している。子規がこの詠をもって、類句を脱し得たと自認していたかは未だ明らかでないが、少なくとも本章の論じてきた類句類想の存在を自覚した上での果敢な挑戦であったと見てもよいのではないか。

また今回は『新俳句』を軸に、旧派と、明治三〇年（一八九七）頃の子規を中心とする日本派の「新行事」詠について、比較検討してきた。本章で扱った「新行事」題の問題を裏返せば、子規は、「手袋」や「焼芋」など、『新俳句』に採用した他の「新題」には「古人の類句」や同時代の類句を脱しうる、新しい季語としての「意匠」

を認めていたはずだという推測も成り立つであろう。

第三章　俳句革新期における「新題」

第三章　俳句革新期における「新題」

はじめに

正岡子規は明治二五年（一八九二）からの俳句革新運動を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。子規の「俳諧大要」の一節、「天保以後の句は概ね卑属陳腐にして見るに堪へず称して月並調といふ」（1）は、中でも有名な子規の旧派批判の文章の一つである。しかし、具体的に旧派やその作品、主張のどのような点を批判したのかなどについては、まだ明らかにされていない部分も多く残されている。

本章は便宜上旧派の句を「発句」、子規ら一派の句を「俳句」とし、それぞれの「新題」の扱い方を取り上げ、その姿勢を比較対照することを試みるものである。

明治維新によって様々な新事物が社会に導入されると、文学の中にそれらを取り込もうとする動きが起こったが、俳諧もその例外ではなかった。しかし、新事物を平句ではなく発句の中へ、それも単なる句の一素材ではなく、発句の主たる題として詠もうとするときには、季の問題を無視できなくなり、一筋縄ではいかなかった。つまり明治の「新題」を発句に取り込むのは、容易なことではなかったのである。

第一節　明治期の「新題」についての先行研究と問題の所在

先の問題について、第一章では、『俳諧開化集』（2）という旧派の類題句集を取り上げ、旧派が発句の中に明治の「新題」をどのようにして取り込んだか考察を試み、「季語と題を分離させるという近世以来の発句の詠み方が、季感に乏しい事物を題として取り込むにあたっては特に、解決の一助とはなった」とした。また越後敬

子は、明治期の旧派の類題句集について論じた「明治期旧派類題句集概観」（３）において、国会図書館に所蔵されている一〇六の明治期の旧派の類題句集を調査し、「書名に「開化」の語をつけたり「開化の部」を設けたりしてい」るのは、先出の『俳諧開化集』を含めわずか三書であること、加えて、他の類題句集のうち、四季の部に開化新題を含んでいるものについては、「文明開化によってもたらされた新事物を題としたものもわずかしかない。（略）「開化之部」をもたない一般の明治期旧派の類題句集は、主に明治に新たに始まった、または明治に再興された国家・宮廷行事を新題として取り入れていた。文明開化の世相を反映するような題を挙げることに消極的であった、といえよう。これによっても先の三書の存在が特異であったと言えるのである」と結論している。

以上二つの論からは、次のような問題が浮かび上がる。

まず、第一章のみでは、「新題」と季のあり方について、旧派の動静についてしか述べられておらず、子規派を始め新派の動静についての言及がされていない点が不十分である。

先出の越後の論考については、同氏の指摘通り、旧派は全体的に「文明開化の世相を反映するような題を挙げることに消極的」であり、『俳諧開化集』は中でも「特異」な存在であったと考えられる。同氏はこの論考の中でこの現象の背景についても考察されているが、論考が旧派類題句集を調査、考察の対象とする目的で書かれているため、子規ら新派の動静についてはあまり触れられておらず、「新題」取り込みの動きについて、新旧両者の動静や背景を相対化する必要があるように思われる。

したがって本章は、『俳諧開化集』の「新題」取り込みの背景を改めて考察し、同書のこのような姿勢の、当時の旧派俳壇全体の動静の中における位置づけについて再検討すること、さらに子規ら新派の動静と照らし合わせることで、新派旧派双方の動静や「新題」取り込みの姿勢を相対化させることを目的とするものである。

第二節　『俳諧開化集』の「新題」と季の扱い

『俳諧開化集』は明治一四年（一八八一）五月に刊行された。上巻に序文と俳諧連歌二九巻、下巻に俳文と「発句」が載っており、先掲の拙稿で取り上げたのも、今回扱うのも、この「発句」の部分である。編者の「西谷富水は教林盟社の一員で、俳諧の部で富水と一座する人物や俳文の作者のほとんども社中の一員であったと考えられ」、『俳諧開化集』は全体に「教林盟社色の濃い撰集」であったとされる（4）。

では『俳諧開化集』下巻の「発句の部」には、どのような明治の「新題」が挙げられ、それらはどのような性格を持っているのであろうか。左にその全部を挙げ、季の有無を考慮して分類した。江戸期の類題句集以来、一般に題たるものは季を持ち、発句の主たるテーマとされる傾向があるからである。

Ａ：季を持つことがほぼ明白な「新題」

一月、一日、元始祭、陸軍始、紀元節、春季祭、天長節、神武天皇祭、神嘗祭、秋季祭、秋蚕飼、二月閏（5）

Ｂ：季を持ちうるとも考えられる「新題」

国旗、西洋餺、太陽暦、襟巻、氷売、製氷、氷蔵、落花生、西洋覆盆子

Ｃ：季を持ちうるとは考えがたい「新題」

陸軍、軍艦、御巡幸、皇政一新、皇国々体、敬神、愛国、天理、国法民法、靖国神社、楠公神社、神葬祭、公園、上野公園、山形公園、公園臨幸、自主自由、男女同権、僧侶妻帯、小学校、女学校、女教師、洋字、製糸所、媒助法、石筆、巻莨、摺附木、椅子、懐中時計、蝙蝠傘、靴、勿大小、大和杖、玉転玉突、千金丹、新聞紙、郵便、端書郵便、電信機、電信線、蒸汽車、鉄道、蒸汽船、飛脚船、川蒸汽船、灯台、瓦斯灯、洋灯、馬車、郵便馬車、人力車、人力車夫、風船、日曜日、写真、娼家写真、寄写真恋、娼家、黴毒検査、

権妻、牛肉、牛乳、屠牛、開拓、新開地、士族、士族商法、帰農、地租改正、廃関、廃刀、朝旨遵守、説教、耶蘇教、禁苑、華族独歩、博覧会、植物館、博物館、上野新上水、船製造場、万国交際、貿易、輸出、石盤、玻璃、洋服、駆虫珠、西洋料理、西洋手品、油画、外人剃髭、断髪、書生、書生羽織、巡査、水上警察、違式、裁判、勧解、代言人、徴兵、練兵、水雷火、懲役、国立銀行、円金、米市場、午砲、祝炮、銕橋、万代橋、鎧橋、隧道、夜演劇、賞盃

『俳諧開化集』「発句の部」の「新題」は、A：季をもつことがほぼ明白なもの、B：季を持ちうるとも考えられるもの、C：季を持ちうるとは考えがたいもの、の三系統に大別することができる。ここに見えるA、Bは、古くからの題の概念の枠の中で捉える題と、一応見做すことができる。したがって、ここではCの「新題」句に注目し、さらに題の性質上四つのパターンに分類して、それぞれの句例を見てみたい。季を持たない題をどのように一句の中で処理しているかを見ることで、「新題」をどのように考えていたのかの一端が垣間見えると思うからである。

ア：既存の季語と共に、題となっている語を直接句の中に詠み込む

例：題「軍艦」　軍艦のけぶりの先や雲の峰　竹仙

イ：題となっている語は直接詠まず既存の季語を用いながら一句全体で「新題」を表現

例：題「郵便」　初花のたよりもありぬ吉野から　双亀

ウ：季語は用いず、題となっている語を直接句の中に詠み込む

例：題「写真」　若かりし貞にくらべる写真哉　鶯笠

エ：題となっている語も既存の季語も用いず、一句全体で「新題」を表現

例：題「男女同権」　はしたなき身こそ安けれとも稼　　可学

句の引用に際し、題である「軍艦」と「写真」には私に四角囲みを付した。また傍線も私に付したものである。

以前拙稿で述べた事と重複するが、『俳諧開化集』「発句の部」は、季を持ちうるとは考えがたい「新題」を、ここに挙げたア～エの四通りの処理の仕方で詠んでいる。ここで問題にしたいのは、ウとエの詠み方である。ウの「写真」を題とする句、「若かりし臾にくらべる写真哉」は、新事物である写真によって、若かったころの顔と今の顔を比べられるようになったことを詠んだものであろう。この句には題である「写真」は一単語で読み込まれているが、いわゆる季語は見えない。一句全体から季を想像することも困難である。つまりこの句には季がないと判ぜられる。続いてエの「男女同権」を題とする句も見てみよう。「はしたなき身こそ安けれとも稼」の中には、「男女同権」という単語は出てこない。しかし、「とも稼（共稼）」という語を中心に、一句全体が「男女同権」という「題」を表現しているということは言えるだろう。そしてこの句にもやはり季語は見えず、一句全体から季を看取するのも困難である。やはりこの句にも季がないのである。

ここまで本章では、『俳諧開化集』の類題化されている五・七・五句を発句としてきた。しかし、このように季を持たない句の存在を確認すると、これらが発句であるかどうか疑問も生じてくる。「発句の部」という呼称は櫻井武次郎・越後敬子校注「俳諧開化集」に倣ったもので、実は『俳諧開化集』の中には「発句の部」という語は用いられず、その下巻において数編の俳文に続き、類題句集部分が唐突に始まっている。そこで、迂遠ではあるが、本章の前提に関わるので、この点をまず検討しておきたい。左に掲げたのは発句の定義である。

発句（ほっく）　連俳用語。連歌・連句の巻頭第一句をいい、五・七・五の長句（上の句）の形をとる。巻頭の句としての格調の高さと季語・切字を具えることを要件とし、即興性を重視、挨拶性を伴う。（略）発句を単

独に詠作・鑑賞することは、宗祇のころから始まったが、俳諧ではそれが一般化し、立句・地発句の区別も生れた。正岡子規は発句を連句から切り離し、俳句として独立させたが、それは地発句を新生させたことになる。［浜千代清・尾形仂］（6）

この点については、結論から述べると、発句集であるという意識で編集されたものと考えられる。その根拠は、左に引用した先学が指摘するとおり、旧派が祖師とする芭蕉にもわずかながら無季句の作例は認められること、加えて蕉門の俳論の中に発句の中に無季の句もあってよいとする説も見られることである。

季に対する配慮が連歌・俳諧を通して殊に重視されたのは、座の文芸としての必然だったともいえる。だが、勅撰集の部立てを通して四季が全二〇巻中の六巻を越えることがなかったことが示すように、季は美意識の全領域を覆うものではない。芭蕉が「発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきものなり」〈『去来抄』〉と漏らし、また近代に至って無季俳句が提唱されたのも、そのことに端を発している。季が俳句様式を支えてきた実績は尊重すべきだが、発句が季題を必須の要件とするに至った歴史的経緯を顧みれば、俳句が将来にわたり季のみに拘泥すべき根拠は乏しい。［尾形仂］（7）

この尾形の論の中には「季題」という用語がつかわれている。これは先述したように、季を持つ語が題となるのが一般的であるということを示唆している。本章が「新題」を論じながら季の問題に言及している理由もそこにある。芭蕉も『去来抄』や『三冊子』で題とからめて季の問題を論じている。このことは題をどう詠むかの考察の中で取り上げることとし、ここでは『俳諧開化集』下巻「発句の部」とされているものは、無季句を含む発句集であるとだけ確認したことにとどめておきたい。

いずれにせよ、発句にとって無季であることは異例なことではある。問題の在処は、『俳諧開化集』の編者たちがなぜ、無季句、もしくは題と季語を分離させた句を多く含む発句集を編まなければならなかったかである。

第三節　無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景

前節の問いに対する解答に当たるものは一様ではなく、様々な要因が考えられる。

第一に、これは先出の拙稿にて述べたが、発句には題と季語を分離させるという近世以来の詠み方が存したことが挙げられよう。

第二には、和歌以来の題や題詠の伝統を挙げることができよう。前節引用の尾形仂氏の指摘にあるように、和歌には四季の他に「恋・雑のほか名所・離別・羈旅・賀・哀傷」などの題が存在していた。これらを継承する形で、近世類題句集には四季以外の題も立項されるようになった。

類題句集（るいだいくしゅう）　習作の便宜や類句の検索のため、古今の発句を集成し、題によって分類した集。発句の独立、題詠化を背景として、近世中期に出現した。その先駆としては、宝暦一三年（一七六三）刊の涼袋編『古今俳諧明題集』が挙げられるが、類題句集の形態を確立したのは、安永三年（一七七四）刊の蝶夢編『類題発句集』で、詳細に題を設けて句の上欄に掲げ、題の本意を重視しつつ、古今の俳家の発句五〇〇〇余を集成、四季（一一四五）と雑（恋以下一三題）に分類する。文化―文政（一八〇四―三〇）以降、俳諧の大衆化に伴い続出。例句の作者は多数・少数、古人・今人、一門内のものなど多様で、『俳諧十家類題集』は一〇名家のもの、『俳諧発句題叢』は俳諧の『夫木抄』といわれる大部のもの、『俳諧千題集』は山・谷など地名別のものである。（略）［東聖子］（８）

第三には、無季句の先例と、無季句を容認する趣旨の俳論の両方が、旧派の拠り所たる芭蕉および蕉門に存在したことが挙げられると思う。しかしこれらの理由によるだけでは季のない題による句が多すぎる。

第四として考えるべきことは、俳諧教導職としての職務遂行で、このことが大きな要因ではなかっただろうか。俳諧教導職とは、明治六年（一八七三）五月、時の教部省が祭政一致・社会教化を目的として設置したものである。先ほど『俳諧開化集』の編者が「教林盟社」という俳句結社の人物であったことに触れたが、この「教林盟社」もまた、俳諧教導職制度の下で、明治七（一八七四）年に設立された結社であった。俳諧教導職に無試験で任命された俳諧宗匠・月の本為山が、この『俳諧開化集』に序文を寄せていることからも、俳諧教導職と『俳諧開化集』の結びつきが窺える。

『俳諧開化集』中の「新題」と俳諧教導職との関係についてはすでに先学の指摘がある。

> 下巻の後半には、発句一三九題全三九〇句を載せる。文明開化による明治の新語を題として句頭に掲げ、一題につき一句から数句の発句を並べている。（略）
>
> 摺附木、懐中時計、新聞紙、電信機、瓦斯灯、人力車など、いかにも文明開化の産物といったような題、また徴兵制度、学校制度、司法制度など、この期に開始された諸制度に関する題も見受けられる。
>
> しかし次に挙げる題は、右とは少し趣を異にしている。
>
> 皇政一新、皇国々体、敬神、愛国、天理、国法民法、朝旨遵守、万国交際、説教
>
> これらは先に述べた教導職に関連する語である。教導職に任命された者が基本として守らなければならなかったものは、次の「三教の教憲」である。
>
> 一、敬神愛国ノ旨ヲ体ス可キコト
>
> 二、天理人道ヲ明ニスベキコト

三、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキコト

教導職はこの基準に基づいて、国民に対して説教を行うことが任務であった。その際、この三条のみでは曖昧であるとしてさらに制定されたのが、「十七兼題」「十一兼題」である。

十七兼題　皇国々体、皇政一新、律法沿革、道不可変、不可不教、人異禽獣、権利義務、制可随時、国法民法、役心役形、租税賦役、文明開化、富国強兵、万国交際、政体各種、不可不学、産物制物

十一兼題　神徳皇恩、人魂不死、天神造化、顕幽分界、愛国、神祭、鎮魂、君臣、父子、夫婦、大祓

先に挙げた題は、まさに「三条の教憲」中の語や、「十七兼題」「十一兼題」をそのまま俳句の題として用いたものであった。

ほかに、元始祭、陸軍始、紀元節、春季祭、秋季祭、天長節、神武天皇祭など祝祭日まで題になっているが、これらは明治になって新たに制定された、または明治になって再興された国家行事、宮廷行事である。

これら教導職に関する題、国家行事・宮廷行事に関する題は、一見すると文明開化とは無関係のように見える。しかし、教導職が制定されたのは国民教化が目的であり、国家行事、宮廷行事が定められたのは、天皇中心の中央集権国家づくりの一環であった。つまりこれらは、明治政府の政策に則った、文明開化の時代ならではの題なのである。(9)

右に引用した通り、越後敬子は、『俳諧開化集』「発句の部」にある「皇政一新、皇国々体、敬神、愛国、天理、国法民法、朝旨遵守、万国交際、説教」という題について、「これらは先に述べた教導職に関連する語である」とし、「先に挙げた題は」、教導職が守らなければならなかった「「三条の教憲」中の語や、「十七兼題」「十一兼題」をそのまま俳句の題として用いたものであった」と指摘している。さらに、「これら教導職に関する題、国

家行事・宮廷行事に関する題は、（略）明治政府の政策に則った、文明開化の時代ならではの題なのである」とも述べている。

つまり、『俳諧開化集』下巻「発句の部」は、俳諧教導職としての国民教化の任を負った発句集であり、その目的達成のために発句の中へ新事物を導入せざるを得なかった面があったということが言えるだろう。

以上述べてきたように、無季句を含む『俳諧開化集』「発句の部」成立の背景としては、

Ⅰ　発句において題と季語は分離可能なものであるという近世以来の伝統

Ⅱ　和歌以来、題は四季以外に恋・旅・名所などが存在し、後世俳諧の発句においても四季以外の題に季語を結んで詠むこともできたという伝統

Ⅲ　蕉門の俳論の無季許容論と、先例となる芭蕉らの無季句の作例

Ⅳ　俳諧教導職としての国民教化の任を負った発句集であったこと

少なくともこの四点が考えられる。

以上に加え、Ⅴとして、発句における挨拶性の不要化が、発句において当座性を示す季の不要化へと繋がったことも考えられるかもしれない。しかし、以上五つの要素や背景の中でも、特に影響が大きかったものは、越後の指摘する「俳諧教導職」としての責務を果たすというものであったと考えられる。越後が『俳諧開化集』と共に「特異」な三書に挙げた「開化の部」を持つ明治期類題句集のうち、『明治五百題』もまた、俳諧教導職中心の結社「明倫講社」の社長三森幹雄が撰者となっている句集であった。さらに、残る『俳諧明治新々五百題』も、この『明治五百題』と編者を同じくしている。

ただし、発句は伝統的に有季定型で詠まれ続けてきたので、旧派の全体的な動きとしては、無季句を詠むことに抵抗がなかったとはやはり考えがたいものがある。よって、明治期旧派の類題句集における「新題」の取り込みの動きは、全体的には消極的なものとなり、これが大局を占めたのであろう。その中にあって、発句に積極的

に新事物を取り入れようとして「新題」を取り込み、結果無季句が生じることもやむなしとした「三書」は、やはり先学の指摘通り「特異」な書となったものと考えられる。

以上、『俳諧開化集』収載の発句における「新題」の扱いを概観してきた。

これに対し、旧派を批判する形で俳句革新運動を展開した子規は明治の「新題」について、どのような考えを持っていたのであろうか。次章にて検討していきたい。

第四節　子規派の「新題」と季の扱い

左は明治三〇年（一八九七）に子規が弟子の高浜虚子に送った書簡で、上原三川の発起で句集『新俳句』を編むことになった折のものである。

三川来り候　三川の発起にて「日本」の俳句等を出版せん（民友社より）との事小生も賛成致候冬の部だけ先づ版にせんとて小生只今校閲中也

此中へ冬帽　手袋　やきいも　毛布　襟巻　冬服　ストーヴ等の新題を季ノ物と定メテ入れんとす　貴兄も此題にて御つくり被下度御送附願上候　尤も最初の事故之を季に入れたりと見するにハ他の冬の季を結ばぬ方よろしと存候（10）

ここからは、子規が、「冬帽」以下を「新題」扱いし、かつ「季ノ物」、つまり季を持つ題として『新俳句』へ入れる目論見であるように読み取れる。加えて、虚子にその「新題」句を詠んで欲しいと頼んでいるのであるが、句を詠むに当たり「冬帽」以下の「新題」が季を持っていることを明確にするため、一句の中に他の既存の冬の

季語を一緒に詠み込むことのないよう、注文をつけているのである。

続けて引用したのは、明治二五年に発表された、子規の『獺祭書屋俳話』の中から、「新題目」という文章である。少し長いが、全文を引用する。

人或は云ふ人間の観念は時勢の変遷と共に変遷する者なり。そは古来文学の変遷と政治の変遷とを比較して知るべきなり。而して明治維新の如く著るしく変遷したることは古より其例少なく従つて文学上の観念も亦大に昔日と異なるが如し。単に外部の皮相のみより見るも今日の人事器物は前日の人事器物と全く同じからず。刀槍廃れて砲礮天に響き籃輿は空しく病者の乗りものとなりて人馬馬車汽車王侯庶人を乗せて地上を横行す。是等の奇観は至る処にありて枚挙に遑あらず。此新題目此新観念を以て吟詠せんか和歌にまれ俳句にまれ其尽くる所あるべからずと。対へて云ふ。そは一応道理ある説なれども和歌には新題目新言語は之を入るゝを許さず。俳句には敢て之を拒まずといへども亦之を好むものにあらず。こは固より理の当然にして徒に天保老爺の頑固なる僻見より出づるものとのみ思ふべからず。大凡天下の事物は天然にても人事にても雅と俗との区別あり。（雅俗の解はこゝに述べず通常世人の唱ふる所に従ふて大差なかるへし）而して文明世界に現出する無数の人事又は文明の利器なる者に至りては多くは俗の又俗陋の又陋なるものにして文学者は終に之を以て如何とも為し能はざるなり。例へは蒸気機関なる語を見て我們が起す所の心象は如何。唯精細にして混乱せる鉄器の一大塊を想起すると共に我頭脳に一種眩暈的の感あるを覚ゆるのみ。又試みに選挙競争懲戒裁判等の言語を聞きて後に如何なる心象を生するかを見よ。袖裡黄金を溢らせて低声私語するの遊説者と思ひ内にあれば覚えず微笑を取り落したる被説者と両々相対するの光景非ざれば則ち髯公解語の花を携えて席上に落花狼藉たるの一室を画き出さんのみ。此妄想に続きて発するものは道徳壊頽秩序紊乱等の感情の外更に一の風雅なる趣味高尚なる観念あるべきやうなし。人或は云ふ美術文学は古に盛にして今に衰へ

たりと。以(ゆゑ)あるかな。（11）

文中の「此新題目此新観念」とは、本章における明治の「新題」に当たるもののことであろう。子規は、俳句に於いては「新題」を「敢て之を拒まずといへども亦之を好むものにあらず」、つまり敢えて拒みはしないが、好むものでもないとしている。さらにこの私見について「こは固より理の当然にして徒に天保老爺の頑固なる僻見より出づるものとのみ思ふべからず」と述べる。引用中波線を付した「天保老爺」の「天保」は、本章冒頭挙げた「天保以後の句は概ね卑属陳腐にして見るに堪へず称して月並調といふ」と重なる。つまり「天保老爺」を「月並調」の「卑属陳腐」な句を詠む宗匠のイメージで用い、自身の発言を月並宗匠のそれと一緒にするな、ということを主張しているものと思われる。ここからは、「新題」を好むものでもない、とした子規の見解が、対外的には一見守旧的な姿勢に映るものであり、周囲の誤解を招きかねないという自覚が、彼自身にあったことが窺える。

続く部分では、四角囲みを付した「蒸気機関」、「選挙」、「競争」、「懲戒」、「裁判」を「風雅なる趣味高尚なる観念」の無い「新題」の具体例として挙げ、猛烈に批判している。このうち、先に見た『俳諧開化集』には、「裁判」が「新題」として挙げられ、他にも「蒸気機関」を使った「蒸気車」、「蒸気船」、「川蒸気船」が「新題」として挙げられていた。

これらの点から考察するに、右の文章からは、旧派の中でも特に俳諧教導職やその作品を批判する子規の姿勢を看取できるのではないだろうか。

続けて、子規の『俳諧大要』から、「新題」に関する発言を追っていきたいと思う。

一古来季寄に無き者も略々気候の一定せる者は季に用ゐ得可し。例へば紀元節、神武天皇祭等時日を一定せる者は論を竢たず、氷店を夏とし焼芋を冬とするも可なり。又虹の如き雷の如き定めて夏季と為す、或は可ならんか（12）

ここでは、今日に至るまで季寄せに無かった語であっても、ほぼ気候の一定なものは季をもつ「新題」として用いることができるとし、「紀元節」など毎年日の決まっているものはもちろん、夏の「氷店」や冬の「焼芋」もそれに準ずるとしている。実際に「焼芋」は先出の虚子宛て書簡に確認され、『新俳句』にも立項が確認される冬季の題であった。また、「虹」や「雷」のようなものを「夏季」とすることも、可能ではないかと述べている。

これらの俳論を掲げた後、明治三一年（一八九八）に、子規ら日本派初の類題句集である『新俳句』は刊行された。ここには、「正岡子規閲」とあるが、編者には上原三川と直野壁玲瓏の名が記されている。では、子規は『新俳句』編纂にどの程度関与していたのだろうか。

宮坂静生によれば、子規は編者達が季別、類題別に編輯した「草稿」を、「削ったり、さし入れたりしながら、八分の一ほどに選抜した」という（13）。先掲の虚子宛子規書簡の内容も鑑みるに、『新俳句』の本体には、子規は「閲」、つまりチェック役として名が記されてはいるが、実際は、子規が題の選定から句の選抜まで深く関与したと見られ、子規の季や題に対する意識も色濃く反映された句集であると考えてよいだろう。

それでは実際のところ、類題句集『新俳句』において、「新題」と思しき題はどれほど採用されたのであろうか。左に、『新俳句』に立項された全六二三題のうち、「新題」として収められたと思しきもの（14）を掲げた。

冬雑之部…クリスマス、暖炉、冬服、冬帽、外套、二重まはし、吾妻コート、毛布、襟巻、手袋、火事、北風、焼芋（15）

これを見ると、『新俳句』の「新題」が冬季に集中していることがわかるが、この点についてはすでに、左のように先学の指摘がある。

三川宛子規書簡の中に冬季新題のことが見えてゐるが、「新俳句」の目次を一わたり見ると成程新味あるものは冬の季題に多い。例へばクリスマス、暖炉、二重まはし、吾妻コート、焼いも、などの如きである。焼いもの流行は寺門静軒の江戸繁盛記にも見えて居て新しいものではないが、俳句の季題としては新趣味的なものであつた。（16）

以上、子規の「新題」に対する考え方を追ってきたが、子規にとって望ましい「新題」は、季を持つ題であったと、一応は言えるのであろう。

ただ、子規は『俳諧大要』第五　修学第一期の中で次のようにも述べている。

一俳句の題は普通に四季の景物を用う然れども題は季の景物に限るべからず季以外の雑題を取り季を結んでものす可し両者並び試みざれば終に狭隘を免れざらん（17）

このような言説からは、子規が題に季を必ず必要としたというよりむしろ、題たるものに対し、一句にそれなりの文学性を保証し得るものであることを要求したということが見て取れるかもしれない。そして、その姿勢は、新事物を闇雲に「新題」として取り入れることを否定した先掲の子規の言説に通ずるものであるようにも思われる。

さて、先に芭蕉の無季についての考え方に触れたが、芭蕉の場合も、どのような形でも無季でよいと言ってい

る訳ではないようである。『去来抄』と『三冊子』には、次の記事が残る。

卯七日、「蕉門に無季の句興行侍るや」。去来曰、「無季の句は折々有。興行はいまだ聞ず。先師の曰、発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきもの也。されど、如何なる故ありて四季のみとは定め置れけん、其事をしらざれば、暫く黙止(もだし)侍ると也。其無季といふに二つ有。一つは前後・表裏、季と見るべき物なし。落馬の即興に

歩行ならば杖つき坂を落馬かな　　ばせを

何となく柴吹かぜも哀なり　　杉風（『去来抄』）（18）

朝よさ(夜)を誰松島の(ぞ)片心

此句は季なし。師の詞にも「名所のみ雑(ざふ)の句にも有たし。季をとり合せ、歌枕を用ゆ（る）、十七文字にはいさゝかこゝろざし述がたし」といへる事も侍る也。さの心にて、此句も有ける（か）。猶「杖突坂」の句在(有)。（『三冊子』）（19）

さらに、左のように、芭蕉にも無季の句例が見える。

A、月花　月と花は自然界の美を代表紙、「月花」は俳諧で無季の扱いとなる。

三翁は風雅の天工をうけ得て心匠を万歳につたふ。此かげに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや

月華の是やまことのあるじ達　　（熱田皺笛物語他、貞享五年（一六八八）以前）

酒のみ居たる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　（あら野、元禄一二年（一六九九）以前）
月か花かとへど四睡の鼾かな　（真蹟画賛他、元禄二年（一六八九））
布袋の絵讃
物ほしや袋のうちの月と花　（続別座敷他、年次不明）

B、名所　『三冊子』等に「名所のみ雑の句にもありたし」との芭蕉の言が録される。
歩行ならば杖つき坂を落馬哉　（笈の小文他、貞享四年（一六八七））
あさよさを誰まつしまぞ片ごゝろ　（桃舐集他、元禄二年（一六八九））（20）

このような芭蕉の考え方と子規のそれは、一致するかと思う。

ここまで、旧派と子規の「新題」に対する立場の相違を見てきた。自身の立場を明らかにするため必然的に子規が『新俳句』に取り込んだ「新題」と、先に取り上げた『俳諧開化集』の取り込んだ「新題」では、傾向が大きく異なり、内容に殆ど重なりがないのは特徴的である。しかしながら、「襟巻」という「新題」のように、両書に取り込まれている数少ない例もある。このように同じ「新題」を採用した場合には、旧派と子規らの作品は同傾向のものになってしまっているのであろうか。また、このような場合の子規の新風とは、どのようなものとして表出するのであろうか。ここでは「襟巻」の、『俳諧開化集』と『新俳句』における句例を比較し、詠み方にどのような違いがあるか検討してみたい。

①題「襟巻」

流行の衿巻憎し鉢たゝき　正哉

右は、『俳諧開化集』「発句の部」に載る「衿巻」の句である。さて、注目したいのは傍線部の「鉢たゝき」で

ある。「鉢たゝき」は江戸期以来、冬の季語として認知されてきた語である（21）。つまりこの正哉句においては、「衿巻」が季をもつ「新題」として十分に機能しているのかが判然としない。では『新俳句』の「襟巻」句も見てみよう。

②ラツコの皮の襟巻に顔を埋めたる　虚子
③襟巻に侘しき貧の勤めかな　同
④襟巻の解けざる客にあわて心　碧梧桐
⑤髪長く眼鏡かけたるが頸巻す　繞石
⑥縮緬の襟巻ラツコの帽子かな　子規
⑦停車場の椅子に襟巻忘れしよ　同

これらの句は、『新俳句』の「冬雑之部」に収められた冬季の句である。⑥の子規句の「ラツコの帽子」は冬の季感を有するかもしれないが、それ以外の句については、いずれの句においても、「襟巻」や「頸巻」以外に、季語として機能していると思しき語は見られない。この点で、二者の「新題」の詠み方は対照的であると言える。相違が分かりやすいように、両者に共通する「新題」句を見てきたが、ここで少し広げて、旧派の「新題」句一般も確認しておきたい。

⑧題「裁判」　花は花柳はやなぎと極りけり　甚一
⑨題「裁判」　裁判の尽ぬも花の都哉　よし彦
⑩題「勧解」　蔓草のもつれを解や秋の風　朴因

⑪題「代言人」　代り出て綾もいふらん人の為　可学
⑫題「蒸汽車」　汽車早し千本にみゆる畑の梅　藍庭
⑬題「蒸汽車」　汽車の笛なるや鶴見の橋見えて　緑蔭
⑭題「蒸汽車」　二の声は別なり汽車の時鳥　閑水
⑮題「蒸汽車」　菜の花に残るけぶりや車二里　春湖
⑯題「鉄道」　稲づまの光りや汽車の走る音　青暁
⑰題「鉄道」　嶋ひとつおほふ煙りやまかね道　嘉年
⑱題「蒸汽船」　あたらしき水の筋あり夏の月　梅岡
⑲題「蒸汽船」　跡へ飛鳥あり舟のけぶり先　開月
⑳題「蒸汽船」　初秋や入来る船の遠けぶり　潮水
㉑題「蒸汽船」　行舟の霞にからむけぶり哉　蓮水
㉒題「蒸汽船」　島めぐる舟の煙りや雲霞　兼里
㉓題「川蒸汽船」　乗合は花見もどりか川蒸汽　松星

右は子規の『獺祭書屋俳話』の「新題目」にて批難された「蒸気機関」と「裁判」、およびそれに類する題の、『俳諧開化集』における例句を引用したものである。一目瞭然ではあるが、いずれの題からも、特定の季を読み取ることはできない。傍線を付した語によって有季句になっているものもあるが、⑪、⑬、⑰、⑲のように、季を持つと思しき語を一切含まない句も見える。また、⑧から㉓の一六句のうち、題として立項している語そのものを句の中に詠み込んだものは六句のみである。残る一〇句は、例えば⑩のように、蔓草の縺れを秋風が解くという意の句を以て、調停を意味する題「勧解」を表現しようとしたり、㉒のように、昔ながらの手こぎ舟ならば

煙など吐くはずのない小舟が、「煙り」を吐きながら島巡りする様を詠むことで「蒸気船」なる題を表現しようとしたりしている。

続いて、『新俳句』の方を見てみよう。左は、『新俳句』に採用された「新題」句である。紙幅の都合上、各題一句ずつの抄出とした。

㉔題「クリスマス」　子供がちにクリスマスの人集ひけり　子規
㉕題「暖炉」　ストーヴに居残りの雇官吏かな　虚子
㉖題「冬服」　冬服の胸あひかぬる古着かな　子規
㉗題「冬帽」　冬帽を深く被りし男かな　虚子
㉘題「外套」　檐につるす外套古し柳原　愚哉
㉙題「二重まはし」　振り返る二重まはしや人違ひ　子規
㉚題「吾妻コート」　下町や吾妻コートの妾らし　碧玲瓏
㉛題「毛布」　毛布の青きは更に古びたる　虚子
㉜題「手袋」　手袋を編むべく妹が夜更けたる　愚哉
㉝題「火事」　水に映る火事は堀端通りかな　子規
㉞題「北風」　北風に鍋焼饂飩呼びかけたり　子規
㉟題「焼芋」　焼いもとしるく風呂敷に烟立つ　子規

これらを概観すると、第一に、「新題」はすべて季をもつ題として、一句に詠み込まれていることがわかる。先出の『俳諧開化集』の発句、特に無季のもののように、一句全体で題を表現するような詠み方はされていない。

題はその単語そのものを直接詠み込む形で、句の中で処理されている。

第二に、各句にはその「新題」以外に季を持つと思われる語はほぼ見えない（22）。これは、各「新題」を、季を持つ語として扱おうとする姿勢の表れであると考えられる。「新題」を新たな季の詞として取り込もうとするこの方針は、先に引用の虚子宛子規書簡にて、子規が虚子に伝えていた方針を実践したものと見てよかろう。書簡に掲げられていた「冬帽」「手袋」「やきいも」「毛布」「襟巻」「冬服」のすべてが題として立項している。加えて書簡にあった「ストーヴ」も、「暖炉」の題で立項しており、例句には虚子の「ストーヴに居残りの雇官吏かな」が掲載されている。

以上、旧派と子規の「新題」の違い、および「新題」の詠み方の違いを考察してきた。改めて子規の「新題」に対する態度を整理しておきたい。

子規は「新題」についてはこれを認め、積極的に取り入れようとする姿勢も見せていたが、選択の必要があるとし、新事物を闇雲に「新題」として取り込む姿勢には批判的であった。この批判は、旧派の中でも「特異」でありながら、強い影響力を持っていたが故に、本来の俳諧の伝統を無視した無理な「新題」を用いていた俳諧教導職に、特に向けられたものではなかったかと考えられる。

加えて子規の発言や『新俳句』からは、彼が「新題」を、季を持つ語として俳句に取り入れることに対して心を砕いていたことが端々に見て取れた。子規の死後、新聞「日本」の俳句欄を引き継いだ碧梧桐は、次のように述べている。

〇明治の新事物も沢山あるが中に、殆ど人の詩材として顧みなかった「夏帽」を題に上したのは子規子であつた。時は明治二十九年の夏である。其達腕に一度夏帽が救われて以来、明治の新題といふことに着目するものが多くなつて、夏の海水浴、冬の手袋、吾妻コート迄が詩題となるに至つたが、其第一著の標準を示し

たのは子規子の夏帽である。子規子の事業多きが中にも、一些事のやうで忘るべからざるものは、この新題を捉えた点で或る。蓋し我が俳句界に新空気を注入した先方であつた。其時の句は載せて新聞「日本」にある。

夏帽の人見送るや蜑が子等　　子規（略）
夏帽や吹き飛されて濠に落つ　　同（稿者注：子規）

今日之を見ると寧ろ幼稚の感を免れぬけれども、そは始めて生るべきものゝ逃れ難い欠点である。生れ落ちた嬰児は一人前の人間ではない。（略）
○夏帽、夏帽子、藁帽、麦藁帽子、其他パナマ、台湾パナマ等いづれを採るも差支はない。（三十八年七月十日）（23）

「夏帽、麦藁帽子」は『新俳句』の中に立項しており、同じ「夏雑之部」に収められた「涼し」や「扇」など近世以来の題と同様に扱われている。つまり先出の「クリスマス」以下の題のように、題の配列に特殊性は見られず、『新俳句』において「新題」であることを対外的にアピールした題としては扱われていない。しかし、碧梧桐の認識通りであったとすると、次のように考えられる。

ここまで見てきたように、子規の、俳句における季を持つ「新題」の選定態度は慎重なもので、一見すると、消極的なもののように見えた。選定態度が慎重なものであったことは、ここまで確認してきた通りであろう。しかし、彼の裡に秘められた、「新題」取り込みの意欲そのものは、決して消極的なものではなかった。むしろ実際には精力的かつ積極的なものであったのはないか。選定する目は厳しいものであったが、それに相応しいと感じた「新題」の取り込みには意欲的であったと窺える。少なくとも碧梧桐には、「新題」を季を持つ語として俳句に取り入れる姿勢を強く印象づけ、「夏帽、麦藁帽子」の類語である「パナマ、台湾パナマ等いづれを採る

も差支はない」と言わしめるまでの影響を与えたことが、ここから看取される。

おわりに

本章冒頭に取り上げた子規の発言のように、子規は旧派の句を「陳腐」だとし、旧派を批判する形で俳句革新運動を展開した。しかし、第四節における『獺祭書屋俳話』での子規の発言と、『俳諧開化集』等「開化の部」を設けた「特異」な発句集の句を対照させると、子規の批判が、常に旧派全体に対して向けられていたとは言えないように思われる。少なくとも、本章で取り上げた『獺祭書屋俳話』の「新題目」という文における批判は、旧派全体というよりむしろ、俳諧教導職による、新しくも奇抜な試みや姿勢に対して特に向けられたものであったように見える。

加えて、子規が「新題」を単なる句材のみならず、季を持つ題にしようとし、その選別や例句作りに苦心惨憺する様は、旧派の「新題」の取り込み方と好対照をなしていると思われる。

これまでの俳句革新運動の議論では、子規らが、古くて「陳腐」な旧派を批判する形で展開し、その「月並調」の句に対して、子規らが「新奇」な句を次々に発表していったという点が脚光を浴びることが多かったように思われる。しかし、「新題」をめぐる子規らの動静を旧派と対照させながら追うことで、子規らが古典に学び、その中に文学性を見出し、新時代においてもそれを時代に合う形で追求しようとしたことや、時には前近代から続くそれを守ろうとした部分もあったという視座の必要性があるように、改めて感じる。したがって、続く第四章では、子規が明治二八年（一八九五）発表の『俳諧大要』において、古句、中でも芭蕉の句や蕉風俳諧に学ぶよう説いていた事実を取り上げ、そのことと子規の俳句革新の関連について具体的に検討したいと思う。

第四章　正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――芭蕉句および蕉風俳諧を中心に

第四章　正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――　芭蕉句および蕉風俳諧を中心に

はじめに

正岡子規の目指した俳句革新は、子規らが、古くて「陳腐」な旧派を批判する形で展開された。そして、この革新については、旧派の「月並調」（1）の句に対して、子規らが「新奇」な句を次々に発表していったという点が脚光を浴びることが多かったように思われる。

しかし、子規はその俳句革新において、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることを主張したわけではなかった。後述するが、子規は、古句を学び、そこから実作への手がかりを掴むことを説いている。

しかし単純に考えて、古句に学びそれを俳句の実作に反映させることは、「古人の類句」（2）に陥り「陳腐」な句を生む危険があることのように思われる。

では、「新奇」を生むために古句に学ぶという一見矛盾したような手法をとる必然性は、どこにあったのであろうか。また子規は古俳諧からどのような点を学び取ったのであろうか。

本章では、俳句実作者に対し、古句を読むことを奨励する子規の発言に焦点を当て、古句を読む意義について、子規がどのように考えていたのかを検討したい。

第一節　俳句実作者にとっての古句

（1）実作への古句の活用法その一――古句の消極的活用

子規は、『俳諧大要』（明治三二年（一八九九）一月、ほとゝぎす発行所刊）にて、古句を学ぶことの利点や必要性を、次のように述べている。

一点目は、「修学第一期」つまり俳句初学者を対象としたものである。

一古句を半分位窃み用うるとも半分だけ新らしくば苦しからず時には古句中の好材料を取り来りて自家の用に供す可し或は古句の調に擬して調子の変化をも悟る可し

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

ここにはかなり直接的な、古句を読み俳句実作に還元する方法が述べられている。

まず、古句を半分位盗用するのも、残りの半分が新しければ差し支えないとする。従って、時には古句の中から「好材料」を取ってきて自分の句に用いるのも良いとしている。また、「古句の調」に似せて、「調子の変化」をも悟るのが良いとしている。このあたりは、特に初学の俳句実作者に対するアドバイスとして、首肯しやすいものと思われる。

二点目は、「修学第三期」、即ち俳句を学ぶ上で最後にして終わりのない境地に達した者たちを対象としたものである。

一俳句につきて陳腐と新奇とを知るは尤も必要なり陳腐と新奇とを判するは修学の程度によりて其範囲を異にす俳句を見る事愈々多ければ其陳腐を感ずること随つて多かるべし第二期に在る者初学の俳句を見れば只其陳腐なるを見る第三期に在りて第二期を見る亦此の如きのみ而して能く新陳両者の区別を知るには多く俳書を読むに如かず

（『俳諧大要』第七　修学第三期。初出新聞『日本』明治二八年一二月二三日）

子規は、俳句の「新奇」と「陳腐」の区別を付けられるようになるために、俳書を多く紐解き、俳句を多読することが肝要であると説いている。

ここで俳句における「陳腐」と「新奇」の定義を、子規の発言から確認しておきたい。

○問　新俳句と月並俳句とは句作に差異あるべきものと考へらる。果して差異あらば新俳句は如何なる点を主眼とし月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや。

答　新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。新派にも種々あるべく我尽く之を知らず。若し我俳句に就きて言はんか。（略）第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あり。例へば『黄鳥の初音や老の耳果報……蓬宇』の如き誰が聞きても陳腐なるべきを此老俳諧師は今更のやうに作れり。此句の如き必ずしも類句を挙げて而して後始めて其陳腐を知る者にあらざれども念のために古人の類句を示さんに

鶯の耳に順ふ今年かな　紹巴
鶯や耳これを得て今朝の春　昌察
鶯や耳の果報を数ふ年　梅室
六十の春
鶯に耳面白き今年かな　乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最とも相類似せるを見る。

（『俳句問答　上之巻』（明治三四年一二月、俳書堂・金尾文淵堂書店刊）初出新聞『日本』明治二九年七月二七日）

ここからは、「陳腐」な句とは、「古人の類句」、「相類似せる」句が既に多数存在する句であることが看取される。

逆を言えば、俳句の「新奇」なる句とは、「古人の類句」が限りなく少ないか、存在しない句と解することができる。

したがって、『俳諧大要』にて「修学第三期」のものたちに子規が説いているのは、「古人の類句」ばかりの「陳腐」な句ではなく、「新奇」な句を作るためには、「古人の類句」が如何なるものかを頭に入れておく必要があるということである。そして、そのためにできるだけ多くの俳書を繙く必要があるということであると諒解される。ここからも、俳句実作者が「新奇」な句を生むために、古句を学ぶという一見矛盾したような手法をとる必然性が見て取れる。

以上二点、子規の指摘する、古句を学ぶ利点や必要性を確認してきた。

ただし、これらの二点だけで、子規の目指す「新奇」な俳句を精力的に生み出すことは困難であろう。まず、俳句初学の段階での古句の利用という一点目は、積極的に古句を活用せよという種の指南ではなかった。むしろ「時には」という条件付きの、初学者向けの消極的な活用法であったと言う方が正確であろう。

続く二点目は、俳句の最終的境地に達した者たちに対して、同類句に陥らないための、いわば確認作業ができるようになることの必要性を説いたものである。これもやはり、「新奇」な作品を生むための古句の積極的活用とは言いがたい。

要するに、先の二点いずれをとっても、子規が目指す「新奇」な俳句を生むことに直接的につながるとは考えがたいのである。

では反対に、古句を読むことが子規の目指す「新奇」な俳句を生むことに積極的につながるとしたら、

子規はどのような活用法を想定していると考えられるであろうか。

（２）実作への古句の活用法その二――古句の積極的活用

１、子規が重視した俳書

子規が古句を読むことを薦めた理由は、古句からその創作のあり方を学び取ることにある。実は古句には、その時代時代で「新奇」な作品が多く存在する。では、それらはどこに存するのであろうか。子規は、『俳諧大要』および『俳句問答』にて、俳句初学者向けに、具体的に俳諧集を列挙し紹介している。

一古人の俳句を読まんとならば総じて元禄明和安永天明の俳書を可とす就中俳諧七部集続七部集蕪村七部集三傑集など善し家集にては芭蕉句集（何本にても善けれど玉石混淆し居る故注意す可し）去来発句集丈草発句集蕪村句集などを読む可し但しいづれも多少は悪句あるを免れず中にも尤とも悪句少なきは猿蓑（俳諧七部集の内）蕪村七部集蕪村句集位なる可し（故人五百題は普通に坊間に行はれて初学には便利なり）

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

○問　俳句を学ばんとするには古人著書中初心に適する者何なりや。

答　初心に適する者とて小学読本の如きは無し。たま〳〵初学者を指導すべきために作りたる書（苧環、真木柱の如き）無きにあらねど全く邪路に陥りて或は文学以外に度（わた）りたりと覚ゆる処少からず。此等は読むべからず。初学者には類題の集こそ善かるべけれ。俳諧七部集、蕪村七部集、類題発句集、俳諧新選、題林発句集、新題林発句集、三傑集、故人五百題等先づ読むべき書なり。各家の集も漸次

に味ふべし。

（『俳句問答』初出新聞『日本』明治二九年七月二九日）

第一に、前者の記事において子規は、俳句初学者には「元禄明和安永天明」の俳書が適当であるとしている。「元禄」（一六八八―一七〇四）は芭蕉（正保元年（一六四四）―元禄七年（一六九四））の活動期に重なる。また、「明和」（一七六四―一七七二）、「安永」（一七七二―一七八一）、「天明」（一七八一―一七八九）の一連の時期は、蕪村（享保元年（一七一六）―天明三年（一七八三））の活躍期と重なっている（3）。

第二に、後者の記事から、「類題の集」、つまり類題句集が適当であるとしていることが読み取れる。さらに「各家の集」、つまり俳人個人の私家集も、段々に読んでいくことを薦めている。

第三に子規は、いずれの記事でも具体的な俳書名を挙げて初学者に薦めている。これらの俳書はどのような性質を持つものであろうか。以下、二つの記事で重複する俳書を中心に、各俳書の概要等を簡単に確認しておきたい。

2、子規が初学者のために挙げた俳書群の概要

①「俳諧七部集」と「続七部集」

まず、いずれの記事でも第一に名前の挙がっている「俳諧七部集」から見ていきたい。「俳諧七部集」は柳居（貞享三年（一六八六）―延享五年（一七四八））編の俳諧叢書『俳諧七部集』を指す。子規は『俳諧七部集』を次のように紹介している。

俳諧七部集といふ書あり。最遍く坊間に行はる。板行の書亦五六種より猶多かるべし。此書は「冬の日」「春の日」「ひさご」「あら野」「猿蓑」「炭俵」「続猿蓑」の七部を合巻となしたる者にて安永の頃より始まりし事にや。其後寛政享和の頃続七部集及び七部集拾遺出で文政十一年に新七部集を出だせり。其外天明以後には其角七部集蕪村七部集樗良七部集暁台七部集枇杷園七部集道彦七部集乙二七部集今七部集等続々出でたれば此等に対して俳諧七部集を芭蕉七部集とも言ふべきか。

（『増補再版獺祭書屋俳話』（明治二八年九月、日本新聞社刊）より「芭蕉雑談」内「著書」項。初出新聞『日本』明治二六年一二月二四日）

加藤定彦はこの書の特徴を、「蕉風の原点に帰るべく七部を選定し、亀鑑としたもの」（『俳文学大辞典』「俳諧七部集」項）と紹介している。

その中でも「猿蓑」は去来・凡兆編による俳諧撰集である。其角序、丈草跋、元禄四年（一六九七）刊で、『俳諧七部集』の第五に当たる。阿部正美は「入集句数では凡兆四一句、芭蕉四〇句（略）一句のみの入集の作者も七一人に及び、当時の蕉門俳家がほぼ網羅される。（略）編者二人の背後には芭蕉が眼を光らせており、句の選を厳しく指導したことは、『去来抄』に伝えられた編集中の逸話などによっても明らかである」（『俳文学大辞典』「猿蓑」項）と指摘しており、『俳諧七部集』の中においても芭蕉の影響の特に濃い書であることが窺える。

「続七部集」は闌更（享保一一年（一七二六）―寛政一〇年（一七九八））編の俳諧撰集『俳諧続七部集』（4）を指すものと思われる。山本和明によれば、「『俳諧七部集』には、芭蕉の連句未収の『はるの日』を含むなど七部集と呼ぶに不合理な点があるとし、これに対し不合理を正した新しい七部集を編む意図をもって編まれたもの」（『俳文学大辞典』「俳諧続七部集」項）であり、やはり蕉風の俳書であること

がわかる。

②「蕪村七部集」

「蕪村七部集」とは、菊舎太兵衛ほか編の俳諧撰集『蕪村七部集』である。中野沙惠は「几董編『其雪影』『あけがらす』（『あけ烏』）、蕪村編『一夜四唫』（『此ほとり』）『花鳥篇』、几董編『桃李』（『もゝすもゝ』）『続あけがらす』『続四歌仙』（『続一夜四可仙』）、維駒（これこま）編『五車反古（ほうぐ）』の八部を収め、（略）蕪村関係の主要な撰集は入っている」（『俳文学大辞典』「蕪村七部集」項）とする。

「三傑集」は車蓋編の俳諧句集『発句三傑集』（5）を指し、ここでの「三傑」とは、闌更、暁台（享保一七年（一七三二）―寛政四年（一七九二））、蓼太（享保三年（一七一六）―天明七年（一七八七））の三俳人である。

闌更は「蕉風復興を志し」（『俳文学大辞典』田中善信「闌更」項）、先出の『俳諧続七部集』を編んだ人物として知られる。

暁台は、「はじめ伊勢派・美濃派の俳諧を学び、平俗な小理屈の作風であったが、やがて芭蕉に学び、蕉風復興を志し、特に芭蕉の『冬の日』の時期の作風を慕い、高雅な詩趣を示して中興俳諧の一翼を担った」（『俳文学大辞典』山下一海「暁台」項）と評される人物である。

蓼太の「俳風は、師吏登の所説を受けて芭蕉晩年の炭俵風を基調とし」（『俳文学大辞典』、加藤定彦「蓼太」項）たものである。

以上のように、三者いずれも蕉風復興を志している点が共通している。

③「各家の集」と「故人五百題」

「各家の集」についても見ておきたい。「芭蕉句集」は、土芳編『蕉翁句集』ほか多数存する芭蕉の句集を指すと思われるが、「何本にても善けれど玉石混淆し居る故注意す可し」と注意書きがある。

「去来発句集丈草発句集」は一般に、蝶夢（享保一七年（一七三二）―寛政七年（一七九五））編『去来発句集』（6）と呼ばれる俳諧句集である。

「蕪村句集」は几董編『蕪村句集』（7）を指す。「『蕪村自筆句帳』より八六八句を選び、ほぼ四季類題別に改編」（『俳文学大辞典』尾形仂「蕪村句集」項）したもので、蕪村の家集にして類題句集でもある書と見ることができる。

「故人五百題」は松露庵烏明（うめい）編、亀足・瓜州（かしゅう）校の俳諧撰集『故人五百題』（8）で、広く流布した類題句集である。

④子規が俳句初学者に薦めた俳書の特徴

二つの子規の記述から、子規が俳句初学の者に対し、読むのを認めた書物の条件は、次のように整理できる。

第一に、芭蕉や蕪村の活動期の俳書であること。

第二に、その中でも、柳居編『俳諧七部集』、闌更編『俳諧続七部集』、菊舎太兵衛ほか編『蕪村七部集』、車蓋編『発句三傑集』、土芳編『蕉翁句集』など芭蕉の家集、几董編『蕪村句集』などを読むべきだとすること。

第三に、その中でも「悪句」が少ないのは、去来・凡兆編『猿蓑』、『蕪村七部集』、『蕪村句集』であること。

ここに名の上がる俳書はいずれも、芭蕉と蕪村の活動期との重なりを追求している点に共通項が見られる。特に芭蕉に関しては、選集に芭蕉が強く関わっていたとされる『猿蓑』を最良の書の一つに挙げるなど、強い蕉風追求の姿勢が看取される。具体的に名前の挙がった俳書から、蕪村に関する俳書を除くと、いずれも蕉風俳諧および蕉風復興を志したものであるといえる。

さらに第四として、子規は松露庵烏明（うめい）編『故人五百題』が、市中に広く流布していて、俳句の初学の者には都合が良いとしている。

この第四をわざわざ付した背景としては、『故人五百題』の内容もさることながら、「悪句」の少ない俳書として挙げた『猿蓑』『蕪村七部集』『蕪村句集』のうち、特に、『蕪村句集』が、明治二八年（一八九五）の時点ではまだ殆ど流布しておらず、なかなか手に入らなかったという事情も考えられる。

3、『俳諧七部集』などを重視した理由

さて、子規が画家蕪村を俳人として「再発見」し、称揚したことは広く知られている（9）。

他方、芭蕉に関しては、子規が芭蕉を強く批判した、あるいは、芭蕉と代える形で蕪村を称揚したとする先行研究も確認された（10）。

にもかかわらず、子規が俳句初学者に対し、蕉風俳諧や蕉風復興を志した俳書を薦めたのはなぜであろうか。

子規は「俳諧大要」「修学第一期」の冒頭で、俳句初学者に対し、次のように指南している。

一俳句をものせんと思はゞ思ふまゝをものすべし巧を求むる莫れ拙を蔽（おほ）ふ莫れ他人に恥かしがる莫れ

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一日）

ここで子規は、俳句初学者に対し、俳句を「思ふまゝ」に詠めと言っている。では、俳句を「思ふまゝ」に詠むとは具体的にどのようなことか。

一初学の人俳句を解するに作者の理想を探らんとする者多し然れども俳句は理想的の者極めて稀に事物をありの儘に詠みたる者最も多し而して趣味は却て後者に多く存す例へば

古池や蛙飛びこむ水の音　　芭蕉

といふ句を見て作者の理想は閑寂を現はすにあらんか禅学上悟道の句ならんか或は其他何処にかあらんなどゝ穿鑿（せんさく）する人あれどもそれは只だ其儘の理想も何も無き句と見る可し古池に蛙が飛びこんでキヤブンと音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり

稲妻やきのふは東けふは西

といふは諸行無常的の理想を含めたるものにて俗人は之を佳句の如く思ひもてはやせども文学としては一文の価値無きものなり

（『俳諧大要』第五　修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一一日）

俳句初学者が句を読むとき、とかく句に込められた「理想」を追究しがちであるが、実際は「事物をありの儘に詠みたる」句が最も多く、またそのような句の方に「趣味」が多いと説いている。この、「事物をありの儘に詠」む姿勢こそ、芭蕉の俳諧に子規が認めた「新奇」な句を生む可能性ではなかったか。それと同時に、俳句初学者に子規が求めた、実作の姿勢ではなかったか。

復本一郎は、「子規は、芭蕉句を、あくまでも自己とのかかわりにおいてのみ作られる類（たぐい）の「記実」の句だと評している。逆の視点より見れば、それこそが芭蕉俳句の特色として指摘し得るということであろう。「記実」とは、「写生」「写実」「ありのまま」等と一般である」（11）と述べている。

さてこの、「事物をありの儘に詠」むという姿勢は、しばしば子規によって賞賛されている。

〇俳句は短し、故に天然を写しても詳細なるを得さる程なれは況して修飾を施すへき余地少し、俳句は簡にして尽さんとする必要より美の最も多き部分のみを取り其他醜なる者と不要なる者と美の少き者とは之を捨つるの已むを得さるに至る、されは故意に修飾を為さすとも自然と修飾を為したる訳なり、いよ〳〵以て俳句は実景を写さんと心かくへし、実景を写すために形勝を採り山水に遊ふは佳句を得る第一良法なり、芭蕉か越後の出雲崎に出て佐渡を望んで

あら海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

と詠したるは実景をそのままに写してしかも成功したる者なり、

畑打のはるかに一人二人かな　行露
子をつれて岩にふり向く雉子かな　魚光
鶯や枝から枝へ鳴きなから　柏舟
若草の中行く水の小鮠かな　快之
鼻紙の間に萎む菫かな　その
麓迄下りれば花の夕かな　敬止
石地蔵筒一ぱいのつゝしかな　嘯山
水澄んで籾の芽青し苗代田　支考

凧ひかへて渡る小川かな　　舎羅
御手洗の木の葉の中の蛙かな　　好葉
小松引真白に細きかひなかな　　滄波
ふり向けば灯とぼす関や夕霞　　太祇（ママ）

の如きも皆実景実事をありのまゝに写したるのみにて殆んど修飾を加えざる処に天然の美の発揮せられたるを見る、

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

豪壮に非ず華麗に非ず奇抜なるにも非ず滑稽なるにも非ず、はた格調の新奇なるにも非ず、只一瑣事一微物を取り其実景実情をありの儘に言ひ放して猶幾多の趣味を含む者には

五月雨や色紙へぎたる壁の跡
さゝれ蟹足這ひ上る清水かな
海士が家は小海老にまじるいとゞ哉
ひいと鳴く尻声悲し夜の鹿
松茸や知らぬ木の葉のへばり付く
橙や伊勢の白子の店ざらし
行秋の猶頼のもしや青蜜柑
鞍壺に小坊主のるや大根引
塩鯛の歯茎も寒し魚の棚

の如きあり。

（『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「各種の佳句」項。初出新聞『日本』明治二六年一二月二〇日）

以上の記事のように、子規は、「事物をありの儘に詠」んでいる句を、「実景をそのままに写して」、「実景実事をありのまゝに写したるのみにて」、「其実景実情をありの儘に言ひ放して」と言葉を換え、繰り返し賞賛している。さらに、事物をありのままに詠むための手段として、「実景を写すために形勝を採り山水に遊ふは佳句を得る第一良法なり」と述べている。

この、「実景を写すために形勝を採り山水に遊」ぶことを、旅を以て実践した芭蕉について、子規は、「芭蕉は好んで山河を跋渉したるを以て実験上亦夥多の好題目を得たり」（12）と評価している。

○実景を直写したる句は、言はゞ立案者造化、句作者俳人某ともいふべき者にして、趣向立ての上には毫も作者の手柄無し、（其景を選り出したるだけが手柄なり）故に世人も之を貴はぬ者多く作者自身も亦其価値を知らぬこと屢なり、然れども多く作り屢誦し月を経、年を重ねたる後再び之を見るべし、必ず実景的の句の趣味深きを知らん、空想を凝らして得たる句は其当時は無上の名句と感ずるも、一年二年を経て後に之を誦すれば嘔吐を催すべき者少なからず、這般の事は理窟を並べて論ぜんより実際に就きて試験するが近道なり、

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

一俳書を読むを以て満足せば古人の糟糠を嘗むるに過ぎざるべし古句以外に新材料を探討せざるべからず新材料を得べき歴史地理書等之を読むべし若し能ふべくんば満天下を周遊して新材料を造化よ

り直接に取り来れ

（『俳諧大要』第七　修学第三期。初出新聞『日本』明治二八年一二月二三日）

○実景より句を得んと欲しなば何時にても歩行（あるく）べし何処へでもいくへし、俗人は旅行物見は春を善しとすと言ひ、所謂風流人は行脚散歩は秋に限りたりと言ふ、是れ詩趣を解せぬなり、俳句を得んとするには春も夏も秋も冬も一様に宜しく敢て甲乙を言ふべきにあらす、俗人は名所見物とて京、江戸、宮島、日光などへ行くことを喜び所謂風流人は歌枕を探るとか山水に傲（ママ）遊するとか称へて須磨、奈良に遊び富士、妙義に上るを好む、此等の処固より詩趣無きにあらねど詩趣は此等の処に限るにあらす、詩趣は地球の上、雲霧の外、見る処、到る処に満ち〳〵たり、

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第二号、明治三〇年二月一五日）

かつて芭蕉が旅をし、「形勝を採り山水に遊」んで佳句を得たように、俳句実作者に対して、「実景を直写したる句」を作ることや、「実景より句を得」ることを、子規は奨励している。さらに、その言説の中で、「造化」という、芭蕉の言説の影響ともとれる語を使用している点にも注意が必要である。

要するに、子規は、俳句革新の方向性や方法論を蕉風俳諧から汲み取ろうとしたのであろう。反対に蕉風俳諧の側から言えば、蕉風俳諧が、子規の俳句革新の方向性や方法論に大きな影響を与えたということになる。

4、事物をありのままに見ることと、見た事物をありのままに表現すること

芭蕉や蕉風俳諧が、子規の俳句革新に対して与えた影響については、ここまで確認してきた通りである。

しかし、これだけでは、議論は、蕉風俳諧が俳句革新の方向性や方法論に資したというにとどまってしまう。

つまり、蕉風俳諧が子規の目指した「新奇」な句の実作に、どのような影響を与えたか、言い換えれば、子規の古句研究が「新奇」な句の実作にどのように還元されたかの議論までは、至っていないように思われるのである。

この点、即ち、蕉風俳諧など子規が読むことを推奨した古句の、具体的かつ積極的な活用法に言及した先行研究は、あまりないように思われる。本項ではこの点について検討してみたい。

ところで、「事物をありの儘に詠」むと、ここまで繰り返してきたが、そこには少なくとも二つの段階が存在する。第一段階は、事物をありのままに見ることであり、続く第二段階は、見た事物をありのままに言葉で表現し、俳句の形にまとめ上げることである。

○俳句を作る時に古句の中より趣向を得来らんとするもの多し。古句を見るは善きことなれども之にのみ執着する時は陳腐なる趣向を生じ易し。古句は参考のために読むのみとして趣向は実景実物を見て考え起すべし。必ず新しき趣向を得ん。

（「俳諧反故籠」初出『ほとゝぎす』第一号、明治三〇年一月一五日）

ここでもやはり「趣向は実景実物を見て考え起すべし」と、「実景実事をありのまゝに写」すことや、事物をありのままに詠むことと多分に重なる内容のことを述べている。さらに、「古句は参考のために読むのみとし」と述べているが、これは文脈から、句作の「参考」であると考えられる。句作の「参考」ということは即ち、「趣向」を「実景実物を見て考え起」した句を詠む参考にせよとの意味であるととれる。

要するに、古句を、事物をありのままに詠んだ句を作る参考にせよとの意であると考えられる。

事物をありのままに見ることと、それをありのままに言葉で表現することには、乖離がある。また、同じ「事物をありのままに表現する」ことであっても、絵画のようにカンバスの上で画材を使って表現するのと、紙に文字で書き付けて表現するのでは、同じようにはいかない。初学者が、目にした事物をありのままに言葉で表現するには、実践の手本が是非とも必要である。蕉風俳諧は、この溝を埋めるのに格好の存在であったのではないか。

以上をまとめると、次のように整理できるであろう。

第一に、芭蕉の句は、事物をありのままに詠んでいる点に「新奇」な句を生む可能性が存すると、子規は評価していた。

第二に、事物をありのままに詠んだ句を実際に作ることにおいて、芭蕉や蕉風の数多の句の中には、その手本となりうるものが多く含まれていると、子規は考えていたと推測される。

第二節　旧派俳諧のあり方

それでは、子規の俳句革新において批判の対象とされた旧派の句は、どのような性質のものであったのだろうか。『俳諧大要』において、子規は次のように述べている。

一月並風に学ぶ人は多く初めより巧者を求め婉曲を主とす宗匠亦此方より導く故に終に小細工に落ちて活眼を開く時無し初心の句は独活の大木の如きを尊ぶ独活は庭木にもならずとて宗匠達は無理にひねくりたる松などを好むめり尤も箱庭の中にて俳句をものせんとならばそれにても好し然り宗匠の俳句は箱庭的なり併し俳句界はかゝる窮屈なる者に非ず

（『俳諧大要』第五修学第一期。初出新聞『日本』明治二八年一一月一日）

旧派の句は、「初めより巧者を求め婉曲を主とす」るもので、旧派宗匠たちはそこを起点として俳句初学者を指導するが故に、旧派に学ぶ人々は「終に小細工に落ちて活眼を開く時」が無いとしている。ここでの子規の旧派批判の表現は、先に引用した『俳諧大要』「修学第一期」の冒頭文の「巧を求むる莫れ拙を蔽（おほ）ふ莫れ」に対応する形で書かれている。

要するに、旧派の句は、対象をありのままに見ることも、それをありのままに表現することもなく、技巧に走り、かつ型にはまったものであったと、子規は評しているのである。

そのような作品は、過去の発句の表現や趣向をそのままに利用したもので、過去の作品の模倣の域を出ない。むしろ、模倣の域を出ないことを主眼としているとも言えるかもしれない。古人の作った「箱庭」のような仮構の中で、「無理にひねくりたる松など」のような人工物を趣向として重んじ、さらにそれを巧みで婉曲的な古人の言語表現をまねて表現する。ここからは、理屈の上では当然ながら、反復的な趣向を持った、反復的な言語表現の句ばかりが生まれてくることになる。

子規は、「宗匠の俳句は箱庭的なり」とした上で、「併し俳句界はかゝる窮屈なる者に非ず」、つまり、俳句の世界は、「箱庭」に喩えられるような窮屈なものではないと述べている。「箱庭的」な句に対置されるものが「事物をありの儘に詠」んだ句であるとすると、論はより明確になる。

句作の第一段階において、旧派が、古人の作り出した「箱庭」のような仮構の中で句作をはじめるのに対し、子規は、「造化」が作り出した「実景」の中で句作を始めるのが、「佳句を得る第一良法」であるとする。

続く第二段階において、旧派が「無理にひねくりたる松など」のような人工物を趣向として重んじるの

に対し、子規は「趣向は実景実物を見て」考え起こせと訴える。

第三段階において、事物を見る姿勢において、旧派は古人が作り出し、反復的に継承してきたものの見方で対象を捉えようとすることを良しとするのに対し、子規は、事物をありのままに見ることを推奨した。

そして第四段階において、言語表現において、旧派が古人の作り出した巧みで婉曲的で、かつそれらの型にはまった表現を重視するのに対し、子規は、事物を見たままに言葉で表現せよとした。

このように見てくると、旧派の句が、仮構の中の、人工物を、古来の伝統的なものの捉え方で捉え、さらに伝統的かつ反復的な表現で言語化するという、尻すぼまりのような形で形成されていく過程が見て取れる。

これに対し、子規の提唱する「新奇」な句の作り方は、箱庭を出て「造化」の中にいくらも存する事物を、あるがままに見て捉え、さらに伝統にとらわれることなくあるがままに言葉で表現するという、末広がりの様相を呈していると言えるのではないか。そして、この裾野の広がりが、「新奇」な句を生むと、子規は考えたのではあるまいか。

第三節　事物をありのままに言葉で表現することと「即景」

第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくること。

第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現すること。

子規が芭蕉や蕉風俳諧に以上のような姿勢を看取し、これを評価していたことを確認してきた。そして、蕉風俳諧から子規が俳句革新の方向性や具体的手法を汲み取ろうとしてきたものと考察した。

では、子規自身は、このような俳句革新の方向性や具体的手法を、どのように俳句実作に還元していたのであろうか。

ここでは芭蕉が旅をして「造化」に「趣味」や「趣向」を求めたことを参考に、子規の紀行文と俳句を材料として、この問題を検討してみたい。

左は、明治二六年（一八九三）四月に新聞『日本』に発表された「鎌倉一見の記」からの引用である。

先づ由井（ママ）が浜に隠士をおとづれて久々の対面うれしやととつおいつ語り出だす事は何ぞ。歌の話発句の噂に半日を費したり。即景

陽炎や小松の中の古すゝき

春風や起きも直らぬ磯慣松

ひとりふら〳〵とうかれ出でゝ縄手づたひにあゆめば行くともなしに鶴が岡にぞ着にける。銀杏を撫で石壇を攀（よ）ぢ御前に一礼したる後瑞垣に憑（よ）りて見下ろせば数百株の古梅やゝさかりを過ぎて散りがてなるも哀れなり。

銀杏とはどちらが古き梅の花

（「鎌倉一見の記」初出新聞『日本』明治二六年四月五日）

続いての引用は、明治二七年一二月に新聞『日本』に発表された、「総武鉄道」からである。

鉄道は風雅の敵ながら新らしき鉄道に依りて発句枕を探るこそ興あらめと二人して朝疾く出で立つ本所の割下水にり（ママ）て即景

染汁の紫こほる小川かな

（「総武鉄道」初出新聞『日本』明治二七年一二月三〇日）

前者は、「由井(ママ)が浜」にて、俗世間との交わりを断ってひとり暮らす人を訪ねた折に、「即景」で二句を詠んだものである。また後者は、現在の東京都墨田区、旧本所区にあった割下水(わりげすい)が、恐らく凍っていたのを見て、「即景」で、染料の汁の紫が凍っている小川であることよ、と一句詠んだものである。

「即景」とは、「まのあたりに見る風景。眼前の景色」(小学館『日本国語大辞典』第二版)の意である。したがって、目の当たりにした風景をありのままに言葉で表現し、俳句にまとめたのだとしたら、先の芭蕉や蕉風俳諧の姿勢に重なる。『俳諧大要』の初出が明治二八年(一八九五)一一月一日以降であるので、「鎌倉一見の記」は二年半以上、「総武鉄道」でも一年弱の時間のずれが生じ、いずれの紀行も『俳諧大要』に先行する。しかしながら、想像をたくましくすれば、「鎌倉一見の記」の時にはすでに、明治二五年の「獺祭書屋俳話」を嚆矢とする、子規の俳句革新は始まっていた。したがって、蕉風俳諧から汲み取った俳句革新の方向性や具体的手法が、明治二六(一八九三)の時点で既に確立していたとしても、不思議はないのではないか。

おわりに

以上、俳句革新を目指した子規が、一見、矛盾するごとき古句への視線を持っていたことの事実とその意味を論じてきた。

正岡子規は俳句革新を目指したが、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることを主張したわけではなかった。子規が『俳諧大要』において、特に初学者向けに推薦する俳書名を逐一確認していくと、『蕪村句集』など蕪村関係の俳書と並び、『俳諧七部集』を始めとする蕉風俳諧及び、蕉風復興を志した俳書が数多く含まれていることに気づく。

旧派が無批判に尊崇した芭蕉の句や蕉風の俳書を読むことを、子規が敢えて推奨した理由は次のように考えられる。第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくる姿勢、そして第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現する姿勢。子規はこれらの姿勢を、蕉風俳諧に看取し、そこに「新奇」なる句を生み出す可能性を認めたためであった。さらに実作の手本としても、蕉風俳諧を評価していたからと考えられる。

本章では、子規の俳句革新の方向性や具体的方法に対し、蕉風俳諧が与えた影響について検討してきた。そこでは「事物をありの儘に詠」むという意の表現が繰り返されていた。では、子規の俳論として著名な「写生論」へは、ここからどのようにつながっていくのであろうか。

子規が、絵画の写生論を俳句にくみ入れたのが、中村不折の影響であることは、広く知られているところである。加えて子規は、画家であり俳人であった下村為山（牛伴）と次のような議論を展開したことを記している。

一はじめの程は空想ならでは作り得ぬを常とすやがて実景を写さんとするにつかまえ処無き心地して何事も句にならず度々経験の上写実も少し出来得るに至れば写実程面白く作り易きはなかるべし空想の陳腐を悟り写実の斬新を悟る亦此時にあり油画師牛伴と語る事あり牛伴日く画に於ても空想を以て競争せんには老熟の者必ず勝ち少年の者必ず負く然れども写生を以てせんか少年の者の画く所の者亦老熟者を驚かすに足ると真なるかな

（『俳諧大要』第六　修学第二期。初出新聞『日本』明治二八年一二月八日）

右の記事により、子規の写生論は、不折によってその萌芽を得たが、その枝葉の部分には為山をはじめと

する他の画家の影響もあったことが示唆されよう。

さらに時代を遡って、坪内逍遙や二葉亭四迷らに代表される、文学における写実主義と俳句における子規の写生論の影響関係は、どのように整理できるであろうか。

子規の写生論と明治前期の文学・美術思潮との関わりについては、今後の課題としたいと思う。

第五章　「紀元節」とその異称「梅花節」について

第五章　「紀元節」とその異称「梅花節」について

はじめに

紀元節は明治五年（一八七二）に制定された年中行事である。『図説俳句大歳時記』および『日本年中行事辞典』にて鈴木棠三は次のように解説している。

紀元節 初　梅花節　梅佳節

解説　二月十一日。旧日本帝国時代には、四方拝・天長節・明治節と並んで四大節として祝った祝日の一つ。昭和二十三年七月二十日法律第一七八号「国民の祝日に関する法律」によって旧来の祝祭日は抹消されたので、紀元節もまた廃された。紀元節は、神武天皇即位の第一日を建国の記念日として、明治五年（一八七二）に制定されたもので、当日は早朝に皇霊殿で天皇の親祭があり、天皇退出後に庭上の神楽舎で神楽が奏され、また朝の御祭の後に豊明殿で皇族・高官・外国使臣などに宴を賜わり、その間舞楽久米舞の演奏などがあった。

二月十一日を建国の日と定めた根拠は、『日本書紀』に「辛酉の年春正月庚辰朔、天皇帝位に橿原の宮に即く」とある紀元元年正月一日を陽暦に換算したものとされている。右の時代にいかなる程度の暦が存在したか、科学的にはすこぶる疑問で、これを陽暦に換算するにもその方法がないわけである。ただし『日本書紀』の記事の根拠については、だいたい推定されている。すなわち、わが国に初めて暦法の渡来した欽明天皇の治世を中心とし、その第一年（五四〇）をもって紀元一二〇〇年と仮定し、当時使用されていた元嘉暦という中国の暦によって、この年は庚申だからそれから一二〇〇年さかのぼらせると元年は辛酉の年に相当

し、その一月一日は庚辰の日に当たるというふうにつじつまを合わせたものであろうという。

この日は明治二十二年憲法発布の日でもあり、梅花の咲きそめる時期に当たるので、梅花節・梅佳節などの異称もあった。廃止後も、明治のよき古き日を象徴する祝日としてなつかしむ人々も少なくなく、また各国ともに建国記念日を制定している例が多いことなどの理由から、紀元節に代わる建国記念日設置の要望が一部にたかまり、それを実現するために昭和三十二年五月十五日の衆議院本会議では「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律案」が可決されたが、参議院において審議未了となって実現しなかった（1）。

傍線部の式次第も、明治に入ってから作られたということになる。儀礼の当時の監修者や参考にした儀礼などについてまでは、今回稿者の調査が行き届かなかった。が、例えば、それまで大嘗祭の時にほぼ限定されていた（2）「久米舞」を奏することにしたのは、神武即位前紀に見られるように、久米舞が、神武天皇の戦勝の歌に端を発するとされたことに由来するのであろう（3）。その他「天皇退出後に庭上の神楽舎で神楽が奏され」る理由など、式次第そのものについても色々と興味深い点の多い年中行事である。

ところで、この「紀元節」には、破線部で鈴木も指摘するように「梅花節」あるいは「梅佳節」という異称がある（以下「梅花節」とのみ記載する）。先の引用のとおり、「紀元節」自体が昭和二三年（一九四八）に廃止されており、「梅花節」という語についても、発表者が確認できている用例はごく少数である（4）。現に今日では、一般的には殆ど知られない語になっているようである。しかしながら、現行の歳時記を紐解くと、かつて存した「紀元節」が載っている場合には「梅花節」も共に記載されていることが多い（5）。これは、近代の俳人の句に「梅花節」を詠んだものが少なからず存在するがゆえ、現代の読者の解釈を助ける目的もあるだろう。が、鈴木が指摘するように、「紀元節」、あるいは「梅花節」という日や言葉に、今も「明治のよき古き日を象徴する祝日としてなつかしむ人々も少なくな」いという事情もあるのではないか。特に「梅花節」については、

「紀元節」の異称という副次的な存在でありながら、なお現代まで伝わっている点を考えるに、詩語として現代に通用する力を失っていないように思われる。

では、この「梅花節」という語は、いつから、どのような経緯でつかわれるようになったのであろうか。先の引用で鈴木は「この日は（略）梅花の咲きそめる時期に当たるので」としていたが、この点は先行する歳時記も似通った記述をしている。例えば昭和八年（一九三三）刊の『俳諧歳時記』（改造社）は「紀元節」を立項し、傍題に「梅花節」を掲げているが、この「季題解説」には「祝日が、丁度雪を凌いで百花の魁をなす梅花の綻びそめる季節に当るといふことも、偶然ではないやうな感じがしていかにも目出たい」とあり、「紀元節」が梅花の開花時期に重なることが「梅花節」の異称の所以だとは明記しないものの、二者の関連性を示唆するものになっている。さらに遡って明治四三（一九一〇）年刊、中谷無涯編『新修歳時記　春之部』（俳書堂）も、「此頃は恰も梅花の漸く綻ぶもの多く、気候未だ寒冷なりと雖ども、郊外に遊ぶもの、公園に散歩するもの多し、梅花節などと称する事あり」としており、やはり丁度梅の開花時期に当たることに触れている。また辞典では、『日本国語大辞典』第二版の「梅花節」項が、「梅の花の咲くころにあたるところから」としている。しかし、仮に梅の開花時期と紀元節が重なることが「梅花節」という異称を生むきっかけになったとして、この語がいつ頃誰に作られた語であるかという点については、これまで調べた限り、いずれの歳時記や辞書辞典でも触れられていない。

この異称は、一体いつ頃、どのような背景で使われるようになったのであろうか。

一般語としては今日殆どつかわれていない「紀元節」および「梅花節」という語が、現行の歳時記にはまだ収録されていること、加えて「梅花節」については、現段階で俳句以外の用例が非常に少ないことから、本章では、和歌・短歌、および発句・俳句といった明治以降の短詩系文学作品を中心に取り上げ、「梅花節」という異称がつかわれるようになった経緯を検討してみたい。

第一節　近代和歌や旧派句の「紀元節」詠

『日本国語大辞典』第二版は、「梅花節」の用例として次の二句を引用している。

① 後山の蘭にあそびて梅佳節　飯田蛇笏　（昭和一五年（一九四〇））
② 久米舞の砂のいさごや梅花節　河東碧梧桐　（明治三九年（一九〇六））

また、『図説俳句大歳時記　春』の「紀元節」項は、①の蛇笏句を「梅佳節（梅花節）」の例句として挙げているほか、「考証」欄に、

③ 句百章ことぐく梅紀元節　上沼豊城　『新俳句類選』（明治三九年（一九〇六）刊）
④ 伊勢の海に掻く細螺や梅佳節　松本金鶏城　『新派句選』（明治四一年（一九〇八））
⑤ 兵杖のやつこが歌や梅花節　大須賀乙字　『乙字句集』（大正一〇年（一九二一）刊）
※明治四一年（一九〇八）の作品として

以上、「紀元節」を詠み込んだ一句と「梅花節」を詠み込んだ二句を挙げている。

松本金鶏城の句がいつの詠なのかが判然としないが、金鶏城（明治一三年（一八八〇）生）は碧梧桐の門人であったこと、碧梧桐に門人ができたのは碧梧桐の師である正岡子規が没した明治三五年（一九〇二）よりも後だったはずであることからして、碧梧桐の「久米舞」の句に大きく先行して詠まれたとは考えがたい。明治四一年（一九〇八）に「梅花節」句を詠んだとされる大須賀乙字もまた、碧梧桐の門人であった。よって②の碧梧桐句、

および金鶏城句と乙字句は、三句とも新派の中でも日本派（碧門）の句と見てよかろう。

上沼豊城については素性が明らかでないが、彼の「紀元節」句を収録した『新俳句類選』（明治三九年（一九〇六））は大島宝水（明治一三年（一八八〇）―昭和四六年（一九七一））編による句集で、編者の宝水は岡野知十（6）（万延元年（一八六〇）年―昭和七年（一九三二））の句集『鶯日』（昭和八年（一九三三））も編集した人物であるというから、豊城の句も、日本派でも秋声会でもない新々派の句として相応しいという評価を受けての『新俳句類選』入集であったと考えられる。そして豊城の句は、「梅花節」という語こそ用いていないものの、百章が梅の句ばかりだという句の内容からして、明治三九年（一九〇六）以前に、梅と「紀元節」を結ぶ趣向がすでに存在していたことを窺わせる。

では、少なくとも「梅花節」の用例が明治三九年（一九〇六）までは遡りうるもので、その時期には「紀元節」と梅を結ぶ趣向もすでに存したものとして、それ以前には本当に「梅花節」の句例は存しなかったのだろうか。あるいは「梅花節」の語を詠み込んだ例は見られないにしても、「紀元節」と梅を結んだ詠作は見られないのであろうか。

まずは大きく遡って、明治期の旧派の「紀元節」詠から検討していこう。

越後敬子は、明治期に旧派が刊行した類題句集一〇六点を調査し、このうち明治の新題である「紀元節」を立項するものは一三点存するとした（7）。まずはこの一三点に収録されている句を左にすべて挙げてみよう。

⑥　神風や国旗なひかす（る）紀元節　　春海……A・D・J
⑦　一すちの御稜威仰くや紀元節　　巌……A・D・J（8）
⑧　新らしう匂ふ朝日や紀元節　　木夫……B
⑨　万世もつきぬ日さしや紀元節　　長和……B

⑩ 新まるとしもゆたかや紀元節　水竹……B
⑪ 里の子の物しり顔や紀元節　鮒孫……B
⑫ ありかたき御国の今日は紀元節　謝豫……C
⑬ めくむ日に草木も伸ぬ紀元節　楚山……C
⑭ 秋津州にあふるゝつゆや紀元節　旭瀧……D
⑮ 見ぬ昔聞もかしこし紀元節　舩賀……E・G
⑯ 開け行御代は明るし紀元節　静■……F
⑰ 鳥もより囀るけふや紀元節　蓮州……G
⑱ 葦原を吹風清し紀元節　松堂……G
⑲ ■■■■ぬ日とおもひけり紀元節　三幸……G
⑳ 日の本は国の兄なり紀元節　南枝……H
㉑ ふ足なき世のはこびなり紀元節　花角……H
㉒ 芦原の旭芳はし紀元節　一知……H
㉓ 其むかし思ひ出されて紀元節　悟友……I
㉔ 皇の御代豊なり紀元節　孤松……I
㉕ 見ぬ昔只俤に橿原　をとめ……I
㉖ 古代道御代に開けて紀元節　史雪……I
㉗ 旧事の弥仰かれて紀元節　金羅……I
㉘ 草も木も伸初る日や紀元節　歳年……K
㉙ 限りなき国の栄や紀元節　呉雪……K

㉚ 橿原の礎かたし紀元節　青圃……K
㉛ うれしきや紀元節会の朝ほらけ　浦尾女……K
㉜ かきりなき御代のはしめを知る日哉　峩琴……K
㉝ 天津日ののとけきけふの節会哉　玉桂……K
㉞ 君か代や紀元を仰く旭の光り　洲巌……K
㉟ あらたまるけふの日和や紀元節　向葉……K
㊱ しらぬたに慕ふ昔を紀元節　芳律……K
㊲ 旭の旗の照り輝くや紀元節　松月……L・M

〈底本〉⑥～㊲いずれも各書の「紀元節」項より引用

A：小築庵春湖他撰、東旭斎編『古今俳諧明治五百題』明治一二年九月、東京　江島喜兵衛刊
B：小築庵春湖他撰、東旭斎編『俳諧明治新五百題』明治一四年六月、東京　江島喜兵衛刊
C：松田聴松編『俳諧明治千五百題　乾』明治一四年一〇月、千葉　正文堂他刊
D：梅月庵清湖編『明治五百題』明治一五年一月、東京　木村文三郎
E：其角堂永機他編『発句五百題』明治一五年一一月、東京　高田重助刊
F：八巣謝徳編『俳諧明治六百題』明治一七年四月、東京　江島喜兵衛刊
G：其角堂永機他編『俳諧絵入八百題』明治一七年四月、東京　松崎半蔵刊
H：東旭斎編『俳諧明治新々五百題』明治一七年七月、千葉　朝野利兵衛他刊
I：月の本為山編『俳諧明治万題集』明治一八年二月、東京　小堀房刊
J：酔月庵永児編『発句五百題』明治二二年六月、東京　磯部太郎兵衛刊

K：半日庵芳律他編『新選年浪発句集』明治二三年一二月、東京　加藤栄他刊
L：野松庵古蕉編『類題発句明治選』明治三一年一〇月、奈良　豊住幾之助刊
M：野松庵古蕉撰、旭雲堂波石他編『類題発句明治撰』明治四〇年一一月、奈良　豊住書　店他刊

先に引用した『図説俳句大歳時記　春』（昭和三九年（一九六四））では「紀元節」の項には異称の「梅花節」を用いた句例も挙げられていたが、右の⑥～㊲の句の場合、一見して「梅花節」という語が用いられていないことがわかる。また、内容の面でも梅と「紀元節」を結んだ趣向の句は一切見られない。

その他、右の句群の特徴として、語彙の面ではまず㉕、㉜、㉝、㉞の四句を除く二八句が「紀元節」の語を詠み込んでいる点も指摘できよう。他に、「旭」や「日和」など日光を思わせる語を含む句（⑧、⑨、⑳、㉒、㉛、㉝、㉞、㉟、㊱）が多い点や、「昔」や「古代」（⑮、㉓、㉕、㉖、㉗、㉜、㊱）、あるいは「橿原」、「芦原」（⑭、⑱、㉒、㉚）といった神武即位前紀を彷彿とさせる語を含む句が多い点、「御稜威」や「万世」、「御代」といった、天皇やその治世を寿ぐ語を含む句（⑦、⑨、⑯、㉔、㉙、㉞）が比較的多く見られる点も、語彙の面では特徴的と言えるだろう。これらの語彙の特徴は、「紀元節」にのみ見られる特徴ではなく、広く旧派の類題句集に収録された明治の「新行事」（9）詠に見られる特徴である。例えば、西谷富水編『俳諧開化集』（明治一四（一八八一）年）（10）という旧派の類題句集の中には、「天長節」の項に、

㊳　かゞやくや天長節の朝日かげ　　月窓

という句が掲げられているほか、「神武天皇祭」の項には、

㊴　橿原の宮ゐも古き祭りかな　　鮮露

という句も見られる。ここから考えるに、「紀元節」の語を詠み込んだ句が多く見られる理由として、有季という発句の条件を満たす目的が第一義にあろうし、ここに挙げた⑥～㊲の三二句はいずれも類題句集に収められたものであるので、「紀元節」という題の句作の手本としやすい句が集められているということもあるだろうが、そればかりではなく、句作上の問題として、「紀元節」という語を詠み込まなければ、他の「新行事」句との差別化が図りがたかったという理由もあったのではないだろうか。つまり、先に挙げた「紀元節」の語を詠み込んだ句が大半であるという特徴と、その他の語彙面の特徴は、無関係ではないものと考える。

ここまで、旧派の「紀元節」句を確認してきたが、では、和歌の場合はどうであっただろうか。佐々木弘綱編『明治開化和歌集』（11）には次の歌が見える。

紀元節　　弘綱

㋐　三千年にちかづく御代のそのかみをもゝの官も仰ぐけふかな

この歌の場合も、「梅花節」の語は詠み込まれておらず、「紀元節」と「梅」を結ぶ趣向も看取されない。また、「三千年にちかづく御代」を寿ぐ内容である点も、旧派の「紀元節」詠に見られた特徴である。

このように、旧派の句も和歌も、「紀元節」の作例は、いずれも梅との関係が見られず、またつかわれている語彙も発想も似通っている点が指摘できよう。とすると、先に確認した新派俳人あるいは新々派俳人の周辺で、「紀元節」と梅が結び合わされ、「梅花節」という語の誕生に繋がった可能性については、検討されてしかるべきと思われる。本稿の次節では、新派の中でも「梅花節」詠の確認される碧梧桐ら日本派を中心に俳句や短歌の

作例を見ていくこととする。明治三九年（一九〇六）に「紀元節」と梅を結んだ句の見られる新々派俳人の動向については、別稿を期したい。

第二節　短歌や新派句の「紀元節」詠

前節で確認したように、「梅花節」の句例は碧梧桐の明治三九年（一九〇六）の詠までは遡りうる。ではそれ以前の碧梧桐の作に「梅花節」は登場しないのであろうか。『碧梧桐全集』で調査していくと、碧梧桐には明治二三年（一八九〇）にも、「紀元節」詠が確認できる。

紀元節を祝し奉りて

㊵　千代八千代渝らぬ者は紀元節

㊶　万人の祝する日とは今日をこそ

㊷　今の民今日ある為めの今の民

この三句では、「紀元節」は梅と結びつけられていない。「紀元節」の語を詠み込んでいるのは一句目（㊵）のみで、その詞章には「千代八千代」という、古来賀の歌に典型的に用いられる語がつかわれている。また句の内容の面でも、例えば前節で㉙として取り上げた旧派の句、「限りなき国の栄や紀元節」と殆ど変わりない。よってここからは、「紀元節」と梅が結びつけられ、この知識がある程度の一般性を獲得したのは「梅花節」詠の確認される明治三九年（一九〇六）から大きく遡るものではなく、明治二三年（一九九〇）より下るのではないかという推測も成り立つだろう。

明治二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、碧梧桐は正岡子規率いる日本派の、言わずと知れた中心作家で

あった。とすると、「紀元節」と梅を関連づける詠み方に、ある程度、師である子規の影響があったとしても不思議はあるまい。

では子規は、「紀元節」をどのように句に詠んでいたのであろうか。

子規には「紀元節」詠が少なくとも四句確認できる。

㊸　梅正に綻びそむる紀元節　（明治二五年（一八九二）、『寒山落木』巻一）

㊹　人の世になりても久し紀元節　（明治二六年（一八九三）、『寒山落木』巻二）

紀元節

㊺　二千五百五十六年梅の花

（明治二九年（一八九六）、引用新聞『日本』明治二九（一八九六）年二月一三日、子規著の記事「祝賀体」（「長寿祝」「紀元節」などの題による自作の祝賀の句を挙げたもの）による。他出『寒山落木』巻五）

紀元節

㊻　梅に遊ふ奏任官や紀元節

（明治三三年（一九〇〇）、新聞『日本』明治三五（一九〇二）年二月一五日、他出『俳句稿』明治三十三年）

以上四句のうち、㊸、㊺、㊻には「梅」が詠み込まれている。㊸の句は、「正に」に注意して解すると、「紀元節」を迎えた今日丁度、梅の花が綻び始めたという意味にとれる。㊺の句は、詠まれた明治二九年（一八九六）が、神武天皇即位から二五五六年目に当たり、それを祝うかのように梅の花が咲いているという句意と思われる。㊸は、明治官制において天皇が大臣らの奏薦によって任じた高等官である「奏任官」が「紀元節」の日に梅見を楽しんでいるという句意であろう。以上の三句には、「紀元節」と梅との関連性がはっきりと看取される。しか

しながら、子規には「梅花節」の作例は確認されない。

ここで、粗々とではあるが時系列を整理すると、少なくとも日本派に於いて、

ⅰ　明治二三年（一八九〇）の碧梧桐の「紀元節」詠――「紀元節」と梅との関係見られず

ⅱ　明治二五年（一八九二）の子規の「紀元節」詠――「紀元節」と梅を関連づけた詠み方。「梅花節」の句例見られず

ⅲ　明治三九年（一九〇六）の碧梧桐の「梅花節」詠――「梅花節」という（季）語、成立済

という流れになるでろう。では、子規はなぜ、「紀元節」と梅を結ぶという、旧派詠には見られない趣向で「紀元節」句を詠んだのであろうか。神武即位前紀の兄猾（えうかし）討伐のくだりや「久米舞」の詞章にも、梅は登場しない。

ここで、子規の俳句以外のジャンルの作品に目を向けてみたい。子規は歌人「竹の里人」としても、自身が記者を務める「日本新聞」紙上を中心に活躍していた。明治三〇年代には、明治二〇年代後半の俳句革新に続いて短歌革新にも乗り出したことでも知られる。

左は、明治三三（一九〇〇）年二月一一日の新聞『日本』に掲載された子規の短歌二〇首のうちの五首である。

●梅二十首　　竹の里人

紀元節梅

㋑　とほつみおやすめらの神か御位に即かす日かしこみ梅いけにけり

㋒　日の本のやまとの国のはじまりし其日を今日と梅咲きにけり（13）

㋓　日の本の国の祭と賤が家の梅咲く門に旗たてよろこぶ

㋔　文つゞる机の上に梅いけてこの日をいはふ日本新聞社

㋕　新聞は梅の詩に画に文に歌にいづれのページも梅なきはあらず

まず注目したいのは㋕の歌である。梅が咲いていることを詠んだ㋒と㋓、咲いている梅を生けたとする㋑と㋔に対し、㋕の梅は生の梅花ではなく、新聞紙面を飾る梅の詩、絵画、文などを詠んでいる。ここからは、明治三三年（一九〇〇）当時、「紀元節」と梅を関連づけることが、知識としてある程度の一般性を獲得しており、明治の新たな文化として、「紀元節」に梅という知識が世間的にかなり定着していたことが窺える。

この点は子規の短歌以外の作品からも看取できる。左は子規作の「天長節の曲」という作品で、明治二九年（一八九六）一一月四日の「日本新聞」紙上に発表されたものである。

天長節の曲

万馬嘶（いなな）いて谺（こだま）に響く赤坂の台、天子親（みずか）ら兵を観たまふ青山の原。
後園菊咲いて天長節至る。小僧浅草に往きお三芝居を観る。
小学校児童うや〳〵しく聖影を拝す。菊花瓶上竜顔儼然（げんぜん）たり。
幼稚園、まはらぬ舌に唱歌長し。
君が代は菊の花こそ大きけれ。
けふは十一月三日の朝の菊黄なり。
けふは十一月三日の昼の菊赤し。
けふは十一月三日の夜の菊白し。
富貴なるは花壇の大菊驕（おご）らず。貧乏なるは背戸の小菊気高し。
桑田海となるべし。天長節曾て雨無し。
商人は儲け得たりそこばくの利、天気最も人に関す。百姓は晴を利して耕し尽す一畝の畑、帝力何んぞ吾

にあらん。

絵画会中秋に春あり、百花盛に開く。■画館裏治に乱を楽む、戦ひ正に酣なり。

蝶と蜻蜓と会す菊花の園。蝶曰く天長節なるかな。蜻蜓曰く快晴々々。

隣家児を挙ぐ、この佳節に逢ふ。女ならば君代と名づけんか、男ならば菊松と名づけんか。

白菊を伐らんか、黄菊を残さんか。

秋晴れたり。上野に遊ぶべく、浅草に詣るべく。

貴顕紳士燭を秉つて夜遊ぶ。寄席に行かんか、銭無し。如かず行燈を消して早く寝んには。

紀元節に梅開く、花の兄。天長節に菊盛りなり、草の弟。

傍線部には「菊」の「天長節」に番えられる形で、「梅」の「紀元節」が登場する。春は木の花の盛りで秋は草の花の盛であるという古典的な知識と、「天長節」には天皇の象徴である菊がつきものであるという知識に加え、実際に明治期の「天長節」であった新暦一一月三日は菊の花の時期だったこともあるのであろうか。今上の誕生日である「天長節」を「菊」の盛りである「草の弟」と位置づけ、これに対比させる形で、人皇第一代である神武天皇の即位を祝う「紀元節」は梅の盛りである「花の兄」とした。「紀元節」に梅を結ぶ発想の源が、同じく明治三大節の一つであった「天長節」と菊との結びつきとの対比にあったと断言することは出来ないが、少なくともこの対比が、「紀元節」に梅という知識が一般性を獲得していくのに資したことには相違あるまい。

さらに加えて、子規は「賀の歌」を詠むときの注意を次のように述べている。

祝賀の歌は作りにくしと誰人もいふなり。趣向も余りことやうなるは耳だちてわろく、さりとて陳腐ならんは固より宜しからず。言葉もおとなしく疵なきをぞ尊ぶなる。斯の如くして善き歌つくらんことはいと難

かるべきにや。

古よりの祝賀の歌を見るに凡二種の作り様あり。一は正面より祝賀の意を述ぶるもの、他は物にたぐへて祝ふ者なり。正面よりいふものは

わが齢君が八千代にとりそへて
とゞめおきては思ひでにせよ（古今集、失名）

〈略〉

の如き者にて、あからさまに祝ふなり。此種に属する歌にて稍異なる者あり。そは

みつぎ物運ぶよぼろを数ふれば
二万の里人数そひにけり（金葉集、家経）

の如く、表面には祝ふとも千代ともいはず、只其時の有様のみを述べ、裏面に祝賀の意を含む者にして、其例極めて少し。併し総じて正面よりいふ歌は少くして物にたぐへて詠めるぞ殊に多き。

我君は千代に八千代にさゞれ石の
巌となりて苔のむすまで（古今集、失名）

〈略〉

など此例数へ尽すべからず。〈略〉

思ふに、正面より詠む歌は、おめでたし、相変らず、幾久しく、などいふ挨拶の如き者なれば無数に変化することは甚だ難きわざなるべく古人が二三十首の歌にて最早尽きはてたるかと疑はるゝばかりなり。さればにや多くの歌よみは皆物を仮りてこれにたぐへて賀するを旨とする殊なれど、さてこれも、松竹梅鶴亀山水日月と相場がきまりては何の珍らしきこともなく、寄松祝、寄竹祝、寄山祝といふ題ばかり見て、またかと読までやむる程の陳腐にはなりはてたり。こゝに稍たのみありげに見ゆるは正面より詠む歌の変体として

挙げたる、かの詠み方なり。此詠み方に従はゞ其場合場合の景況を詠む者なるが故に時と処とによりて幾多の変化を為し得らるべし。縦し、君を祝ふ、千代ませ、千代を祈る、などいふ尋常套語を使ふとも、そは単に一句二句にとゞめ、残る四句三句にて其場其場の景況を写す者とすれば猶幾何か陳腐ならざるを得んか。

（新聞『日本』明治三一（一八九八）年一一月三日）

ここで子規は、賀の歌として、「おめでたし、相変らず、幾久しく」などのあからさまな挨拶の内容でもなく、「祝ふとも千代ともいはず」、「松竹梅鶴亀山水日月」など古くから賀の歌につきものの素材を用いるのでもない、一見では賀の歌とは分らないが、「裏」にきちんと「祝賀の意」が込められている歌がよいとしている。

振り返って、㋑～㋕の子規の「紀元節梅」と題する作品群は、「とほつみおやすめらの神か御位に即かす日かしこみ」（㋑）、「この日をいはふ」（㋔）のように、あからさまな祝意の表明が見られた。また、用いている素材も、「梅」という古来賀の歌につきものの素材の一つとして、子規自身が挙げているものである。

しかし、その内容に目を向けると、例えば㋑は梅を生けたこと、㋒は梅が咲いたこと、そして㋕は新聞紙面が梅で埋め尽くされていることといったように、表面的には現実に即した内容を述べたものであり、さらに「紀元節」の象徴が梅であるという知識と合わせて読めば、そこに「紀元節」に寄せた歌ならではの祝意が読み取れるという性質のものである。この五首が子規の持論を完全に実践できているとまでは思われないが、持論を実践できている部分もあると見てよいのではないか。

なお、新聞紙面が梅に埋め尽くされている例は未見であるが、明治三三年（一九〇〇）詠の㋕に先駆け、明治二九年（一八九六）の「紀元節」の新聞紙面に梅の句が特集されている記事は確認できた。

今更に梅の花の香ばしきをいふべくもあらず、まだ肌寒き頃を忍びて草鞋はきなどし村里に立ち出でたるいと快きにそこらつくろはぬ梅を見つけたる尚更なり

梅が香にのつと日の出る山路かな　　芭蕉〈略〉

祇園夜詣

紅梅や夜すがらともす的の中　　淡々

かくもあらんか、其他尚遺殊を拾へばめづらかなるもあるべけれど紀元節のことほぎといふにとりいそぎたるまゝ大方に見過しぬ見ん人其心してよ

（「日本新聞」明治二九（一八九六）年二月一一日）

記事の著者「客作児」は不詳であるが、「梅の発句」を概観する内容の記事が「紀元節のことほぎ」のために急ぎ用意したものであるとしている。先掲の子規の㊸の句も㋑～㋕の短歌も、初出は新聞であった。したがって、新聞紙面を梅に関する記事で飾り「紀元節」の祝意を表することは、明治三〇年前後、実際に行なわれていたことが窺える。

おわりに

以上を整理すると、

i　「梅花節」という語の早い用例が碧梧桐やその門下の俳人に明治三〇年代末期に認められること

ii　「梅花節」という語の誕生の前段階として、梅を「紀元節」の象徴とする知識が存在したらしいこと

iii　明治二〇年代に、子規がこの新知識を短歌や俳句の形でしばしば「日本新聞」紙上に発表しており、碧梧桐の「梅花節」句には俳句の師である子規の影響が考えられること

この三点は指摘されてよかろう。

少なくとも明治三〇年前後、子規が「紀元節」に梅という趣向に、それまで和歌や旧派の句には認められなかった新たな詩情をある程度認めていたことは諒解されよう。俳句の季語としての「紀元節」に話を絞れば、この新知識にある程度の一般性があることを保証する存在の一つとして、やはり明治の新事物である「新聞」が挙げられたという点も、明治新時代の新季語、その中でも類句類想を抜けがたく「陳腐」に陥りがちであった（13）「新行事」の季語の本意を、子規がどこに見出そうとしていたかという問題において大いに注目できると思われる。

「梅花節」は今日では殆ど聞かれない語になってしまったが、戦前「梅花節」という語はどの程度社会的に認知されていたのか、本当に俳句の世界に限定的な語であったのかについても、さらなる検証が必要だと思われる。加えて、「紀元節」に梅という知識の始原、「梅花節」という語の始原など、今後特に新聞との関わりに注意しながらさらに追究していきたい。

第六章　高浜虚子編『新歳時記』の三版種

第六章　高浜虚子編『新歳時記』の三版種

はじめに

俳句革新を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかったとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は『袖珍俳句季寄せ』を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった（1）。彼の俳句観、「季題」（2）観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実からも十分察せられる。そして虚子の生涯最後の単独責任編集歳時記であり、虚子の歳時記・季寄せ編集の集大成とされるのが、虚子編『新歳時記』である。今日も増刷され続ける『新歳時記』はまさに、虚子の生んだロングセラーである。

さて、この虚子編『新歳時記』に少なくとも三版種が存することは、広く知られている。それは、改版、再改版の際に『新歳時記』に加えられた「改版に際して」「再改版に際して」にて、版ごとに内容に変更点がある旨を虚子が明言しているからである。さらに、三版種間にどのような異同や差異がみられるかについても、すでに多くの先学が指摘するところである。

しかしながら、後述するように、先学の指摘の見られない「修訂」が、昭和二二年（一九四七）頃の版の虚子編『新歳時記』に見られる。さらに、この修訂の内容についての検討、考察は、先行研究において、再改訂時の他の収録「季題」の変化と、区別されることなく行われている。この点については、再度検討の余地があるように思われる。

本章ではまず虚子編『新歳時記』三版種間で、立項しているすべての「季題」（以下「立項「季題」」（3））の異同を調査することによって（4）、『新歳時記』の改訂、再改訂のあり方を再確認する。加えて、異同の見られた立項「季題」の「パカチ」を取り上げ、二度の改訂と一度の修訂の実施の背景についても再検討したい。

第一節　高浜虚子編『新歳時記』の三版種

虚子編『新歳時記』の内容上の特徴については、虚子がその序に「季題の取捨」「四季の区別」「季の決定」「季題の排列」「解説」「例句」の六項に分けて自身の試みを詳述している。井出原太郎によれば、中でもこの歳時記の重要な特徴は、虚子による「季題の精選とその並べ替え」にあるという（5）。

では実際に、『新歳時記』には、どのような「季題」がどのような排列で収められているのだろうか。

虚子編『新歳時記』に収録される「季題」とその排列について考えるとき、避けては通れない問題が、『新歳時記』の二度の改版である。虚子は昭和九年（一九三四）に初版『新歳時記』を三省堂から刊行し、その後昭和一五年（一九四〇）に改訂版を、さらに終戦後の昭和二六年（一九五一）に再改訂版を同じく三省堂から刊行した。改版、再改版の際に『新歳時記』に加えられた「改版に際して」「再改版に際して」では、版ごとに内容に変更点がある旨を虚子が明言している（6）。

この変更点、すなわち異同については、先学によって、三版種、つまり、初版（昭和九年（一九三四）一一月）、改訂版（昭和一五年（一九四〇）四月）、増訂版（昭和二六年（一九五一）一〇月）の間で、収録「季題」に異同が認められることが指摘されている（7）。

さらに、『新歳時記』についてはもう一度、これまで指摘されてこなかったが、内容が一部改められていたことが認められる。

昭和二二年（一九四七）以降の奥付を持つ改訂版『新歳時記』に共通して、「入営」「徴兵検査」「大演習」「除隊」の四つの、軍事に関する「季題」が機械的に削除されている。つまり『新歳時記』改訂版には、戦後修訂版とも呼ぶべきものが存することが確認されるのである（8）。

もっとも、このような軍事「季題」の削除は、同時期刊行の他の歳時記にも見られる。例えば、戦前戦後に跨

って刊行され、虚子も編集に携わった改造社『俳諧歳時記』（9）において、昭和八年（一九三三）の奥付を持つ戦前版（10）と昭和二二年（一九四七）ないし二三年（一九四八）の奥付をもつ戦後版（11）を比べると、「陸軍大演習」「除隊」「〔初年兵〕入営」「陸軍始」「海軍始」「建国祭」「陸軍記念日」「徴兵検査」「海軍記念日」の各項が、戦後版からは削除されていることに気づく。

ただし、刊行時期がほぼ一致する『新歳時記』、改造社『俳諧歳時記』の戦後版で、軍事「季題」が削除されていることは、編者が「季題」を吟味した結果というより、むしろ、検閲などの都合上、全面改版を待たず対応せざるを得なかったものと考えられる。

修訂から改訂に話を戻そう。先行研究が指摘するように、虚子編『新歳時記』の改訂は、主に太平洋戦争前後の時勢の変化に即したものといえる（12）。

ではこのような時勢に即した歳時記の内容の書き換えは、修訂と同様、この時期に刊行されたあらゆる歳時記に見られただろうか。結論からいうと、そうではない。先に挙げた、改造社『俳諧歳時記』の場合、昭和二九年（一九五四）から昭和三〇年（一九五五）にかけ、装丁を一部変更した版が刊行されている（13）。しかし、この時に収録された立項「季題」は昭和二三年（一九四八）刊本のそれと同一である。

一例を挙げると、「苦力来る」「霾」といった外地の「季題」は、時勢に即しようとするならば削除対象にされてしかるべきであろう。にもかかわらず、虚子も編集に関わった改造社版『俳諧歳時記』「春の部」においては、昭和三〇年（一九五五）刊本でも引き続き採用、収録され続けているのである。

改造社『俳諧歳時記』の場合、新旧問わず「季題」を網羅的に収集するという編集方針が存した（14）。そのため、先述のような明らかな軍事「季題」は削除した。しかし、その他の「季題」については、時勢に即すると思われるものであっても、削除は極力行わなかったものと推測される。

このようなことから再確認すべきは、『新歳時記』における修訂、つまり軍事「季題」の削除と、より広範囲

な改訂の問題を、同列に扱ってはならないということであろう。

修訂は、「季題」の選択に関する本質的な歳時記編者の意向とは殆ど関係なく実施されたものである。他方、改訂は、時勢に即しつつも新時代の「季題」としてどのようなものがふさわしいかを熟慮し取捨しようとする、編者の意識の表れなのである。

以降、本発表では、各版を初版、改訂版、改訂版戦後修訂版、増訂版として区別する。

第二節　高浜虚子編『新歳時記』三版種間の「季題」の異同とその傾向

では実際に、虚子編『新歳時記』の「季題」の精選と排列について、三版種間の異同を見ていこう。今回は立項「季題」に注目し、そのの有無や排列の差異を調査した。その結果を月別にまとめたものが表1である。

表1:『新歳時記』三版種間の立項「季題」異同一覧表

一月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
			人日
	入営		
鏡玉(餅花の項中)	鏡玉(餅花の項中)	鏡玉(餅花の項中)	
入営			
	馴鹿	馴鹿	
	北極光	北極光	

二月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
旧正月	睦月	睦月	睦月
睦月	旧正月	旧正月	旧正月
春聯	春聯	春聯	
	爆竹	爆竹	
紀元節	紀元節	紀元節	

三月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
初筏	初筏	初筏	
	水砧	水砧	

四月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
苦力来る	苦力来る	苦力来る	
寒食	寒食	寒食	
霾	霾	霾	
天長節	天長節	天長節	天皇誕生の日
鴨川踊			
	春窮	春窮	

五月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
	鴨川踊	鴨川踊	鴨川踊
徴兵検査	徴兵検査		
鵜飼			
	四迷忌	四迷忌	
夏戦(安居の項中)			

六月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
夏の朝			
	鵜飼	鵜飼	鵜飼
蝎	蝎	蝎	

七月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
	撒水車	撒水車	撒水車
立飯古(足し絵の項中)	立飯古(足し絵の項中)	立飯古(足し絵の項中)	
バナナ			
鳳梨			
	氷餅	氷餅	氷餅
	西日	西日	西日
	ボート	ボート	ボート
	ヨット	ヨット	ヨット
仏桑花			
	熱帯	熱帯	
	赤道	赤道	
	馬来正月	馬来正月	
	朝陰	朝陰	
	木蔭	木蔭	
	オアシス	オアシス	
	貿易風	貿易風	
	スコール	スコール	
	赤道祭	赤道祭	
	嫁選	嫁選	
	象	象	
	水牛	水牛	
	鰐	鰐	
	鱶	鱶	
	極楽鳥	極楽鳥	
	熱帯魚	熱帯魚	
	火焔樹	火焔樹	
	無憂華	無憂華	
	鳳凰樹	鳳凰樹	
	宝冠木	宝冠木	
	仏桑花	仏桑花	
	ドリアン	ドリアン	
	マンゴスチン	マンゴスチン	
	マンゴー	マンゴー	
	パパヤ	パパヤ	
	竜眼	竜眼	
	バナナ	バナナ	
	パイナップル	パイナップル	
	椰子	椰子	
	檳榔樹	檳榔樹	
	護謨樹	護謨樹	
	榕樹	榕樹	
	クロトン	クロトン	
	月下美人	月下美人	
	ブーゲンベリア	ブーゲンベリア	

八月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
異同みられず			

九月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
パカチ	パカチ	パカチ	

十月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
郁子	通草	通草	通草
通草	郁子	郁子	郁子
明治節	明治節	明治節	

十一月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
			文化の日
大演習	大演習		
除隊	除隊		

十二月

初版	改訂版	2改訂版甲刊後修訂版	増訂版
温突	温突	温突	
年貢納	年貢納	年貢納	

表1によると、「季題」の排列順が前後で入れ替わるなどの細かいレベルまで点検しても、異同は殆ど見られない。このことから、『新歳時記』初版の「季題」排列に対する、虚子の自信が窺えよう。次に立項「季題」の有無について確認すると、これも『新歳時記』全体の立項「季題」数からすれば、異同はやはり少ないと言えよう。が、いわゆる「熱帯季題」（15）群がまず比較的大きな異同として指摘でき、それ以外にもわずかずつだが版によって立項「季題」の有無が認められる。

続いて、異同の見られる立項「季題」を分類し、異同発生の背景について検討する。表2の分類は、立項「季題」をその出現パターンによって分類したものである。

表2: 三版種間で異同の見られた立項「季題」の、出現パターンによる分類

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
a型	○	○	○	○
旧正月	○	○※1	○	○※1
睦月	○	○※1	○	○※1
鴨川踊	○	○※3	○	○※3
鵜飼	○	○※3	○	○※3
郁子	○	○※1	○	○※1
通草	○	○※1	○	○※1

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
b型	○	○	○	×
鼎茶(餅花の傍中)	○※2	○※2	○	×
春聯	○	○	○	×
紀元節	○	○	○	×
初茜	○	○	○	×
苦力来る	○	○	○	×
寒食	○	○	○	×
霾	○	○	○	×
天長節	○	○	○	×
蝎	○	○	○	×
立春(新し、桜の傍中)	○※2	○※2	○	×
バナナ	○	○※3	○	×
鳳梨	○	○※3	○	×
仏桑花	○	○※3	○	×
パカチ	○	○	○	×
明治節	○	○	○	×
温突	○	○	○	×
年貢納	○	○	○	×

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
c型	○	×	×	×
夏の朝	○	×※5		×

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
d型	○	×	×	○
該当なし				

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
e型	×	○	○	○
撒水車	×	○		○
氷餅	×	○		○
西日	×	○		○
ボート	×	○		○
ヨット	×	○		○

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
f型	×	○	○	×
馴鹿	×	○	○	×
北極光	×	○	○	×
爆竹	×	○	○	×
水砧	×	○	○	×
春窮	×	○	○	×
四迷忌	×	○	○	×
熱帯	×	○	○	×
赤道	×	○	○	×
馬来正月	×	○	○	×
朝陰	×	○	○	×
木蔭	×	○	○	×
オアシス	×	○	○	×
貿易風	×	○	○	×
スコール	×	○※4	○	×
赤道祭	×	○	○	×
嫁選	×	○	○	×
象	×	○	○	×
水牛	×	○	○	×
鰐	×	○	○	×
鱇	×	○	○	×
極楽鳥	×	○	○	×
熱帯魚	×	○	○	×
火焔樹	×	○	○	×
無憂華	×	○	○	×
鳳凰樹	×	○	○	×
宝冠木	×	○	○	×
ドリアン	×	○	○	×
マンゴスチン	×	○	○	×
マンゴー	×	○	○	×
パパヤ	×	○	○	×
竜眼	×	○	○	×
椰子	×	○	○	×
檳榔樹	×	○	○	×
護謨樹	×	○	○	×
榕樹	×	○	○	×
クロトン	×	○	○	×
月下美人	×	○	○	×
ブーゲンベリア	×	○	○	×

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
g型	×	×	×	○
人日	×	×	×	○
天皇誕生の日	×	×	×	○
文化の日	×	×	×	○

型名	初版	改訂版	改訂版製版修訂版	増訂版
h型	○	○	×	×
入営	○	○※3	×	×
徴兵検査	○	○	×	×
大演習	○	○	×	×
除隊	○	○	×	×

注Ⅰ:※1は版によって立項「季題」の排列が前後逆転していることを示す。
注Ⅱ:※2は初版、改訂版では目次のみ(半)立項季題扱い、事実上は傍題扱いであったが、再改訂の際目次上から消え、名実ともに傍題になった「季題」を示す。
注Ⅲ:※3は改訂時に立項「季題」の排列が二つ以上の項を飛び越えて移動、変更しているものを示す。
注Ⅳ:※4は改訂時に傍題から立項「季題」へと扱いが変わったことを示す。
注Ⅳ:※5は改訂時に立項「季題」から傍題へと扱いが変わったことを示す。

表からは、b型、f型の出現パターンを示す立項「季題」が多いことが看取できる。つまり、『新歳時記』の異同の大まかな傾向として、初版に立項「季題」を大幅に増補する形で改訂版が刊行され、この改訂版からの大幅な立項「季題」の削除を経て、増訂版が刊行されたことが指摘できる。

f型の出現パターンを示す「季題」は、数は多いが、その大部分はすでに「熱帯季題」として、先行研究で度々論じられているので、ここでは取り上げない。本発表ではこの改訂、再改訂の大きな流れに乗る立項「季題」群の中から、出現パターンのb型に属する「パカチ」と「バナナ」を取り上げ、この異同傾向が生じた背景について検討していくこととする。

第三節　外地を想定した「季題」

（一）「パカチ」

「パカチ」は今日の我々には馴染みの薄い「季題」と言って良いだろう。現に小学館『日本国語大辞典』第二版を始めとする、現行の大型国語辞典にも、また集英社や講談社の刊行する大型歳時記（16）にも、「パカチ」という季語は確認されない。そこで初めに、『新歳時記』の「パカチ」項を確認しておくこととする。

パカチ 三 丸い瓢の属で、朝鮮などに多く屋根等に逼はせてある。乾して水汲に、大きいのは炭斗などにも用ゐる。

垣パカチどちらの家のものなるや　すゞえ

（初版『新歳時記』「パカチ」項。改訂版も同文）

『新歳時記』の「季題」解説文は、「パカチ」が朝鮮半島に多く見られる、なり瓢であるとする。

この「パカチ」について、西村睦子も、「朝鮮版の瓢で乾燥させて柄杓や炭斗などに大変重宝して用いられた由。虚子編で立項「季題」に立て一時は詠まれたが、昭和二六年の増訂版で落とされてしまった」（17）としている。

朝鮮語には、「パカチ」とよく似た発音の語、박가지が今日も存し、用いられている。

しかしながら、各辞典の박가지の解説文によると、박가지はなり瓢から作った器を指し、なり瓢そのものの意をも持つとした辞書は確認できない（18）。つまり、「パカチ」と、今日の朝鮮語の박가지では、語義に隔たりが認められることとなる。

昭和一四年（一九三九）一〇月号の『ホトトギス』の対談記事に、「パカチ」に関する記述が見える。

パカチ

迦南。そんなら話をかへて、独得の植物のパカチはどうです。

自流。パカチといふのは、元来朝鮮語ではあの実の殻を水汲やなんかに使ふ器にしたのを云つて、植物の時の名はパカチとは言はぬ。ペクとか何とか言ふんだ相だ。通訳に聞いたんだが。

蘭の秋。併し我々俳人仲間では今日パカチと云へば植物も云ふし、器になつたものも云ふやうだね。花が咲けば花パカチ。青い実のを青パカチ。屋根になつて居るのを屋根パカチ。

（『ホトトギス』四三巻一号（昭和一四年一〇月）「各地座談会」中「京城」部）

右の記事によると、この語義の隔たりはすでに昭和一四年（一九三九）当時から、俳人間で認識されていたことが読み取れる。しかしながら、「俳人仲間では今日パカチと云へば植物も云ふし、器になつたものも云」うこ

とになっていたのである。つまり、当時の俳人たちは、なり瓢をその加工品の名称「パカチ」で呼んでいた。丁度、同じふくべ植物であるへちまにおいて、植物名とその加工品に対して同一呼称が用いられるようになったのと、同様の現象であろう（19）。

朝鮮半島を想定した「季題」が虚子編『新歳時記』に採用される例は他にも見られる。

『新歳時記』初版および改訂版には、「温突」「春聯」「初筏」「蝎」「水砧」「春窮」と、朝鮮半島との関係が深い「季題」が複数収録され、立項している。

温突（をんどる）三 朝鮮や満州の家屋には床下に煙道を設けてあり、冬季此に火煙を通して家屋全体を暖める。此の装置を温突といふのである。燃料として、草や松葉や薪や甚だしいのは馬糞等をも用いる。

温突に住んで匏（ひさご）を作りけり　迦南

温突の煙するどくあげにけり　数帆

（初版『新歳時記』「温突」項。改訂版「温突」項と若干の異同有）

春聯（しゅんれん） 支那や朝鮮では、旧正月を祝ふために門の両側や入口の扉などに、赤い紙に目出度い文句を書いて貼る。之を春聯といふ。

春聯に轎賑はしく通りけり　朴人

春聯や幼きもする耳かざり　とみ女

（初版『新歳時記』「春聯」項。改訂版「春聯」項も同文）

初筏（はついかだ）　鮮満地方殊に鴨緑江や松花江沿岸等では、上流の森林を晩夏から初冬にかけて大仕掛に伐採する。それを筏に組み春の解氷を待つて流下するのであるが、その初めて下つて来る筏を「初筏」といふ。新義州ではこの初筏が到着すると、その筏を迎へる祭事が行はれる、これを**筏祭**（いかだまつり）といふ。

鎮江山の桜咲きけり初筏　　孤岳

初筏統軍亭の袂より　　実柿

（初版『新歳時記』「初筏」項。改訂版「初筏」項と若干の異同有）

蝎（かつ）三**さそり**ともいひ朝鮮・台湾・満州・支那等に棲む。蜘蛛類で、足は八本、腹部が長く、細長い尻の先に劇毒の螫（はり）を持つてゐる。

北京

廃宮や石柱古りて蝎ぞ住む　　沼蘋女

（初版『新歳時記』「蝎」項。改訂版の「蝎」項も同文）

水砧（みずぎぬた）三朝鮮では春になると野に出て水辺で洗濯をし砧をうつといふことだ。秋の砧と区別した方がよい。

江くれて海のごとしや水砧　　蘭の秋

鮮人になりきつて住み水礎　　石汀

（改訂版『新歳時記』「水砧」項）

春窮（しゅんきゅう）三四月から五月にかけ、麦の取入前、食物の不足を来す時のことで、朝鮮ではさういふことがある。

（改訂版『新歳時記』「春窮」項）

中でも「水砧」や「春窮」は、『新歳時記』への採用開始時期こそ「パカチ」とはずれるものの、朝鮮半島ならではの「季題」として『新歳時記』に収録されている点は注目に値する。

さらに、朝鮮半島を想定した「季題」は、傍題の中にも確認される。

【初版】

狼（おほかみ）三 狼は深山に棲息してゐるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求める。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつく。火を恐れるから、山野を行く時は火縄を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は真の狼ではなく、**豺**（やまいぬ）と称せられる小形のものである。朝鮮狼のことを**ぬくて**（ぬくて）といふ。

警察に吊されてある豺かな　友萍

狼やそろへ立てたる馬の耳　素心

【改訂版】

狼（おほかみ）三 狼は深山に棲息してゐるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求める。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつく。火を恐れるから、山野を行く時は火縄を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は真の狼ではなく、**豺**（やまいぬ）と称せられる小形のものである。朝鮮狼のことを**ぬくて**といふ。

狼やそろへ立てたる馬の耳　　素心
警察に吊されてある豺（ぬくて）かな　　友萍

【増訂版】

狼（おほかみ）三 狼は深山に棲息してゐるが、冬、雪が深まると人家近く現れ食を求める。小獣を捕食するのであるが、時として人間に危害を加へる。頭上を跳び越え、驚いて人が倒れると咬みつく。火を恐れるから、山野を行く時は火縄を持ち、露営には火を焚く。わが国の狼は真の狼ではなく、豺（やまいぬ）と称せられる小形のものである。

狼やそろへ立てたる馬の耳　　素心

虚子編『新歳時記』の「狼」項は、初版と改訂版で例句の順序が入れ替わっている。これは、傍題「ぬくて」の例句よりも、立項「季題」の「狼」の例句が先に来たほうが句作者の便宜にかなうであろうという、歳時記編者の配慮ではないかと察せられる。と言うのも、解説文にあるように「ぬくて」は朝鮮狼を指す。他方、虚子編『新歳時記』の編集方針は、「季題の排列は大体東京を中心とし」たものである（虚子編『新歳時記』初版序）。よって、「季題の排列」のみならず、例句の排列もまた、東京中心に改めたということも、想像に難くない。したがって、立項「季題」である「狼」の例句を、傍題「ぬくて」の例句の前に持ってくるのが適切とされ、改版時に改められたのではないか。また『新歳時記』が旨とする「作句本位の歳時記」（虚子編『新歳時記』初版助序）を作るという『新歳時記』の編集方針から考えても、日本の本土に居住する多くの句作者にとっては、「ぬくて」よりも本土に棲息する「狼」の方がより馴染み深く、句作の機会も多いと考えられたと推測することができる。さらに「狼」項は、増訂版になると、解説文の一部と、例句一句が削られ、加えて「豺」という字の書体

が、太字のゴシック体から通常の太さの明朝体に改められる。この「豺」の字体の変化は「豺」が狼の傍題から外されたことを示す。

初版および改訂版『新歳時記』「狼」項中の、「朝鮮狼のことをぬくてといふ」の一文にある「ぬくて」は、太字のゴシック体で記されていること、および例句中で「豺」という字に「ぬくて」のルビが振られていることから、改訂版の段階までは「狼」の傍題として認められていたとわかる。朝日辞典を参照すると、朝鮮語で狼を指す語は「ㅅㅐㅂㅏㄹ」であるので（20）、「ぬくて」は狼を指す朝鮮語「ㅅㅐㅂㅏㄹ」の音を、平仮名で表記したものと考えられる。このように、朝鮮半島を想定した「季題」の、虚子編『新歳時記』への採用は、立項「季題」のレベルでも傍題のレベルでも確認できるのである。

ではなぜ、「パカチ」や「オンドル」、「ぬくて」などの朝鮮語が、「季題」として『新歳時記』初版および改訂版に収録されることになったのであろうか。戦後刊行の増訂版では削られていることから考え、これらの語は、戦前、戦中には「季題」として必要とされたものの、敗戦後には不必要となった、もしくは削らざるを得なくなった「季題」であると考えられる。よって、戦前、戦中に、日本の植民地や勢力圏を出自とする言葉を、「季題」に設定したものと推測される。

これらの例は、朝鮮語、ひいては、外地の言語の、内地への流入の例としても注目される。が、歳時記という視点や高浜虚子の事績という視点から見ると、虚子編『新歳時記』の立項「季題」の増補ないし削除の方針と、外地の誕生、拡大、喪失との関係性が見えてくる。加えて、傍題、「季題」の解説文、例句にまで及ぶ『新歳時記』の改訂・再改訂の緻密さも看取される。このことは、先学も指摘する通りである。西村睦子は、「この改訂版では季題はもとより、解説文からも文節単位で天皇制、軍事、大陸侵略に関する部分はものの見事に除去された」と述べている。また筑紫磐井も同様の指摘をしている。

さらに、虚子の、朝鮮はじめ大陸や新地への強い関心も見て取ることができる。

（二）「バナナ」

「バナナ」は改訂版において「熱帯季題」群の中に組み込まれたことから、度々先行研究に取り上げられている（21）。

「熱帯季題」が増訂版において削除された理由については、先行研究によって、太平洋戦争敗北による日本の「版図」縮小に最大の原因があると指摘されている。例えば本井英は、次のように述べている。

> 太平洋戦争での敗北は日本の版図を一気に縮める。つまり熱帯で俳句を作る日本人などいなくなるわけだ（このことは逆に戦前の「熱帯季題」なるものがどの辺のニーズに応えたものであったかを物語る）。そこで虚子は昭和二十六年の歳時記改訂で、これら三十五項目を削除する。（「バナナ」は可哀そうに、もともと初版からあったのに、ついうっかりこの時に消されてしまった）（22）。

虚子は「熱帯季題小論補遺」の中で、「熱帯季題」を設ける理由の一つとして、「熱帯」地方の俳人の便宜のためということを挙げており（23）、「熱帯季題」が、主として、拡大した日本の勢力圏を舞台に想定して設定されたことを窺わせる。ところが後に、敗戦に連関し、外地から日本人が引き揚げ、「熱帯季題」を本当に必要とする句作者が殆どいなくなる。先行研究の指摘は、この出来事に「熱帯季題」削除の大きな一因を求めたもので、首肯できる。

しかし、季題「バナナ」の削除については、これを過失と見るべきであろうか。

虚子編『新歳時記』の改版・再改版に際して、しばしば立項「季題」以下例句や季題解説文にまで緻密に修正が加えられている点は、先に確認したとおりである。この事実から、内容を精密に点検、吟味されているはずの

『新歳時記』において、過失による立項「季題」削除があったとは考えがたい。

『新歳時記』初版、改訂版の「バナナ」項を見比べると、実は、「バナナ」項自体も、改版の再に項の内容が書き換えられている季題の一つであることに気づく。

【初版】

バナナ㊂　バナナ即ち甘蕉（みばせう）は、生（な）る所は多く常夏の国である。滋養にもなるし、夏季の生食は広く好まれる。腐敗も早いせいか、夜の街頭で、夜涼の人々に向つて特異な投売りが展開されたりもする。丈余の茎頭に、大長葉の間から累々として垂れ下がった群果は蓋し見事なものである。

台湾所見

舷梯を追い戻されぬバナナ売　白汀

バナナ買ふ程の馬来語覚えけり　三堂

【改訂版】

バナナ　バナナ即ち甘蕉は、産地は多く常夏の国である。丈余の茎頭に、大長葉の間から累々として垂れ下がった群果は蓋し見事なものであろう。内地にも大量に輸入され、滋養にもなるし、夏多く食べられる。

各に遠き故郷やバナナむく　草千

舷梯を追い戻されぬバナナ売　白汀

バナナ買ふ程の馬来語覚えけり　三堂

川を見るバナナの皮は手より落ち　虚子

注目すべきは、まず初版には確認できる、立項「季題」下の㊂という記号が、改訂版では消されている点、次に初版の例句前の前書「台湾所見」が改訂版では削られている点の二点である。この二点の異同は、改訂時、「バナナ」が「熱帯季題」群に組み込まれたことに深く関係すると見られる。

まず立項「季題」下の㊂という記号は、初版における「バナナ」が夏の間、つまり陽暦五月から七月のうちの、少なくともふた月以上に亙る「季題」であることを示している（24）。これに対し、改訂版における「バナナ」は「熱帯季題」部の所属とされている。したがって、一年中暑い「熱帯」の「季題」である以上、「季題」のいわば旬を問題にする㊂という記号は外さざるを得まい。現に、他の「熱帯季題」にも、㊂の記号は一切付されていない（25）。

ついで、前書「台湾所見」の削除についてであるが、「バナナ」が「熱帯季題」である以上、例句も「熱帯」における句として掲載すべきとの判断から、台湾を詠んだ句である事実には目をつぶることにしたものと推測される。

さて、初版からすでに立項「季題」とされていた「季題」で、改版時に「熱帯季題」に組み込まれた「季題」としては他に二つ、「鳳梨／パイナップル」と「仏桑花」が確認できる。

【初版】

鳳梨（あなす）　鳳梨即ちパイナップルは夏淡紫色の花を咲かせるが、もと〳〵熱帯産である。果は松毬に似て五・六寸位、赤黄色をして頭に葉を生やしてゐる。生食もされるが、一般には缶詰の方が親しまれる。

【改訂版】

パイナップル　パイナップル即ち鳳梨で、松毬に似た五・六寸くらゐの大きな実である。赤黄色をして頭に葉を生やしてゐる。内地では、生食もされるが、主に缶詰の方が親しまれる。

日章旗（ひのまる）や鳳梨熟す小学校　　雨城

扶桑花の長き垣あり異人墓地　　梧朗

初版と改訂版の「鳳梨／パイナップル」項を比較するとき、まず注目できるのは「鳳梨」と「パイナップル」の立項「季題」交代である。漢字圏外からの外来語であることが明らかな、カタカナ表記の「パイナップル」に立項「季題」を変更したことで、季感、すなわちここでは「熱帯」のイメージが想起されやすくなったということは想像に難くない。また、改訂版の「パイナップル」項の解説文に用いられている「内地」という語は、改訂版の「バナナ」項にも用いられていたが、ここからは改訂版の「パイナップル」「バナナ」が共に、生産地として内地ならざる場所を想定されていることが看取される。さらに「パイナップル」の例句に、「日章旗」と書いて「ひのまる」と読ませる例句を採用している点からも、初版の「季題」「鳳梨」と、改訂版の「熱帯季題」としての「パイナップル」が、同一の果実植物を指しながら、想定された「季題」の舞台となる地という点においては、異質の季題であることが窺える。

増訂版における「バナナ」の削除が過失であるならば、「鳳梨／パイナップル」「仏桑花」の削除もそれに準ずると見なければならない。しかし、三つの立項「季題」を総合して考えるとき、先の「パカチ」や「温突」と同様、これらの「季題」は、外地を想定した「季題」として初版に採用され、その後改訂の際「熱帯季題」に組み込まれ、増訂版刊行時には不要、もしくは削らざるをえない「季題」となったために削除されたという可能性が見えてくるだろう。

このように見てくると、増訂版における「熱帯季題」の削除理由として、先行研究が指摘した、太平洋戦争敗北による日本の「版図」縮小は、一部の「熱帯季題」の『新歳時記』からの削除の理由にとどまらない。「バナナ」の削除についても、他の「熱帯季題」の削除と同様、外地の喪失に起因するものと考えられるのではないか。

明治三七年（一九〇四）から明治四四年（一九一一）にわたり使用された高等小学校用国語科国定教科書には、熱帯植物の一例としてバナナと鳳梨が紹介されている。

熱帯地方ニハ、ソノ他ノ有用植物、ハナハダ多シ。サトーキビ、ゴムノ木、コーヒーノ木、藍ナド、ソノ主ナルモノナリ。〈中略〉

マタ、食用果実ヲ生ズル植物、ハナハダ多シ。バナヽ、アナナスナド、ソノ主ナルモノナリ。バナヽハ芭蕉ノ類ニシテ、広ク、熱帯地方ニ培養セラレ、ワガ琉球、台湾、小笠原島ニモ、多ク産ス。アマタノ変種アレドモ、葉ト茎トハ芭蕉ニ似テ、ハナハダ大キク、果実ハ胡瓜ニ似テ、刺ナク、カツ、厚キ皮アリ。果肉ハ澱粉多クシテ、味ヨロシ。

アナヽスハ、茎、ハナハダ短ク、葉長大ニシテ、一所ヨリ群リ出テ、中ニハ、刺アルモノアリ。果実ハ、松ノ実ニ似テ大キク、赤色ヲオビ、上部ニ、葉群アリ。果肉ハ、味、ハナハダ甘クシテ、香気強シ。（26）

これによると、『新歳時記』初版の刊行された昭和九年（一九三四）よりずっと遡って、台湾は有力なバナナの産地であると認識されていたことが窺える。

またこの資料からは、バナナも鳳梨も共に、植物としてはここでいう「熱帯地方」に存し、「食用果実」としては内地の人々にも認識され、その食卓にも上り得たことが読み取れる。つまり、地に根を下ろす植

物の姿でも、果実部分のみという食料品の形でも、植民地や勢力圏まで含めた当時の「日本」には存し得たのである。

しかし、敗戦により、ここに挙がるバナナや鳳梨の産地は、悉く日本の植民地や勢力圏ではなくなった。このことは国内にバナナや鳳梨が根を下ろすことは殆どなくなったことを意味する。またこれらの島々が諸外国の統治下に入ったからには、当然、昭和二六年（一九五一）当時、これら果実の国内流通量が敗戦前に比べ大きく減少したことは想像に難くない。

したがって、敗戦により、日本国内においては、地に根を張る植物の姿のバナナや鳳梨も、果実のみの食料品の姿のそれらも、ともにあまり見られなくなってしまった、あるいは国内にあるべき物でなくなってしまったものと考えられる。

このように考えてくると、「椰子」や「護謨樹」などの「熱帯季題」が虚子編『新歳時記』再改版の際に削除されたのと同列に、「バナナ」や「鳳梨」を扱うことができるだろう。「バナナ」や「鳳梨」が『新歳時記』増訂版に無い大きな理由は、やはり、敗戦による日本の外地の喪失により、『新歳時記』編者が、意図的に削除したためではなかろうか。

おわりに

以上、「パカチ」を例に虚子編『新歳時記』三版種の異同について考えてきた。『新歳時記』再改訂の有力な一因として、先学が度々指摘してきたように、やはり敗戦を考えざるを得まい。

『新歳時記』にはこの他にも、満州を舞台として想定した「霾」、中国を想定した「爆竹」「寒食」「苦力来る」、「極地」を想定した「馴鹿」「北極光」といった「北方季題」、戦前戦中の農地制度を背景とする「年貢納」と

いった「季題」が存したが、これらは悉く再改訂の際に削除されている。また、祝日の「季題」については、「天長節」「明治節」「紀元節」が再改訂の際に削除されたが、代わって「天皇誕生の日」「文化の日」が新たに増訂版に組み込まれている。これは、先の三つの祝日が戦後一旦廃されたものの、うち「天長節」と「明治節」が昭和二六年（一九五一）の『新歳時記』再改訂までに名前を変えて「復活」したという事実と無関係であるまい。

このように、敗戦後の外地喪失、祝日の変更、農地制度の変更などと時期をほぼ同じくして、多くの「季題」が『新歳時記』から姿を消したり、一部は新たに登場したりしていることは、表1、2からも明らかである。

ここで、初版から改訂版への改訂時に、「熱帯季題」を中心とする「季題」が増補された点に改めて目を向けてみると、虚子編『新歳時記』の太平洋戦争前の改訂は、外地の拡大や外地への日本人の入植が進むという時勢を背景に、立項「季題」の数を増大させる形で行われ、敗戦後の『新歳時記』再改訂は、太平洋戦争敗戦に伴う日本の外地喪失や種々の政策の変更という時勢の変化を背景に、立項「季題」の数を減少させる形で行われたと言えるのではないか。虚子編『新歳時記』はこのように、実作者たちを取り巻く情勢の変化に対応して、その内容を二度にわたり変えてきたという面を持っており、それが改訂および再改訂時に発生した異同に表出しているものと考えられる。

第七章　高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性

第七章　高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性

はじめに

昭和一五年（一九四〇）六月に初版が刊行された高浜虚子編『季寄せ』は、虚子単独責任編集の最後の季寄せである。同書は、昭和九年（一九三四）一一月初版刊行以来のロングセラーである虚子編『新歳時記』に拠っている（1）。

『季寄せ』の拠り所である虚子編『新歳時記』の場合、現行本ではその奥付から、『新歳時記』についてこれまで二度の改版が行われたことが看取されるばかりでなく、序に続く「改版について」「再改版について」においては、二度の改版のあらましを明記している（2）。

これに対し、現行の虚子編『季寄せ　改訂版』（3）の場合は、その奥付からも、序文に続く「改版について」の件からも、虚子没後の昭和三八年に高浜年尾による改訂が行われたこと以外、改訂について触れていない（4）。かつ、この改訂についての報告も確認できない。

しかし、後に述べるように、『新歳時記』が時代の要請に合わせて改訂されたという事実を考えると、『季寄せ』が虚子の生前に一度も改訂されなかったとは考えがたい。

そこで本章では、虚子編『季寄せ』の改訂の有無を明らかにし、さらに同書の改訂と虚子編『新歳時記』の改訂の関係性を検討したい。

なお、本章において、『季寄せ』『新歳時記』は、共に虚子編のものを指すこととする。

第一節　虚子編『季寄せ』誕生の背景

ここで、『季寄せ』の『新歳時記』に対する位置づけを明確にするため、はじめに、虚子編『季寄せ』、つまり虚子編『新歳時記』準拠の季寄せが誕生した背景について確認する。

そもそも、『季寄せ』刊行の企画の出所はどこであったのだろうか。『ホトトギス』昭和一四年（一九三九）四月号の「虚子消息」欄によれば、虚子編『季寄せ』は虚子側の発案ではなく三省堂側の求めに応じる形で企画、刊行されたということになる（5）。三省堂の社史によれば、昭和一五年は三省堂の創業六〇年の年に当たり、新刊の虚子編『季寄せ』を含め、「新刊・改訂の点数は三二〇点に達し」、「三省堂史上最高点数であった」（6）とあるから、『季寄せ』刊行の背景には、その記念事業があったのかもしれない。

では、これに対し、依頼を受けた虚子側には、出版の承諾にどのような背景があったと考えられるか。虚子編『新歳時記』初版、昭和一四年（一九三九）刊本の奥付からは、『新歳時記』初版について、昭和九年（一九三四）一一月に第一刷が刊行されてから四年四ヶ月で、四〇回を超える重刷が行われたことが看取される（7）。この重刷の回数から、虚子編『新歳時記』の成功ぶりを十分窺い知ることができ、これに自信を得て、虚子側が『季寄せ』刊行に応じたとしても首肯できる。

虚子編『季寄せ』序にあるように、虚子編『季寄せ』は『新歳時記』に対して、作句の実際に使用する簡便な手引き書の面が強いものである（8）。したがって、『新歳時記』の成功に裏打ちされて、俳人らの要望も大きかったという事情もあったのであろう。

ともかく、虚子編『季寄せ』刊行は、三省堂側の編集依頼、それを受けての虚子側の編集受諾、両者の思惑の結果であったと推測される。

ならば、『新歳時記』のみが時勢に即して改訂され、『季寄せ』がそうされなかったというのは考えにくい。本稿はその疑問から出発しているのである。

第二節　虚子編『季寄せ』の修改訂

虚子編『新歳時記』には、初版、改訂版、改訂版戦後修訂版、増訂版の三版四種が存することは、第六章で確認した通りである。

では、虚子編『季寄せ』においては、虚子の生前に改訂や修訂が行われなかったのだろうか。そこで今回、虚子編『季寄せ』昭和一五年（一九四〇）六月刊本（第一刷）、昭和二二年（一九四七）四月刊本、昭和二六年（一九五一）九月刊本（9）と、虚子編『新歳時記』の改訂版（昭和一五年（一九四〇）四月第一刷）、改訂版戦後修訂版（昭和二二年（一九四七）九月刊本、第一刷刊行日不明）、増訂版（昭和二六年（一九五一）一〇月第一刷）（10）の収録立項「季題」を比較し『季寄せ』の修改訂の有無を検討した。

まずは、六本の調査後、立項「季題」の異同、すなわちここでは立項「季題」の有無の調査結果と、加えて、立項「季題」がどの本に見られどの本に見られないかによってパターン分けした結果を表1にまとめる。

表1：高浜虚子編『季寄せ』各刷首題と『新歳時記』各版首題との比較表

部立	首題	改訂版『新歳時記』	昭15刊『季寄せ』	当代俳句集成収録『新歳時記』	昭22刊『季寄せ』	昭26刊『季寄せ』	増訂版『新歳時記』	首題異同出現パターン
一月	朝賀	○	○	○	○	×	○	D
	人日	×	×	×	×	×	○	E
	入営	○	○	×	×	×	×	A
	馴鹿	○	○	○	○	×	×	B
	北極光	○	○	○	○	×	×	B
二月	春聯	○	○	○	○	×	×	B
	爆竹	○	○	○	○	×	×	B
	紀元節	○	○	○	○	×	×	B
	実朝忌	○	○	○	○	×	○	D
三月	西行忌	○	○	○	○	×	○	D
	大石忌	○	○	○	○	×	○	D
	目貼剥ぐ	○	○	○	○	×	○	D
	初筏	○	○	○	○	○	×	C
	蓮如忌	○	○	○	○	×	○	D
	其角忌	○	○	○	○	×	○	D
	水砧	○	○	○	○	×	×	B
四月	苦力来る	○	○	○	○	×	×	B
	寒食	○	○	○	○	×	×	B
	義士祭	○	○	○	○	×	○	D
	梅若忌	○	○	○	○	×	○	D
	人丸忌	○	○	○	○	×	○	D
	霾	○	○	○	○	×	×	B
	天長節	○	○	○	○	○	×	C
	天皇誕生の日	×	×	×	×	×	○	E
	靖国祭	○	○	○	○	×	○	D
	春窮	○	○	○	○	×	×	B
五月	徴兵検査	○	○	×	×	×	×	A
	四迷忌	○	○	○	○	×	×	B
六月	蝎	○	○	○	○	×	×	B
	蟬丸忌	○	○	○	○	×	○	D
	業平忌	○	○	○	○	×	○	D
七月	外寝	○	○	○	○	×	○	D
	熱帯	○	○	○	○	×	×	B
	赤道	○	○	○	○	×	×	B
	馬来正月	○	○	○	○	×	×	B
	朝陰	○	○	○	○	×	×	B
	木蔭	○	○	○	○	×	×	B
	オアシス	○	○	○	○	×	×	B
	貿易風	○	○	○	○	×	×	B
	スコール	○	○	○	○	×	×	B
	赤道祭	○	○	○	○	×	×	B
	嫁蛍び	○	○	○	○	×	×	B
	象	○	○	○	○	×	×	B
	水牛	○	○	○	○	×	×	B
	鰐	○	○	○	○	×	×	B

部立	首題	改訂版『新歳時記』	昭15刊『季寄せ』	当代俳句集成収録『新歳時記』	昭22刊『季寄せ』	昭26刊『季寄せ』	増訂版『新歳時記』	首題異同出現パターン
七月（続き）	鱶	○	○	○	○	×	×	B
	極楽鳥	○	○	○	○	×	×	B
	熱帯魚	○	○	○	○	×	×	B
	火焔樹	○	○	○	○	×	×	B
	無憂華	○	○	○	○	×	×	B
	鳳凰樹	○	○	○	○	×	×	B
	宝冠木	○	○	○	○	×	×	B
	仏桑花	○	○	○	○	×	×	B
	ドリアン	○	○	○	○	×	×	B
	マンゴスチン	○	○	○	○	×	×	B
	マンゴー	○	○	○	○	×	×	B
	パパヤ	○	○	○	○	×	×	B
	竜眼	○	○	○	○	×	×	B
	バナナ	○	○	○	○	×	×	B
	パイナップル	○	○	○	○	×	×	B
	椰子	○	○	○	○	×	×	B
	檳榔樹	○	○	○	○	×	×	B
	護謨樹	○	○	○	○	×	×	B
	榕樹	○	○	○	○	×	×	B
	クロトン	○	○	○	○	×	×	B
	月下美人	○	○	○	○	×	×	B
	ブーゲンビリア	○	○	○	○	×	×	B
八月	宗祇忌	○	○	○	○	×	○	D
九月	守武忌	○	○	○	○	×	○	D
	太祇忌	○	○	○	○	×	○	D
	パカチ	○	○	○	○	○	×	C
	去来忌	○	○	○	○	×	○	D
十月	神嘗祭	○	○	○	○	×	○	D
	宗鑑忌	○	○	○	○	×	○	D
	明治節	○	○	○	○	×	×	B
十一月	文化の日	×	×	×	×	×	○	E
	大演習	○	○	×	×	×	×	A
	達磨忌	○	○	○	○	×	○	D
	嵐雪忌	○	○	○	○	×	○	D
	空也忌	○	○	○	○	×	○	D
	新嘗祭	○	○	○	○	×	○	D
	几董忌	○	○	○	○	×	○	D
	除隊	○	○	×	×	×	×	A
十二月	貞徳忌	○	○	○	○	×	○	D
	温突	○	○	○	○	×	×	B
	ペーチカ	○	○	○	○	×	○	D
	甘蔗刈	○	○	○	○	×	○	D
	一茶忌	○	○	○	○	×	○	D
	年貢納	○	○	○	○	○	×	C

首題異同 出現パターン分類

出現パターン	改訂版『新歳時記』	昭15刊『季寄せ』	当代俳句集成収録『新歳時記』	昭22刊『季寄せ』	昭26刊『季寄せ』	増訂版『新歳時記』
A	○	○	×	×	×	×
B	○	○	○	○	×	×
C	○	○	○	○	○	×
D	○	○	○	○	×	○
E	×	×	×	×	×	○

調査の結果、調査の底本にした虚子編『季寄せ』昭和一五年（一九四〇）刊本は『新歳時記』改訂版と、『季寄せ』昭和二二年（一九四七）刊本は『新歳時記』改訂版戦後修訂版と、『季寄せ』昭和二六年（一九五一）刊本は『新歳時記』増訂版と、収録立項「季題」がそれぞれに対応を見せることがわかった。虚子編『季寄せ』の修改訂は、虚子編『新歳時記』の修改訂に対応して実施されていたのである。換言すれば、虚子編『季寄せ』における、虚子生前の修改訂も、『新歳時記』の修改訂と同様に、太平洋戦争前後の時勢の変化に対応したものになっているのである。

これを元に、虚子編『季寄せ』各版と虚子編『新歳時記』の各版の修改訂の流れを纏めると、次のように考えられる。

昭和一五年（一九四〇）の虚子編『新歳時記』改訂版刊行に遅れること数ヶ月、これに準拠した虚子編『季寄せ』が誕生した。やがて敗戦をうけて、昭和二二年（一九四七）九月頃、改訂版『新歳時記』が修訂されると、『季寄せ』初版もそれとほぼ同時期に修訂されたと見られる。その後、昭和二六年（一九五一）に『新歳時記』が再改訂され増訂版が刊行された頃、『季寄せ』にも改訂が行われた。そして、虚子没後の昭和三九年（一九六四）には、高浜年尾による改訂の施された『季寄せ　改訂版』の刊行に至るのである。

以後、虚子編『季寄せ』についても各版を、初版、初版修訂版、改訂版、そして虚子没後の〈改訂版〉と呼称する。

このように修改訂を加えておきながら、そのことを『季寄せ』の中で一切断らないという姿勢からは、虚子編『季寄せ』があくまで句作の簡便な手引書であって、その分、虚子編『新歳時記』に求めた厳密さは求めていない印象を受ける。

ここで再び、『新歳時記』に対する『季寄せ』の位置づけを考えてみたい。一般に季寄せとは「季語の集成のみのもの」を指す（11）。ところが、虚子編『季寄せ』の場合は、多くの項において最小限の例句が挙げられて

いたり、項目によっては『新歳時記』の「季題」解説文がそのまま使われていたりしており、季語の集成に留まらない。名前こそ『季寄せ』でありつつも、殆ど『新歳時記』の簡便版と言っていい特徴を備えているのである。『新歳時記』に準じていると断っているだけあって、虚子編『季寄せ』の使用者が、その拠り所となっている『新歳時記』をも使っていることを前提としており、初版刊行当初の『季寄せ』は、『新歳時記』に対し副次的な刊行物であった、と位置づけても良いのではないか。

造本の面から見ても、『新歳時記』に比べ『季寄せ』は小型な分（12）、丈夫さの点で『新歳時記』に劣るであろう。辞書的な役割をも担う『新歳時記』（13）に比べ、元来は、句作時の探題、吟行時の携帯用（14）という用途として作られたと考えてよいと思われる。

ならば、『季寄せ』は『新歳時記』を逐一確認しなくても、日々の句作に事足りるよう、『新歳時記』と常に同じ「季題」を収録していることが求められるものと思われる。現に、『季寄せ』の初版修訂版までは、『新歳時記』改訂版、ないし改訂版戦後修訂版と、同じ立項「季題」を収めている。

ところが、先の表1、出現パターンDの立項「季題」群に着目すると、『季寄せ』改訂版の収録立項「季題」に限っては、『新歳時記』増訂版の立項「季題」と、綺麗に対応しきらないことが看取される。

虚子編『季寄せ』改訂版と、『新歳時記』の先後関係を考えるとき、『季寄せ』が『新歳時記』準拠の季寄せであるという事情を考慮すれば、『新歳時記』増訂版が先に刊行され、追って『季寄せ』改訂版が刊行されたと考えるのが自然である。

ところが、調査に用いた本の奥付によれば、『季寄せ』改訂版の方が、『新歳時記』増訂版に一月以上先んじて刊行されたことになる（15）。

では、なぜ『季寄せ』改訂版は、『新歳時記』増訂版に先んじて刊行され、『新歳時記』改訂版にも増訂版にも見られない、改訂の独自性を示すのだろうか。

この理由として、二通りが考えられる。

まず、季寄せ、歳時記の別を問わない立項「季題」の選定の結果である可能性について検討したい。次は、『季寄せ』改訂版には採用されなかったが、『新歳時記』増訂版には採用された立項「季題」「外寝」の、『季寄せ』『新歳時記』各版からの「季題」解説文である。

『新歳時記』改訂版戦後修訂版（『新歳時記』改訂版も同文）

外寝　朝鮮・南洋方面では、賤民は暑い夜は外に寝る。別に体にも障らぬらしい。内地でも田舎でやる。

『季寄せ』初版修訂版

外寝　朝鮮・南洋方面の風俗で、賤民は暑い夜は外に寝る。

『季寄せ』改訂版

「外寝」項見られず

『新歳時記』増訂版

外寝　暑い夜は外に寝る。別に体にも障らぬらしい。

『季寄せ』初版修訂版と、『新歳時記』改訂版戦後修訂版では、「外寝」は主に外地の「季題」として解説されている。ところが、『新歳時記』増訂版では、外地に関する記述がそっくり除かれている。この場合は、『新

歳時記』改訂版戦後修訂版に、「内地でも田舎でやる」とあるので、内地でも行われている以上、「季題」として残すべきであるとの判断から、『新歳時記』増訂版には引き続き採用されたものと想像される。また、西村睦子も「外寝」が例外的に虚子編に残された理由について、「まだバラックに住んでいた世相ゆえか」と指摘する（16）。

ところが、一方で、この「外寝」は大陸特有の風習であるという見解も、すでに「ホトトギス」内部に見られる。昭和一四年（一九三九）に『ホトヽギス』誌上に掲載された、当時の朝鮮での座談会の記録では、冬の寒さ厳しい大陸の家の構造に起因するのが、「季題」「外寝」であるという考えが示されている（17）。この立場に立てば、本来的な「季題」「外寝」を、内地では殆ど見ることが出来ないということになる。

以上をまとめると、「季題」「外寝」の採否について、外地ならではの「季題」という立場に立ったがゆえに、戦後時勢に合わないだろうと『季寄せ』改訂版からは削除したが、内地でも行われていたことから、『新歳時記』では「季題」として認めたという可能性が見えてくる。

同じく『季寄せ』改訂版では不採用、『新歳時記』増訂版では採用となっている「季題」に、「甘蔗刈」があるが、この場合も、内地でも九州地方で行われているという認識が、『新歳時記』改訂版にて示されている（18）。よって、このケースの類例に挙げることができよう。

同様に、『季寄せ』改訂版では不採用、『新歳時記』増訂版では採用となっている「季題」に、「目貼剥ぐ」がある。こちらも、「季題」解説文を読む限り、戦前は朝鮮、満州地方の「季題」の扱いを受けていたことが看取され、『新歳時記』増訂版採用時には外地に関する記述が削除されている（19）。

特筆すべきは、『新歳時記』増訂版掲載時に初めて、この項目に例句「張り合ひのありし暮しの目貼剥ぐ／虚子」が採用されたことである（20）。例句があるということは、内地においてもその句を理解しうるだけの季感を感じられると、編者が判じたということであろう。

最後に「ペーチカ」も、『季寄せ』改訂版では不採用、『新歳時記』増訂版では採用となっている「季題」である。これも『新歳時記』改訂版および『季寄せ』初版修訂版ではロシアの建築様式で満州地方に多いことが記されているが、『新歳時記』増訂版では外地に関する記載が削られている（21）。しかし、「ペーチカ」の場合は、内地でも見られる旨の記載が元からなく、『新歳時記』増訂版においてもそのような内容は加筆されていない。これはどのように考えたらよいか。

『新歳時記』増訂版の「ペーチカ」の項の例句に目を向けると、「新聞の這入りし音やペチカ焚く／雨意」、「絨毯にペーチカの薪五、六本／三昧」という二句が使われている（22）。この二句は『新歳時記』改訂版からすでに採用されており、したがって戦後時勢が変化しても、この例句を持ってすれば「ペーチカ」の季感は感ぜられると判断されたものと想像される。しかし、「ペーチカ」は内地では珍しいものであるのに、内地においても季感が理解できると判ぜられた背景には何があるだろうか。この問題については、背景の一つとして、童謡「ペチカ」が人口に膾炙していたことが挙げられるのではないかと思われる（23）。

『季寄せ』改訂版で削除されたものが、『新歳時記』増訂版で再び復活するのは、一度時勢に応じて削除したが、その後、内地でも見られる、あるいは見られないとしても、内地で季感を解しうるとの判断されたことによると思われる。その折には、「季題」解説文を一部改めることで新時代に即応していることが分かるように工夫をしたということであろう。

考えられる理由の二つ目は、季寄せには季寄せ用の、歳時記とは異なった立項「季題」の選定が行われた可能性である。

表2：高浜虚子編『季寄せ』改訂版および『新歳時記』増訂版収録の忌日季題一覧

部立	忌日季題	『季寄せ』改訂版採否	『新歳時記』増訂版採否
二月	鳴雪忌	○	○
	実朝忌	×	○
三月	西行忌	×	○
	大石忌	×	○
	蓮如忌	×	○
	其角忌	×	○
四月	梅若忌	×	○
	人丸忌	×	○
六月	蝉丸忌	×	○
	業平忌	×	○
八月	宗祇忌	×	○
九月	守武忌	×	○
	太祇忌	×	○
	西鶴忌	○	○
	子規忌	○	○
十月	去来忌	×	○
	宗鑑忌	×	○
十一月	達磨忌	×	○
	芭蕉忌	○	○
	嵐雪忌	×	○
	空也忌	×	○
	新嘗祭	×	○
	几董忌	×	○
十二月	貞徳忌	×	○
	一茶忌	×	○
	近松忌	○	○
	蕪村忌	○	○

『季寄せ』改訂版には採用されず、『新歳時記』増訂版には採用された立項「季題」として特徴的に多いのが、人物の忌日の「季題」である。右の表2から明らかなように、『新歳時記』増訂版と、『季寄せ』改訂版の両方に収録された忌日「季題」（24）は、二月部の「鳴雪忌」、九月部の「西鶴忌」、「子規忌」、十一月部の「芭蕉忌」、そして十二月部の「近松忌」「蕪村忌」のわずか六題しかない。この六つは、「季題」選択をした編者にとって、どのような位置づけができる題であろうか。

人物が活躍した時代で分けると、ここに挙げた忌日「季題」は「芭蕉忌」「蕪村忌」「近松忌」「西鶴忌」の近世のものと、「鳴雪忌」「子規忌」の近代のものに分けられる。

先に近世の人物に目を向けると、「西鶴忌」の『季寄せ』改訂版における「季題」解説文には、「井原西鶴は浪華の人。住吉社頭で一日、二万三千句を吐いたといはれる才人であった。近松・芭蕉と共に江戸元禄文学の最高峰を形づくつた人である」（25）とあり、ここから、芭蕉、近松、西鶴に対する、『季寄せ』編者のきわめて高い評価が窺える。残る蕪村は、子規が高く評価した江戸俳人で、例えば蕪村忌には句会が開かれていたことが知られている。よって、いずれも特に重要な俳諧師との判断から、その忌日がそれぞれ立項「季題」として採用されたと考えられる。

続いて近代の集合に目を向けると、子規はもちろん鳴雪も、「ホトトギス」史上極めて重要な存在である。

よって、『季寄せ』改訂版に忌日が「季題」として収録された各人は、『季寄せ』編者の立場からすると、俳諧・俳句史史上、いずれも極めて重要度の高い人物であったと言えるであろう。逆に、『季寄せ』改訂版の忌日「季題」は、必要最低限の数に絞り込まれていると換言することもできるであろう。

残る『季寄せ』不採用の忌日「季題」が、『新歳時記』増訂版刊行までのごく短い期間にすべて改めて必要になったとは考えがたく、また、現時点では急に必要になったことを積極的に裏付ける資料も見つかっていない。それに、時勢の変化も、忌日「季題」の場合には、一部の例外を除いて（26）あまり関係がないように思われる。

すると、考えられるのは、この『季寄せ』改訂版において初めて、歳時記用とは少し異なった、季寄せ独自の立項「季題」選定が行われているという可能性である。

昭和十五年の初版刊行以来、『新歳時記』に対して、あくまで副次的な刊行物であった虚子編『季寄せ』に対し、改訂時に『新歳時記』にはない存在意義が、編者によって見直されたのではないだろうか。

以上、『季寄せ』改訂における独自性について理由や背景を考察してきた。

『季寄せ』改訂版が示す改訂の独自性が、虚子編の歳時記や季寄せに載せる立項「季題」の再考、整理をした結果であると見るならば、編者の時勢への敏感さをさらに裏付けることにもなり、注目に値するだろう。

もしくは、『新歳時記』増訂版には歳時記用の、そして虚子編『季寄せ』改訂版には季寄せ用の、立項「季題」の取捨が行われた結果であると見るならば、昭和一五年（一九四〇）の初版刊行以来、『新歳時記』の簡便版である以外に、積極的な存在意義があまり見出されてこなかった『季寄せ』に、ここで初めて、編者によって季寄せとしての新たな存在意義が見出されたということになり、やはり注目に値すると思われる。

おわりに

以上を整理すると、次のようになる。

第一に、これまで虚子生前の内容の改訂が確認されていなかった虚子編『季寄せ』について、今回、初版、初版修訂版、改訂版、そして虚子没後の〈改訂版〉の三版四種の存在が確認された。

第二に、虚子編『季寄せ』の修改訂は、虚子編『新歳時記』の修改訂に概ね即応している。

従って第三に、虚子編『新歳時記』と同様に、虚子編『季寄せ』についても、収録されている立項「季題」から、版種を判別することが可能である。

第四に、虚子編『季寄せ』改訂版と、『新歳時記』増訂版との間には、収録立項「季題」にわずかながら差異

が見られる。『季寄せ』独自の改訂が行われた理由や背景を探求することは、ひいては『新歳時記』『季寄せ』改訂編者の時勢への敏感さの裏付けに、もしくは編者にとっての『新歳時記』と『季寄せ』の位置づけの変化の表れにつながるものと考えられ、重要な意味を持っている。

終章

終章

先学の研究の指摘するように、俳諧からの「発句の独立」が俳句革新の重大要素に当たるならば、発句の構成要素である題と季の折り合いの問題を乗り越えて、俳句に新事物を取り入れるという事象については、子規の俳句革新の議論の中で、もっと積極的に扱われてよいのではないか。

本論文は、この問いに対し、明治期の「新題」を手がかりに、子規やその周辺の俳論や俳句作品を検討して、子規の俳句革新の実態を明らかにしようと試みたものである。さらに、子規の俳句革新の手法が後世にどのような影響を与えたかを、「紀元節」とその異称「梅花節」の句作例や、虚子編の『新歳時記』、『季寄せ』を主な材料として論じた。

第一章は「明治期の発句における新事物と題・季のかかわり――『俳諧開化集』を例に」と題し、三節に分けて論じた。

明治になって、新事物を題とした発句をどのように扱うかは大きな問題であったに違いない。題として取り込むには、原則的には季をもつものであることが最適だからである。季語以外の題のもとに詠まれた近世の発句の場合、一句において季語と題が分離するという現象が見られ、この方法が明治期の新事物を発句に題として取り込む上での先例となったと言えるのであろう。

本章ではこのことを西谷富水編『俳諧開化集』（以下『俳諧開化集』）を通して指摘した。さらに、発句の世界に取り込まれたはずの新事物が、なかなか季語化するには至らなかったことを、『俳諧開化集』前後刊行の「季寄せ」の調査結果から指摘し、その背景を「季寄せ」という書物の性質と関連づけて考察した。

発句が明治の新事物を取り入れるには、宿命的に、題と季の兼ね合いの問題を乗り越えなければならなかった。季語と題を分離させるという近世以来の発句の詠み方が、季感に乏しい事物を題として取り込むにあたっては特

に、解決の一助とはなったものの、こうして漸く発句に取り込まれ得た新事物も、「季寄せ」に取り込まれるにはなかなか至らなかった。新事物が季語として季寄せに取り込まれるとは、季を認められたというばかりでなく、一句の題にもなりうると認められることであり、言うなれば、分離した季と題を再び結びつける意味合いを持つことである。そこで、ここでもやはり、新事物は題と季の狭間で揺れ動くこととなった。このように考えてくると、俳諧の世界に新事物を取り込むことは、一見容易なことに見えて、実は題と季の問題にぶつかりやすく、難しい面もあったと言えるのであろう。『俳諧開化集』で検討した題と季の問題の複雑な様相は、そのことを示しているに違いない。

第二章は「子規の俳句革新における新季語――「新行事」題を例に」と題し、三節に亘って「新行事」題について論じた。

正岡子規は明治二五年（一八九二）からの俳句革新を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。その際、子規が何を基準に旧派を「陳腐」と判じたのかについては、青木亮人が「古人の類句」の多寡がその基準となった形跡があると指摘している。この点から言えば、単純に考えて「古人の類句」が理論上殆ど存在し得ない明治の「新題」を季語として詠んだならば、「新奇」な句になり得たはずだという推測も成り立つ。ところが、明治三一年（一八九八）、子規の校閲による日本派初の類題句集『新俳句』の新題採用状況を見ると、先行する旧派の類題句集と比較してかなり慎重である。

実施日が定まっている「新行事」は、季の問題が絡んでくる他の「新題」と違って、季語としても取り込みやすかったと思われる。しかし、『新俳句』での「新行事」題の立項は「クリスマス」「一月」の他見られない。これに対し、旧派では当時すでにこれら「新行事」題を類題句集や季寄せに多く取り入れていた。一見「新奇」に見える「新行事」題の取り込みに対し、旧派に比べ子規の態度が慎重であったのはなぜか。

実のところ、旧派による「新行事」の取り込みは、一見革新的なようでありながら、その実態は、近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかった。

「新行事」は表面的には新しい題である。しかし、「新行事」が負っている、あるいは明治新政府によって付与された歴史的背景は、むしろ古典的かつ伝統的なものであり、その儀式も厳粛あるいは盛大で、かつ典型的なものであることが求められた。子規は「新行事」を始めとする「新題」の導入が、旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いていたのではないか。加えて子規自らも、「新行事」詠の実作を通して、「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることも自覚していたのではあるまいか。その意識が、『新俳句』における「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がったと考えられた。

ここまで、類句を避けて「新行事」題を詠むことの難しさを検討してきたが、子規の発言や残された句作品を検討するに、子規は決して「新行事」を含む「新題」自体を否定していたわけでも、諦めたわけでもなかった。子規には「新題」を採択する際、それが新しい季語としての「意匠」を持ちうるかの見極めが必要だったのではないかと考察された。

第三章は「俳句革新期における「新題」」と題して、俳句革新期における「新題」について四節に分けて論じた。

具体的には、旧派の発句と、子規ら一派の俳句の両者における、「新題」の扱い方を取り上げ、その姿勢を比較検討した。

明治維新によって様々な新事物が社会に導入されると、文学の中にそれらを取り込もうとする動きが起こったが、俳諧もその例外ではなかった。しかし、新事物を平句ではなく発句の中へ、それも単なる句の一素材ではなく、発句の主たる題として詠もうとするときには、季の問題を無視できなくなり、一筋縄ではいかなかった。つ

まり明治の「新題」を発句に取り込むのは、容易なことではなかったと考えられた。

子規は旧派の句を「陳腐」だとし、旧派を批判する形で俳句革新を展開した。しかし、第四節における『獺祭書屋俳話』での子規の発言と、「開化の部」などを設けた、『俳諧開化集』をはじめとする「特異」な発句集の句を対照させると、子規の批判が、常に旧派全体に対して向けられていたとは言えないように思われる。少なくとも、本章で取り上げた『獺祭書屋俳話』の「新題目」という文における批判は、旧派全体というよりむしろ、俳諧教導職による、新しくも奇抜な試みや姿勢に対して特に向けられたものであったように見える。

加えて、子規が「新題」を単なる句材のみならず、季を持つ題にしようとし、その選別や例句作りに苦心惨憺する様は、旧派の「新題」の取り込み方と好対照をなしていると思われる。

第四章は、「正岡子規の古典研究と俳句実作への還元――芭蕉句および蕉風俳諧を中心に」と題し、三節に亘って論じた。

俳句革新を目指した子規が、一見、矛盾するごとき古句への視線を持っていたことの事実とその意味について論じた。子規が「新奇」を生むために古句に学ぶという、一見矛盾したような手法をとった必然性は、どこにあったのであろうか。また子規は古俳諧からどのような点を学び取ったのであろうか。本章では、俳句実作者に対し、古句を読むことを奨励する子規の発言に焦点を当て、古句を読む意義について、子規がどのように考えていたのかを検討した。

正岡子規は俳句革新を目指したが、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることを主張したわけではなかった。

子規が『俳諧大要』において、特に初学者向けに推薦する俳書名を逐一確認していくと、『蕪村句集』など蕪村関係の俳書と並び、『俳諧七部集』を始めとする蕉風俳諧及び、蕉風復興を志した俳書が数多く含まれていることに気づく。

旧派が無批判に尊崇した芭蕉の句や蕉風の俳書を読むことを、子規が敢えて推奨した理由は次のように考えら

れる。第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくる姿勢、そして第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現する姿勢。子規はこれらの姿勢を、蕉風俳諧に看取し、そこに「新奇」なる句を生み出す可能性を認めたためであった。さらに実作の手本としても、蕉風俳諧を評価していたからと考えられる。

第五章は「「紀元節」とその異称「梅花節」について」と題し、二節に分けて、旧派と新派における、「新題」「紀元節」および「梅花節」の扱いの違いを論じた。

「紀元節」の異称「梅花節」は、一体いつ頃、どのような背景でつかわれるようになったのであろうか。一般語としては今日殆どつかわれていない「紀元節」および「梅花節」という語が、現行の歳時記にはまだ収録されていること、加えて「梅花節」については、現段階で俳句以外の用例が非常に少ないことから、本章では、和歌・短歌、および発句・俳句といった明治以降の短詩系文学作品を中心に取り上げ、「梅花節」という異称がつかわれるようになった経緯を検討した。

本章の結論として、

ⅰ　「梅花節」という語の早い用例が碧梧桐やその門下の俳人に明治三〇年代末期に認められること

ⅱ　「梅花節」という語の誕生の前段階として、梅を「紀元節」の象徴とする知識が存在したらしいこと

ⅲ　明治二〇年代に、子規がこの新知識を短歌や俳句の形でしばしば「日本新聞」紙上に発表しており、碧梧桐の「梅花節」句には俳句の師である子規の影響が考えられること

以上の三点は指摘されてよいと思われる。

第六章は、「高浜虚子編『新歳時記』の三版種」と題して、正岡子規の高弟であり、子規の俳句の「後継者」を自認していた高浜虚子の、「新題」の扱い方を、『新歳時記』を材料に検討した。

俳句革新を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかったとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は『袖珍俳

句季寄せ』を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった。彼の俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実からも十分察せられる。そして虚子の生涯最後の単独責任編集歳時記であり、虚子の歳時記・季寄せ編集の集大成とされるのが、初版昭和九年（一九三四）刊の虚子編『新歳時記』である。今日も増刷され続ける『新歳時記』はまさに、虚子の生んだロングセラーである。

しかしながら、『新歳時記』についての先行研究は決して多くはなく、それらは『新歳時記』に少なくとも三版種が存し、三版種間に異同や差異がみられることを自明の理としつつも、この異同や差異について論じる際、その全体像にはあまり触れていない。

本章では虚子編『新歳時記』三版種間のすべての立項「季題」の異同を調査することによって、『新歳時記』の改訂、再改訂のあり方を明らかにし、さらに異同の見られた立項「季題」を複数取り上げて、二度の改訂の実施の背景を考察した。

敗戦後の外地喪失、軍の解体、祝日の変更、農地制度の変更などと時期をほぼ同じくして、多くの「季題」が『新歳時記』から姿を消したり、一部は新たに登場したりしている。

虚子編『新歳時記』はこのように、実作者たちを取り巻く情勢の変化に対応して、その内容を二度にわたり変えてきたという面を持っており、それが改訂および再改訂時に起こった異同として表出しているのである。

第七章は「高浜虚子編『季寄せ』考――『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性」と題し、高浜虚子編『季寄せ』を材料として、虚子の「新題」の扱いを二節に分けて論じた。

昭和一五年（一九四〇）六月に初版が刊行された高浜虚子編『季寄せ』は、虚子単独責任編集の最後の季寄せである。同書は、昭和九年（一九三四）一一月初版刊行以来のロングセラーである虚子編『新歳時記』に拠っている。

本章では、虚子編『季寄せ』について虚子生前の改訂の有無を明らかにし、さらに同書の改訂と虚子編『新歳

時記』の改訂の関係性を検討した。本章の結論を左に整理する。

第一に、これまで虚子生前の内容の改訂が確認されていなかった虚子編『季寄せ』について、今回、初版、初版修訂版、改訂版、そして虚子没後の〈改訂版〉の三版四種の存在が確認された。

第二に、虚子編『季寄せ』の修改訂は、虚子編『新歳時記』の修改訂に概ね即応している。

従って第三に、虚子編『新歳時記』と同様に、虚子編『季寄せ』についても、収録されている立項「季題」から、版種を判別することが可能である。

第四に、虚子編『季寄せ』改訂版と、『新歳時記』増訂版との間には、収録立項「季題」にわずかながら差異が見られる。『季寄せ』独自の改訂が行われた理由や背景を探求することは、ひいては『新歳時記』『季寄せ』改訂編者の時勢への敏感さの裏付けに、もしくは編者にとっての『新歳時記』と『季寄せ』の位置づけの変化の表れにつながるものと考えられ、重要な意味を持っている。

以上のように検討を重ねてきた上で、改めて、正岡子規が明治の新事物を「新題」として俳句に取り込むまでの流れを見直してみたい。

まず、第一章で確認したように、発句が明治の新事物を取り入れるには、宿命的に、題と季の兼ね合いの問題を乗り越えなければならなかった。俳諧の世界に新事物を取り込むことは、一見容易なことに見えて、実は題と季の問題にぶつかりやすく、難しい面もあったと言えるのであろう。子規以前の、いわゆる旧派宗匠たちからすでに試みられ、実際に行われてもいた発句への「新題」の取り込みの実態を追っていくと、旧派宗匠たちの苦心の跡が見えてくる。このことを大前提として、子規の活動を確認していく。

子規は明治二五年（一八九二）からの俳句革新を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。その際、子規は「古人の類句」の多寡を基準に旧派を「陳腐」と判じた面があった（1）。単純に考えて、明治の新事物であるところの「新題」を詠めば、「古人の類句」が理

論上殆ど存在し得ないので、「新奇」な句が詠めるはずである。子規は「新題」についてはこれを認め、「新題」を俳句に積極的に取り入れようとする姿勢も見せていた

しかし一方で、子規は、「新題」であれば何を詠んでも「新奇」な俳句を詠めるという訳ではない、ということも悟っていく。

第三章で確認したように、「新題」には選択の必要があるとし、『獺祭書屋俳話』「新題目」に述べているように、新事物を闇雲に「新題」として取り込む姿勢には批判的であった。この批判は、旧派の中でも「特異」でありながら、強い影響力を持っていたが故に、本来の俳諧の伝統を無視した無理な「新題」を用いていた俳諧教導職に、特に向けられたものであると考えられる。

加えて子規の発言や、類題句集『新俳句』からは、子規が「新題」を、季を持つ語として俳句に取り入れることに対して、心を砕いていたことが端々に見て取れた。

ならば、有季の「新題」である「新行事」はどうか。季の問題が絡んでくる他の「新題」と違い、実施日が定まっている「新行事」は、季語としても取り込みやすかったのではないかと考えることもできる。しかし、第二章にて確認したように、旧派による「新行事」の取り込みは、一見革新的なようでありながら、その実態は、近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかった。しかも、表面的には新しい題である「新行事」が負っている、あるいは明治新政府によって付与された歴史的背景は、むしろ古典的かつ伝統的なものであり、その儀式も厳粛あるいは盛大で、かつ典型的なものであることが求められた。子規は「新行事」を始めとする「新題」の導入が、旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いていたのだろう。加えて子規自らも、「新行事」詠の実作を通して、「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることを自覚したに違いない。このような意識が、明治三一年（一八九八）刊の日本派の類題句集『新俳句』における、「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がった

と考えられる。

子規は「新題」に対してもやはり、「新奇」な俳句を生む手段として、熱い視線を注いでいたのである。

しかしながら、いわば子規の審美眼ゆえ、厳選の末に子規に認められ俳句に取り込まれた「新題」は、旧派が発句に取り込んだ「新題」に比べ、非常に少なかった。こうして僅かに子規の手元に残った「新題」も、例えば「クリスマス」のように、洋語の使用の例として子規自身に整理されてしまったものもあった（2）。子規にとって、「新題」の取り込み、ひいては「新題」の採否の問題は、子規の題や季の概念にも関わる重要事であったはずであるのに、彼の俳句革新の議論の底に沈んでしまった。結果として、行われていた「新題」の厳選や、「新題」に関わる旧派批判などは、表面的にはその実態が見えなくなり、「新題」に対する子規の問題意識すら、後世の研究で顧みられることは少なくなった。

さて、子規は俳句革新を目指していたわけであるが、子規の俳句革新とは、過去の俳諧伝統をすべて捨て去ることではなかった。「新題」を取り入れるのとは一見正反対のベクトルの動きとも思えるが、第四章で確認したように、旧派が無批判に尊崇した芭蕉の句や蕉風の俳書を読むことを、子規は敢えて、俳句の初学者たちに推奨している。その理由は次のように考えられる。第一に、野山を逍遙して、「造化」から「趣味」や「趣向」を採ってくる姿勢、そして第二に、採ってきた事物をありのままに見て、ありのままを言葉で表現する姿勢。子規はこれらの姿勢を、蕉風俳諧に看取し、そこに「新奇」なる句を生み出す可能性を認めたためであった。さらに実作の手本としても、蕉風俳諧を評価していたからとも考えられる。

振り返って、序章にて、先学の定義する子規の俳句革新とは、次のようなものであると整理した。

Ⅰ　子規は古俳諧の分類を進めていくうちに、俳句革新の必要性を認めた。

Ⅱ　子規の俳句革新は、新聞『日本』に連載した「獺祭書屋俳話」（明治二五年六月～一〇月）に始まった。

Ⅲ　子規は文芸上の指導法、ひいては俳句革新の手段として、洋画の「写生」を掲げ、「写生論」を成した。
Ⅳ　発句の独立が、子規の俳句革新において重要な要素であった。

本論文の第一章から第三章は、右の四項に「Ⅴ　明治の新事物を厳選し、「新題」として俳句に取り込むこともまた、子規の俳句革新において重要な要素であった。」と加筆する必要性を、新たに指摘するものである。

また、第四章は、「Ⅲ　子規は文芸上の指導法、ひいては俳句革新の手段として、洋画の「写生」を掲げ、「写生論」を成した」という先学の研究に対して、洋画の「写生」の理論より先に、芭蕉や蕉風俳諧から看取した「ありのまま」句作法ともいうべきものが子規の中に存し、それが後に、不折から教わった洋画の「写生」の方法と結び合わさる形で、「写生論」に収斂されていったのではないかという可能性を提示するものである。

さて、第二章において、子規は、「新題」を採択する際、それが新しい季語としての「意匠」を持ちうるかの見極めが必要だったのではないかと考察した。この、新しい季語としての「意匠」そのものや、「意匠」の有無を見極めて「新題」を厳選する姿勢は、子規の二人の高弟・河東碧梧桐と高浜虚子に、それぞれ受け継がれてゆく。

碧梧桐は、子規から新聞『日本』の俳句欄の選者を受け継ぎ、他方虚子は、子規から俳誌『ホトトギス』の主宰を受け継いだ。

第五章で確認したように、俳句に「紀元節」の異称である「梅花節」という語を用いた最も早い例は、碧梧桐の句であると見られる。俳句の師である子規は、俳句の中で、「紀元節」に梅を取り合わせたり、梅を「紀元節」の象徴のように扱ったりしていた。この姿勢を、碧梧桐は受け継ぎ、最終的には、新しい季語としての「意匠」を持つ語として、「梅花節」を句の中に読み込むに至ったものと推測される。

虚子については、歳時記や季寄せの編纂の際に、「季題」を網羅するのではなく、むしろ厳選するという姿勢

を打ち出し、それを自らの歳時記や季寄せの特色の一つとした（3）。さらに、第六章、第七章で確認したように、「季題」を時局に合わせて選び直してもいる。

以上のように、子規なき後も、子規の「新題」採否に対する態度は、碧梧桐や虚子にも影響を与え続けたと考えられる。

注

序章　注

（1）平山果・宮内貫一編、明治九年一〇月、東京中村熊次郎刊。本文は『明治文化全集　文明開化篇』によって確認した。

（2）大久保忠保編・出版、明治一一年一一月

（3）佐々木弘綱編、明治一三年五月、東京山中市兵衛刊。「明治開化和歌集（抄）」（『和歌　俳句　歌謡　音曲集』〈新日本古典文学大系　明治編〉）に抄出が載る。

（4）飴山実・清崎敏郎他『季題入門』（一九七八年、有斐閣）。なお清崎氏は論考中「季語」ではなく「季題」という言葉を使用しているが、季を持つ語という意味合いで用いていると判断し、本章で要約して引用した箇所では便宜上「季語」に統一した。

（5）『俳諧開化集』という名称の書物には、西谷富水編『俳諧開化集』（明治一四年五月、西谷富水刊）と、五味吉次郎他編『俳諧開化集』（明治一五年一二月、長野小沢半工舎外一軒）の二作品存することが確認されているが、本章では前者を指して『俳諧開化集』と呼ぶこととする。以下『俳諧開化集』の本文はすべて、「俳諧開化集」（前掲注6『和歌　俳句　歌謡　音曲集』）による。

（6）越後敬子「明治期旧派類題句集概観」（国文学研究資料館編『明治開化期と文学』平成一〇年、臨川書店）ほか

（7）青木亮人「菊の詠みどころ―明治期俳諧宗匠と正岡子規達の作品から―」（『アートリサーチ』一〇号、平成二二年三月）ほか

（8）田部知季「子規俳論の挫折―明治二十九年前後における俳論の流行をふまえて―」（早稲田大学国文学会編『国文学研究』一七四号、二〇一四年一〇月）ほか

（9）筑紫磐井『伝統の探求〈題詠文学論〉――俳句で季語はなぜ必要か』（平成二四年一〇月、ウェップ）

（10）柴田奈美『正岡子規と俳句分類』平成一三年三月、思文閣出版

第一章　注

（1）平山果・宮内貫一編、明治九年一〇月、東京中村熊次郎刊。本文は『明治文化全集　文明開化篇』によって確認した。

（2）大久保忠保編・出版、明治一一年一一月

（3）佐々木弘綱編、明治一三年五月、東京山中市兵衛刊。「明治開化和歌集（抄）」（『和歌　俳句　歌謡　音曲集』〈新日本古典文学大系　明治編〉）に抄出が載る。

（4）明治中期以前、「季語」という言葉は使われていなかった。季を持つ語には「季の題」、「季の詞」などの呼称があったが、本稿では原則として「季語」で統一した。また、引用句中の季語を特定するには、現代の感覚でこれに当たったが、その際、曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注『増補　俳諧歳時記栞草』（平成一二年年一〇月、岩波書店）、『図説俳句大歳時記』（昭和三九―四〇年、角川書店）、櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」（前掲注３『和歌　俳句　歌謡　音曲集』）を参照した。

（5）近世後期の類題発句集の出版状況については、東聖子『蕉風俳諧における〈季語・季題〉の研究』（平成五年二月、明治書院）に詳細な調査がある。

（6）蝶夢編『類題発句集』（安永三年）、同編『新類題発句集』（寛政五年）ともに、本文は尾崎紅葉校訂『俳諧類題句集』（〈俳諧文庫〉明治三四年三月、博文館）にて確認した。

（7）『俳諧開化集』という名称の書物には、西谷富水編『俳諧開化集』（明治一四年五月、西谷富水刊）と、五味吉次郎他編『俳諧開化集』（明治一五年一二月、長野小沢半工舎外一軒）の二作品存することが確認されているが、本章では前者を指して『俳諧開化集』と呼ぶこととする。以下『俳諧開化集』の本文はすべて、前掲注４「俳諧開化集」による。

（8）前掲注６『類題発句集』・『新類題発句集』の場合、ともに「雑之部」には「恋」「羈旅」「送別」「留別」

「名所」「懐旧」「述懐」「哀傷」「無常（※『新類題発句集』のみ）」「贈答」「画賛」「詩歌」「釈教」「神祇」「祝」を大題として立てており、大題の立て方が古典的で和歌集の部立ての立て方に準じていて、新しい事物を積極的に取り込もうとする姿勢は看取しがたい。

（9）越後敬子「明治期旧派類題句集概観」（国文学研究資料館編『明治開化期と文学』、平成一〇年、臨川書店）

（10）前掲注3「明治開化和歌集（抄）」によると、明治期の文明開化を題に組み入れた、いわゆる「新題」は、恋末尾の「寄華族恋」以下二一首と、雑の後半に「新題」と明記してまとめられた一九一首が確認できる。

（11）「発句の部」という呼称は、作中では使用されていない。しかし、本章では便宜上、作中の発句分野とそれ以外（俳諧（連句）分野、俳文分野）を区別する必要があるため、前掲注4「俳諧開化集」の解題に従って、発句のみを集めた部分を「発句の部」と呼ぶ。

（12）越後敬子は『俳諧開化集』を、文明開化を扱った俳句集の初めと位置づけている（「『俳諧開化集』―教林盟社と改暦」（前掲注3『和歌　俳句　歌謡　音曲集』）。

（13）前掲注9「明治期旧派類題句集概観」に、小築庵春湖・三森幹雄選『古今俳諧明治五百題』（明治一二年九月）の「開化の部」全部の翻刻が載る。同部は「皇国々体」「皇政一新」「敬神」「愛国」「天理」「人道」「皇上奉戴」「権利義務」「国法民法」「不可不学」「不可不教」「租税賦役」「制可随時」「万国交際」「富国強兵」「瓦斯燈」「馬車」「博覧会」「人力車」「読新聞」「鉄道」の二一題二三句で構成されている。

（14）『俳諧開化集』「発句の部」の、一部の題について、越後敬子は、『俳諧開化集』の編纂が教林盟社を中心に行われたことと関連付けて、「これらは、明治政府の政策に則った、文明開化の時代ならではの題なのである」（前掲注12「『俳諧開化集』―教林盟社と改暦」）と述べ、背景に国民教化政策があったとしている。

(15) 四睡庵壺公編『ねぶりのひま』（明治七年）の本文は、村山古郷「太陽暦と季題の関係―四睡庵壺公著『ねぶりのひま』について」（『俳句』二九巻一三号、昭和五五年一一月、角川書店）の翻刻によった。なお、同書は類題句集であるが、新暦対応の俳書の初めとされていて、明治俳諧史上重要な位置を占めていると同時に、一部に季語の集成を載せており、「季寄せ」の性質も持ち合わせている。

(16) 「一月」「一月一日」「三十一日」に対して、「新行事」という表現は不適当にも思われるが、それぞれ「一月」は旧暦の「正月」に対する新暦での呼称、「一月一日」は旧暦の「元日」に対する新暦での呼称、「三十一日」は「大晦日」を指す新暦ならではの表現で、それぞれ行事と同様、日が定まっていることであるので、本稿では広く「新行事」に含めた。また「天長節」などの一部の行事は、正確には明治に入って復興された行事であるが、これも「新行事」に含めた。

(17) 通し番号と四角囲み、傍線は引用者によるもので、季語に傍線を付し、題にあたる部分を四角囲みにした。また引用句の解釈には、前掲注４「俳諧開化集」を適宜参照した。以下、『俳諧開化集』からの引用句すべてについて同様である。

(18) 『日本国語大辞典』第二版第七巻、平成一三年七月、小学館

(19) 河竹黙阿弥「朝日影三組杯觴（憲法発布）」（『黙阿弥全集』二〇巻、大正一五年四月、春陽堂）

(20) 飴山実・清崎敏郎他『季題入門』（昭和五三年、有斐閣）。なお清崎氏は論考中「季語」ではなく「季題」という言葉を使用しているが、季を持つ語という意味合いで用いていると判断し、要約して引用した箇所では便宜上「季語」に統一した。

(21) 『おくのほそ道』の本文は「おくのほそ道」（『松尾芭蕉集②』〈新編日本古典文学全集〉）より引用した。

(22) 芭蕉句の解釈には雲英末雄・佐藤勝明訳注『芭蕉全句集』（平成二二年一一月、角川学芸出版）を参照した。

(23) 蕪村句の解釈には「一茶集」(『蕪村集　一茶集』〈日本古典文学大系〉)、および『蕪村・一茶』(〈鑑賞日本古典文学〉)を参照した。

(24) 藤田真一「〈物〉を詠むということ」(片山由美子・谷地快一他編『俳句教養講座第一巻　俳句を作る方法・読む方法』平成二一年一一月、角川学芸出版)

(25) 森無黄「季題の用法」(『卯杖』一巻六号、明治三六年六月)なお無黄は論考中「季語」ではなく「季題」という言葉を使用しているが、季を持つ語という意味合いで用いていると判断し、要約して引用した箇所では便宜上「季語」に統一した。

(26) 筑紫磐井「「季題」「季語」の発生について」(『俳句文学館紀要』第七号、平成四年九月、社団法人俳人協会)

(27) 前掲注4「俳諧開化集」冒頭の解題参照

(28) 「手の内や涼ミ河原の稲光り」には、今日の感覚では「涼み」「稲光」の二つの季語が見られ、それぞれ夏、秋の季感をもつ。しかし、河原で涼んでいるとき、マッチを摺ったことで、手の内側に稲光のような炎が上がったという句意と、「稲光」が前掲注4『俳諧歳時記栞草』では雑の扱いであることを鑑みて、一句の季は夏であると判断した。

(29) ①は前掲注15参照。②③④⑥⑦⑧⑨は国立国会図書館蔵本のマイクロの紙焼き、⑤⑩は架蔵本を用いた。なお、①は類題句集であるが、前掲注15に挙げた理由から、調査対象に含めた。

(30) 国立国会図書館蔵本のマイクロの紙焼きにて確認した。

第二章　注

（1）青木亮人「菊の詠みどころ―明治期俳諧宗匠と正岡子規達の作品から―」（『アートリサーチ』一〇号、平成二二年三月）

（2）明治中期以前、「季語」という言葉は使われず、「季の題」、「季の詞」などの呼称が用いられたが、本章では便宜上、原則として「季語」で統一した。また、引用句中の季語を特定する際には、曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注『増補　俳諧歳時記栞草』（平成一二年一〇月、岩波書店）、『図説俳句大歳時記』（昭和三九―四〇年、角川書店）、および櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」（『和歌　俳句　歌謡　音曲集』〈新日本古典文学大系明治編〉）の注釈を参照した。

（3）上原三川他編、正岡子規閲、明治三一年三月、民友社

（4）柴田奈美『正岡子規と俳句分類』平成一三年三月、思文閣出版

（5）『子規全集』一九巻、書簡番号五三七

（6）『子規全集』一六巻解題や、宮坂静生『正岡子規と上原三川』（昭和五九年六月、明治書院）に詳しい。

（7）『新俳句』が旧暦準拠である背景については、他の類題句集などとも比較しながら別稿を期して考察したい。

（8）『新俳句』の「新題」が冬季に集中していることは、松岡満夫の指摘がある（松岡満夫「「新俳句」の成立と特色」（『國語と國文学』二九巻八号、昭和二七年八月、至文堂））

（9）正岡子規「俳諧大要」（「日本新聞」明治二八年一〇月二七日、引用『子規全集』四巻）

（10）西谷富水編『俳諧開化集』西谷富水刊。以下同書の引用はすべて前掲注2櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」に拠り、句の引用箇所では同書の解釈を参照した。なお、『俳諧開化集』という名称の書物には、五味吉次郎他編『俳諧開化集』（明治一五年一二月、長野小沢半工舎外一軒）の存在も確認されているが、本章

では前者を指す。

（11）「発句の部」という呼称は、『俳諧開化集』中では使用されないが、本章では便宜上前掲注２櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」の解題に従い、『俳諧開化集』下巻の発句のみを集めた部分を「発句の部」と呼ぶ。

（12）四睡庵壺公編『ねぶりのひま』明治七年。以下同書の引用はすべて村山古郷「太陽暦と季題の関係―四睡庵壺公著『ねぶりのひま』について」（『俳句』二九巻一三号、昭和五五年一一月、角川書店）に拠る。

（13）子規「再び歌よみに与ふる書」（「日本付録週報」明治三一年二月一四日、引用『子規全集』七巻）

（14）伊藤博校注『万葉集』下巻、昭和六〇年四月、角川書店

（15）「難波」（『謡曲百番』〈新日本古典文学大系〉）

（16）三森幹雄編『俳諧新選明治六百題』明治一二年一月、高木和助出版。以下同書の引用はすべて本書に拠る。

（17）季語としての「事始」の解説は歳時記によって説が分かれる部分もあるが、例えば、『図説俳句大歳時記　春』（昭和三九年四月、角川書店）には「二月八日。事とは、祭・祭事の意で、東日本では二月八日と十二月八日とを対照せしめて、いずれも事の日とし、一方を事納、他方を事始と称する。（略）行事としては、両度とも高い竿を屋外に立ててその先に笊の類を付けて魔除けとし、お事汁を食べるなど、ほとんど変わりがない」（鈴木棠三）とあり、軍事および年頭に関する記述は見えない。

（18）前掲注２櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」参照。第一章でも取り上げた。

（19）松山市立子規記念博物館編『季語別　子規俳句集』（昭和五九年三月、松山市立子規記念博物館友の会）を参照した。子規には他に前書を「天長節六句」とし「菊」を詠んだ一連の作（『寒山落木』巻三）などもあるが、本章の引用句からのみでも、子規の「新行事」の詠み方の傾向はある程度看取できると考えた。

（20）前掲注６宮坂静生『正岡子規と上原三川』

（21）高浜虚子・河東碧梧桐選『春夏秋冬』「秋之部」明治三五年九月、俳書堂

(22) 「今日の吉き日は大君の、うまれたまひし吉き日なり」で始まる黒川真頼作詞、奥好義作曲の唱歌「天長節」(『祝日大祭日歌詞並楽譜』明治二六年八月、宮田六左衛門)

(23) 寒川鼠骨著『春夏子規俳句評釋』明治四〇年四月、大學堂(引用越後敬子編『子規研究資料集成〈作品評釈編一〉』平成二四年二月、クレス出版)

(24) 『新俳句』に次ぐ日本派の類題句集『春夏秋冬』は「春之部」(明治三四年五月、ほとゝぎす発行所)のみ子規選、「夏之部」(明治三五年五月、俳書堂 文淵堂)、「秋之部」(明治三五年九月、俳書堂)、「冬之部」(明治三六年一月、俳書堂)は虚子・碧梧桐選で刊行された。なお、『春夏秋冬』における「新行事」の立項は、「秋之部」に「神嘗祭」「天長節」、「冬之部」に「新嘗祭」が見られるのみである。

(25) 前掲注8松岡満夫「「新俳句」の成立と特色」

(26) 「俳諧大要」(「日本新聞」明治二八年、引用『子規全集』四巻)

(27) 越後敬子は、「耶蘇祭」の題をもつ明治期旧派類題句集で明治三一年以前に刊行のものは、①其角堂永機・雪中庵梅年編『発句五百題』明治一五年一一月、東京 高田重助、②其角堂永機・雪中庵梅年編『俳諧絵入八百題』明治一七年四月、東京 松崎半蔵、の二点と指摘しており(「明治期旧派類題句集概観」(国文学研究資料館編『明治開化期と文学』平成一〇年、臨川書店))、実際に永機と完鷗による計二句(のべ三句)の掲載が確認される。ただし、いずれの句も「クリスマス」ではなく「耶蘇祭」と詠んでいる点には注意が必要であろう。

(28) 青木亮人「「窓の灯、雪を溶かさず―正岡子規『新俳句』と「月並句」の差異について―」(『同志社国文学』七二号、平成二二年三月)

第三章　注

（1）正岡子規「俳諧大要」（「日本」明治二八年一二月、引用『子規全集』四巻）

（2）西谷富水編、大久保漣々校『俳諧開化集』明治一四年五月刻、東京芙蓉庵蔵版。櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」（『和歌　俳句　歌謡　音曲集』〈新日本古典文学大系　明治編４〉平成一五年三月、岩波書店）に翻刻および注があり、以下『俳諧開化集』本文の引用は同書による。注も適宜参照した。なお、『俳諧開化集』については、同書の他、越後敬子「『俳諧開化集』翻刻と解題」（『實踐國文学』五二号、平成九年一〇月、實踐國文学会）に詳しい。

（3）越後敬子「明治期旧派類題句集概観」（国文学研究資料館編『明治開化期と文学』、平成一〇年三月、臨川書店）

（4）前掲注２「俳諧開化集」解題

（5）「一月」から「秋季祭」までの「新行事」題については、第二章参照

（6）加藤楸邨他監修、尾形仂他編『俳文学大辞典』普及版、平成二〇年一月、角川学芸出版

（7）前掲注６『俳文学大辞典』普及版

（8）前掲注６『俳文学大辞典』普及版

（9）前掲注２「俳諧開化集」解題

（10）『子規全集』一九巻、書簡番号537

（11）正岡子規『増補再版獺祭書屋俳話』（明治二八年九月、日本新聞社。「新題目」初出新聞「日本」明治二五・七・三一）

（12）正岡子規「俳諧大要」（新聞「日本」明治二八年一〇月二七日）

（13）宮坂静生『正岡子規と上原三川』昭和五九年六月、明治書院

(14)『新俳句』は、例えば春之部であれば、その中がさらに「春上之部」、「春中之部」、「春下之部」、「春雑之部」、「春詞書之部」と五部に大別されており、「春雑之部」の末尾には「春雑」という項目が設けられ、特定の題に分別することができない句が収められている。ここで「「新題」として収められたと思しき」題とした「クリスマス」以下はすべて、「冬雑之部」の中の「冬雑」項に続く形で立項されている。「春雑之部」、「夏雑之部」、「秋雑之部」はそれぞれ「春雑」、「夏雑」、「秋雑」の項で締め括られており、この点で「冬雑之部」は異質である。ここに、子規がこれらの題を季を持つ「新題」として『新俳句』に収録しようとした意図が見て取れるように思われる。

(15) 正岡子規閲、上原三川・直野碧玲瓏共編『新俳句』明治三一年三月、民友社

(16) 松岡満夫「「新俳句」の成立と特色」(『國語と國文学』二九巻八号、昭和二七年八月、至文堂)

(17) 正岡子規「俳諧大要」(「日本」明治二八年一一月一三日)

(18) 宮本三郎校注「去来抄」(宮本三郎・井本農一他校注『校本芭蕉全集』七巻、平成元年七月、富士見書房)

(19) 井本農一校注「三冊子」(前掲注18『校本芭蕉全集』七巻)

(20) 松尾芭蕉著、雲英末雄他訳注『芭蕉全句集　現代語訳付き』平成二二年一一月、角川学芸出版

(21) 曲亭馬琴編、藍亭青藍補『増補俳諧歳時記栞草』(堀切実校注『増補俳諧歳時記栞草(下)』平成一二年・一〇・一六、岩波書店)に、冬之部、十一月の題として掲載

(22) ㉞句の「鍋焼饂飩」は、今日では冬季の季語として広く認知されている。しかし、子規のこの句が詠まれた当時、「鍋焼饂飩」が季語として認知されていたかは不詳である。「鍋焼饂飩」の前身となった「鍋焼」は、『増補俳諧歳時記栞草』にも見える冬季の題であるが、これをヒントに後年作られたとされる「鍋焼饂飩」はここには見えない。

(23) 河東碧梧桐『新俳句研究談』明治四〇年一〇月、大學館。初出新聞『日本』明治三八年七月一〇日)

第四章　注

（1）『俳諧大要』第六　修学第二期に、「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪えず称して月並調といふ」（初出新聞『日本』明治二八年一二月二日）とある。

（2）『俳句問答』初出新聞『日本』明治二九年七月二七日

（3）『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「雄壮なる句」に、「元緑以後俳家の輩出して俳運の隆盛を極めたるは明和天明の間なりとす。白雄は寂栞を著して盛んに蕉風を唱道せりと雖も其神髄を以て幽玄の二字に帰し終に豪壮雄健なる者を説かず。其作る所を見るも句々繊巧を弄し婉曲を主とするのみにして芭蕉の堂に上る事を得ず。蓼太は敏才と猾智とを以て一時天下の耳目を聳動せりと雖も固より其眼孔は針尖の如く小なりき。蕪村、暁台、蘭更の三豪傑は古来の蕉風外に出入して各一派を成せり。此三人の独得なる処は芭蕉及び其門弟等が当時夢想にも知り得ざりし所にして俳諧史上特筆大書すべき価値を有す。されば其俳句中には雄健の筆を以て豪壮の景を為したる者に匱しからず。然れども彼等の壮は芭焦の壮に及ばず彼等の大は芭蕉の大に及ばざりき。文政以後蒼軋、梅室、鳳朗の如き群蛙は自ら好んで三尺の井中に棲息したる者固より与に大海を談ずべからず。是に於てか芭蕉は揚々として俳諧壇上を濶歩せり。吁嘻芭蕉以前已に芭蕉無く芭蕉以後復芭蕉無きなり」（初出新聞『日本』明治二六年一二月一三日）とある。

（4）『俳文学大辞典』「俳諧続七部集」項によれば、同書は上巻に『深川』『卯辰集』『韻塞』『となみ山』、下巻に『有磯海』『芭蕉庵小文庫』『千鳥掛』を収める。

（5）『俳文学大辞典』「発句三傑集」項。山本和明によれば、『発句三傑集』は、「蘭更七一〇句余、暁台七五〇句余、蓼太(りようた)五三〇句余、計一九九〇句余の発句を四季別・月順で類題ごとに整理して収載」したものである。

（6）『俳文学大辞典』田中道雄「去来発句集」項によれば、同書の下巻に当たる書が『丈草発句集』である。

（7）『俳文学大辞典』尾形仂「蕪村句集」項にて、同氏は「正岡子規は本書を通して蕪村を写生の先達と仰ぎ、近代俳句の路線を決定した」と評している。

（8）『俳文学大辞典』加藤定彦「故人五百題」項は、「天明七（一七八七）・五、松露庵蔵版。（略）烏明が先師鳥酔に陪従していたころから書き留めた故人の句を、亀足・瓜州の両名が校合、四季別五百題（実際は六二四題）に分類・整理し上梓したもの。蝶夢編『類題発句集』と重なる句が多く、同書を参照しつつ師友の遺句を増補して成ったものであろう。（略）初版奥付には「門人之外不許鬻事」とあって、一門内部のみの刊行物であったが、軽便なために好評を博し、書肆に版木が譲られてから市販され、無刊記版のほかに桑村半蔵ほかの求版、天保一〇年（一八三九）の英文蔵による再版、同一五年の英大助による横本一冊の重版、文久三年（一八六三）の英屋文蔵による三刻など広く流布した」とする。

（9）子規の蕪村研究については、本章では詳しく扱わないが、佐藤勝明ほか『蕪村句集講義』（内藤鳴雪ほか著、佐藤勝明校注『蕪村句集講義３』、平成二三年二月、平凡社）などに詳しい。

（10）佐藤勝明は、前掲注９『蕪村句集講義』の「解説」にて、「（稿者注：点取り俳諧の横行によって、）芭蕉の俳諧とは遠く離れた姿ながら、それでも芭蕉は彼らの守護神であり、月次流宗匠の存在基盤なのであった。この矛盾した事態にいち早く気づき、旧派（子規や尾崎紅葉らを新派と呼ぶのに対して、幕末以来の俳諧を行う人々に与えられた呼称）を徹底攻撃したところに、子規らの俳諧革新は推進されていく。その際に子規がとった方法は、「芭蕉へ帰れ」ではなく、旧派の宗匠が盲目的にあがめる（同時に利用する）芭蕉を冷静にとらえ直すと同時に、本格的な評価対象からはずれがちの蕪村に光を当て、その真価を世に問うことであった」とする。また、井上泰至は「子規からすれば、旧派の崇拝する芭蕉への批判を過剰に行い、代わって蕪村の句の価値を発見・宣伝することは、（引用者注：子規の俳句革新において）重要な戦略であった」（井上泰至『子規の内なる江戸　俳句革新というドラマ』平成二三年七月、角川学芸出版）としている。

（11）復本一郎『俳句から見た俳諧―子規にとって芭蕉とは何か―』平成一一年九月、お茶の水書房
（12）『獺祭書屋俳話増補』より「芭蕉雑談」内「補遺」項。初出新聞『日本』明治二七年一月二七日

第五章　注

（1）『図説俳句大歳時記　春』昭和三九年四月、角川書店。なお、鈴木棠三『日本年中行事辞典』（昭和五二年一二月、角川書店）の「紀元節」項は、『図説俳句大歳時記　春』の引用部をほぼ原文のまま引用し、これに若干筆を加えている。加筆部分は、『図説俳句大歳時記　春』「紀元節」本文末尾の後に、「しかしその後、昭和四十一年六月に建国記念の日として国民の祝日に加えられた」。

（2）『日本国語大辞典』第二版の「久米舞」項に、「この舞は、平安時代になってからは、もっぱら大嘗祭の豊明節会に用いられることになったが、奈良時代には大嘗祭に限らず宮中儀式に用いられた。室町時代にいったん断絶し、江戸末の文化一五年（一八一八）復興。明治以降は大嘗祭と紀元節に演じられてきた」とある。

（3）神武即位前紀戊午年一日・二日条（坂本太郎他校注『日本書記　上』〈日本古典文学大系〉一九六七年三月、岩波書店）に、次のようにある。

秋八月の甲午の朔乙未に、天皇、兄猾及び弟猾を徴さしむ。猾、此をば宇介志と云ふ。是の両の人は、菟田県の魁帥なり。魁帥、此をば比鄧誤廼伽瀰と云ふ。時に兄猾来ず。弟猾即ち詣至り。因りて軍門を拝みて、告して曰さく、「臣が兄兄猾の逆をする状は、天孫到りまさむとすと聞りて、即ち兵を起して襲はむとす。皇師の威を望見るに、敢へて敵るまじきことを懼ぢて、乃ち潜に其の兵を伏して、権に新宮を作りて、殿の内に機を施きて、饗らむと請すに因りて作難らむとす。願はくは、此の詐を知しめして、善く備へたまへ」とまうす。天皇、即ち道臣命を遣して、其の逆ふる状を察めたまふ。時に道臣命、審に、賊害之心有ることを知りて、大きに怒りて誥び嘖ひて謂はく、「虜、爾が造れる屋に、爾自ら居よ」といふ。爾、此をば飫例と云ふ。因りて、剣案り弓彎ひて、逼めて催し入れしむ。兄猾、罪を天に獲たれば、事辞

る所無し。乃ち自機を蹈みて壓はれ死ぬ。時に、其の屍を陳して斬る。流るる血、踝を没る。故、其の地を号けて、菟田の血原と曰ふ。已にして、弟猾大きに牛酒を設けて、皇師に労へ饗す。天皇、其の酒宍を以て、軍卒に班ち賜ふ。乃ち御謡して曰はく、謡、此をば宇哆預瀰と云ふ。

菟田の　高城に　鳴羂張る　我が待つや　鳴は障らず　いすくはし　鷹等障り　前妻が　肴乞はさば
立稜麦の　実の無けくを　幾多聶ゑね　後妻が　肴乞はさば　齋賢木　実の多けくを　幾多聶ゑね

是を来米歌と謂ふ。今、楽府に此の歌を奏ふときには、猶手量の大きさ小ささ、及び音声の巨さ細さ有り。此古の遺式なり。

（4）稿者の確認している範囲で、「梅花節」の俳句以外の用例の古い物は、明治三九年三月刊、松浦厚『大日本大漁業団』（帝国出版協会）の序と跋である。序の末尾に「明治卅九年丙午二月梅花節／東都　蓬莱園驂龍閣に於て／鸞洲　松浦　厚識」、跋の末尾に「明治丙午梅花節著者識」とある。松浦厚は漢詩人でもあり、漢詩では「梅花」と「節」に繋がる用例もしばしば見られることから、紀元節の異称としての「梅花節」という語の成立には、俳句よりむしろ漢詩深く関わっている可能性が示唆される。

（5）水原秋桜子他監修『講談社版　カラー図説日本大歳時記』（昭和五八年一一月、講談社）は「建国記念日」項に傍題として「紀元節」と「梅花節」を載せている。また、『角川俳句大歳時記　春』（二〇〇六年一二月、角川学芸出版）も「建国記念の日」項に「紀元節」「梅花節」を傍題・関連季語の扱いで載せ、解説に「梅の花の咲きそめる頃なので、紀元節が季語だった戦前には梅花節・梅佳節ともよばれ、明治のよき日を懐かしむ感慨が詠まれた」（山本洋子）とする。

（6）万延元（一八六〇）年―昭和七年（一九三二）。『俳文学大辞典』（平成二〇年、角川学芸出版）に、「秋声会に加わったが、のち離脱して雀会を興し、明治三四年八月、『半面』を創刊。日本派・秋声会に対して「新々派」と称し、主観的耽美的な句で俳句革新を目指した」とある。

(7)越後敬子「明治期旧派類題句集概観」(国文学研究資料館編『明治開化期と文学』一九九八年、臨川書店)

(8)Aには「一すちの御威稜仰くや紀元節」の形で入集。誤植と思われる。

(9)ここでの「新行事」には、明治に入って新たに制定された「紀元節」のような祝日の他に、明治に入って復興された「天長節」のような行事も含む。

(10)『俳諧開化集』下巻、明治一四年五月、西谷富水刊。引用は櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」(『和歌　俳句　歌謡　音曲集』〈新日本古典文学大系明治編〉)による。

(11)明治一三年五月、東京山中市兵衛刊。引用は「明治開化和歌集(抄)」(前掲注10『和歌　俳句　歌謡　音曲集』)による。

(12)子規の歌集『竹乃里歌』には、「日の本の国のはじめを思ひいでゝ其日忘れず梅咲きにけり」の形で収められる。

(13)青木亮人は、子規の言う「「月並・陳腐」は比較上の問題で、句の良し悪しは「類句」量で変化するのであり、単純に言えば「類句」の多い場合は「陳腐」、逆に「類句」が少なければ「新俳句」なのである」と指摘している(青木亮人「窓の灯、雪を溶かさず―正岡子規『新俳句』と「月並句」の差異について―」(『同志社国文学』七二号、平成二二年三月)。

第六章　注

（1）子規没後から虚子編『新歳時記』までの間に刊行された季寄せや歳時記については、西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み』（平成二一年一二月、本阿弥書店）に詳しい。

（2）本章では高浜虚子の用語に従い、「季語」ではなく「季題」と呼ぶ。

（3）本章では、歳時記の各季題項目の先頭にある題を、特に「立項「季題」」と呼んで、傍題として収録された「季題」と区別することとする。

（4）調査の底本は、後掲注８参照

（5）井出原太郎「虚子編『新歳時記』」より「『新歳時記』」〈清崎敏郎・川崎展宏編『虚子物語』〈有斐閣ブックス〉昭和五四年、有斐閣〉

（6）虚子編『新歳時記』改訂版（昭和一五年四月、三省堂）に、「訂正すべき二三の季題、並に熱帯の気候・動植物・人事等のうちで已に夏期に属するものとして諷詠し来つたものを増補し、例句も千余句は殖やしたことになる、それは主にホトトギス雑詠選集春の部に採録した句である。」とある。さらに、『新歳時記』増訂版（昭和二六年一〇月、三省堂）に、「季題其他に訂正すべきところがあらば訂正し度いとの話があつたので多少訂正した。曩きに加へた熱帯季題の類は省いた。又例句にホトトギス雑詠選集夏の部以下を（春の部も多少）加へた。」とある。

（7）虚子編『新歳時記』の改訂については、多数の先行研究が存するが、中でも特に、筑紫磐井「歳時記の百年　第八回虚子編『新歳時記』」（『俳壇』一七巻九号、平成一八年八月、本阿弥書店）、および同氏「虚子の季題論と季題」（『国文学　解釈と鑑賞』七四巻一一号、平成二一年一一月、至文堂）、および前掲注１西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み』に詳しい。

（8）調査の底本として、以下の四本を用いた。

初版：高浜虚子編『新歳時記』昭和九年一一月初版、昭和一四年三月四二版、三省堂
改訂版①：高浜虚子編『改訂　新歳時記』昭和九年一一月初版、昭和一九年七月改訂三二版、三省堂
改訂版②：高浜虚子編『改訂　新歳時記』（昭和一五年二月〈引用者注：ママ。正しくは四月〉初版、昭和二二年九月一四版、三省堂）
増訂版：高浜虚子編『新歳時記　増訂版』昭和九年一一月初版、昭和一五年四月改訂版、昭和二六年一〇月増訂初版、平成一四年一一月増訂六九刷、三省堂

（9）山本三生編『俳諧歳時記』（昭和八年初版、改造社）〈全五冊〉

（10）調査に用いた改造社『俳諧歳時記』戦前版の奥付は左の1から5のとおりである。編者は山本三生とある。五冊すべて、慶應義塾三田図書館蔵本。

1　改造社『俳諧歳時記』「春之部」（昭和八年一一月、改造社）
2　改造社『俳諧歳時記』「夏之部」（昭和八年六月）
3　改造社『俳諧歳時記』「秋之部」（昭和八年九月）
4　改造社『俳諧歳時記』「冬之部」（昭和八年一〇月）
5　改造社『俳諧歳時記』「新年之部」（昭和八年一二月）

（11）調査に用いた改造社『俳諧歳時記』戦後版の奥付は左の1から5のとおりである。

1　改造社『俳諧歳時記』「春之部」（平田貫一郎編、昭和二二年六月）
2　改造社『俳諧歳時記』「夏之部」（山本俊太編、昭和二二年六月）
3　改造社『俳諧歳時記』「秋之部」（平田貫一郎編、昭和二二年七月初刷発行・昭和二四年一一月四刷）
4　改造社『俳諧歳時記』「冬之部」（昭和二二年一一月初刷発行・昭和二四年一一月五刷）
5　改造社『俳諧歳時記』「新年之部」（山本俊太編昭和二三年三月）

（12）前掲注7参照

（13）調査に用いた改造社『俳諧歳時記』昭和二九年奥付本の奥付は左の1から3のとおりである。「夏の部」「新年の部」については今後の調査に俟ちたい。

1　改造社『俳諧歳時記』「春之部」（横関愛造編、昭和三〇年二月）

2　改造社『俳諧歳時記』「秋之部」（横関愛造編、昭和二九年一〇月）

3　改造社『俳諧歳時記』「冬之部」（横関愛造編、昭和二九年一一月）

（14）改造社『俳諧歳時記』の予約受付の目的で発表された内容見本中、「内容説明」の条に、「季題は、古来の歳時記の収載したるものを洩らさず集め、又現代の俳人間に季題として与ふべきものに至る迄網羅す」とある。

（15）『現代俳句大事典』（稲畑汀子ほか監修、山下一海ほか編、平成一七年、三省堂）「熱帯季題」は、「熱帯季題」を次のように解説している。

熱帯季題（ねったいきだい）　高浜虚子が提唱した一群の季題（季語）。虚子は一九三六（昭11）年、渡欧の旅に発ったが、その途次シンガポールを訪れ、親しく熱帯の気候・風物に触れて、一群の言葉を熱帯における季題とすることを提唱した。虚子自身もその直後、コロンボで〈古倫母に黄金色なる鳶が居た〉と詠じた。その後、四〇年改訂の『新歳時記』夏の部に合計三五の熱帯季題を掲載、その内容は「熱帯」「赤道」等の地名。「スコール」「貿易風」のような気象。「象」「水牛」といった動物。「パイナップル」「椰子」の如き植物であった。これら熱帯の風物をすべて夏の季題とするということは、あくまでも季節感の中心を日本のそれに置くというもので、世界各地それぞれの季節感を俳句に持ち込むことによる混乱を避けるという方針であった。なお太平洋戦争後日本の版図が狭まったのに連関して、五一年の『新歳時記』以降熱帯季題は削除された。［本井　英］

(16) 大岡信ほか編『大歳時記』第二巻〔全四冊〕（一九八九年、集英社）、および、水原秋桜子・加藤楸邨ほか監修『カラー図説日本大歳時記　座右版』（昭和五八年、講談社）

(17) 前掲注1参照

(18) 小学館／韓国・金星出版社共同編集『朝鮮語辞典』（一九九三年、小学館）「박가지」項には、「名1パガジ，ひさご．▼박（ふくべ）を二つに割り中身をえぐって乾燥させ容器として用いる．プラスチックで形どったものもある」とある。また、大阪外国語大学朝鮮語研究室編（主幹塚本勲、北嶋静江）『朝鮮語大辞典』上巻（一九八六年、角川書店）には、「パガヂ　名①（박（ふくべ）を真二つに割り中身をくり抜いて干して作った容器）パガヂ、パガヂの器（그릇）〈中略〉①＊박가지は朝鮮民族の生活と密接なかかわりがある。普通、「ふくべ」で作った丸いもので、米をといだり、水を汲んだり日常広く用いる。「ひょうたん」で作ったものは표주박という。最近はプラスチック製のものが多く、それも박가지というが、그릇（bowl－ボール）ということもある。」。また、朝朝辞典の民衆書林編集局編『エッセンス国語辞典〈特装版〉』（一九七四年初版、二〇〇一年第五版、民衆書林）にはの「박가지」項には、「名1水を汲んだり物を入れる器」とあり、李熙昇編『ハングル大辞典 THE NEW KOREAN DICTIONARY』（一九八三年、民衆書林）の「박가지」項には、「名水を汲んだり物を入れる器。ふくべを二つに割り、種などをえぐり出して茹でて干したものと、木をえぐって作ったもの、またはプラスチックで作ったものがある。瓢壺」（訳：稿者）とある。

(19) 小学館『日本国語大辞典』第二版第一一巻の「へちま」項に、「①ウリ科のつる性一年草。〈中略〉②へチマの実を乾燥させた繊維でつくった垢すり。へちまの皮」とある。

(20) 小学館／韓国・金星出版社共同編集『朝鮮語辞典』（一九九三年、小学館）の「늑대」項に、「名〔動〕チョウセンオオカミ（朝鮮狼），ヌクテー．」とある。

(21) 前掲注15参照

(22) 本井英『虚子「渡仏日記」紀行』平成一二年、角川書店

(23) 初出昭和一一年九月『ホトヽギス』、引用高浜虚子著、高浜年尾・福田清人ほか編『定本　高濱虚子全集　第十一巻　俳論・俳話集㈡』昭和四九年、毎日新聞社

(24) 三については、虚子編『新歳時記』凡例に、左のようにある。

二、題下に三の記号に挿入したものは其月に限らず、同季の三月に亙るものといふことを指示したのである。又三月には亙らず、二月位に亙るものをも其中に籠めた。要するに此題は其月に限つたものでないといふことを明らかにしたのである。又、花や実等の中には此他にも事実上は二月以上に亙るものがあるであらう。(『新歳時記』初版、昭和九年一一月、三省堂)

(25) 虚子編『新歳時記』改訂版に収録された「熱帯季題」は左の三五項である。改訂版の底本においては、このうちのいずれの季題項にも三が見られなかった。「熱帯」、「赤道」、「馬来正月」、「朝陰」、「木陰」、「オアシス」、「貿易風」、「スコール」、「赤道祭」、「嫁選」、「象」、「水牛」、「鰐」、「鱶」、「極楽鳥」、「熱帯魚」、「火焔樹」、「無憂樹」、「鳳凰樹」、「宝冠木」、「仏桑花」、「ドリアン」、「マンゴスチン」、「マンゴー」、「パパヤ」、「龍眼」、「バナナ」、「パイナップル」、「椰子」、「檳榔樹」、「護謨樹」、「榕樹」、「クロトン」、「月下美人」、「ブーゲンベリア」

(26) 高等小学校用国語科国定教科書『高等小学読本』(明治三七年―明治四四年使用)巻六、第一一課「熱帯植物」

第七章　注

（1）虚子編『季寄せ』（昭和一五年六月、三省堂）序

（2）虚子編『新歳時記　増訂版』「改版について」「再改版について」

（3）現行の虚子編『季寄せ』は、後掲注（4）のとおり、高浜年尾による改訂の手が加えられたものである。

（4）虚子編、高浜年尾改訂『季寄せ　改訂版』（平成一八年一一月刊本）の奥付には、「一九四〇年（昭和十五年）六月二十五日初版発行／一九六四年（昭和三十九年）三月一日改訂初版発行」とあり、虚子生前の改訂には触れていない。また、同本の「改訂について」には「昭和十五年初版発行以来、ここに季寄せ一部の改訂を企画した」とあり、こちらも虚子生前の改訂に触れていない。

（5）『ホトトギス』四二巻七号（昭和一四年四月）「虚子消息」に、「同堂〈引用者注：三省堂〉から新歳時記を基とした「季寄せ」を編むことを依頼されましたが、目下進行中である」とある。

（6）三省堂百年記念事業委員会編『三省堂の百年』（昭和五七年四月、三省堂）第五章中「創業六〇年」

（7）虚子編『新歳時記』昭和一四年三月刊本の奥付に、「昭和十四年三月十五日四二版発行」とある。

（8）前掲、注（1）参照

（9）調査に使用した虚子編『季寄せ』の底本は、左の1から4の通りである。なお、校合本として、5以下の各本も用いた。

1昭和一五年六月刊虚子編『季寄せ』三省堂

2昭和二二年四月刊虚子編『季寄せ』三省堂

3昭和一五年六月初版、昭和二六年九月五版虚子編『季寄せ』三省堂（虚子記念文学館蔵）

4昭和一五年六月初版、昭和三九年三月改訂初版、平成一八年一一月改訂五五刷虚子編・高浜年尾改訂

編『季寄せ　改訂版』三省堂

5 昭和一五年六月初版、昭和一七年九月刊行虚子編『季寄せ』三省堂（伊予俳諧文庫蔵、底本1と同版種）

6 昭和二二年四月初版、昭和二四年五月三版虚子編『季寄せ』三省堂（底本2と同版種）

7 昭和一五年六月初版、昭和二七年八月六版虚子編『季寄せ』三省堂（個人蔵、底本3と同版種）

8 昭和一五年六月初版、昭和三一年一一月一一版虚子編『季寄せ』三省堂（底本3と同版種）

9 昭和一五年六月初版、昭和三五年一二月一七版虚子編『季寄せ』三省堂（伊予俳諧文庫蔵、底本3と同版種）

（10）調査に使用した虚子編『新歳時記』各版の底本は、左の通りである。

1 初版：高浜虚子編『新歳時記』昭和九年一一月初版、三省堂

2 改訂版：高浜虚子編『改訂　新歳時記』昭和九年一一月初版・昭和一九年七月改訂三二版、三省堂

3 改訂版戦後修訂版：高浜虚子編『改訂　新歳時記』昭和一五年二月〈引用者注：ママ。正しくは四月〉初版・昭和二二年九月一四版、三省堂

4 増訂版：高浜虚子編『新歳時記　増訂版』昭和九年一一月初版・昭和一五年四月改訂版・昭和二六年一〇月増訂初版・平成一四年一一月増訂六九刷、三省堂

（11）加藤楸邨ほか監修、尾形仂ほか編『俳文学大辞典　普及版』（平成二〇年一月、角川学芸出版）「季寄」項

（12）『新歳時記』の大きさが縦一〇・二糎×横一五・五糎、厚さ二・三糎であるのに対し、『季寄せ』初版は縦九・四糎×横十三・五糎、厚さ〇・八糎で小型化が図られている。

（13）前掲注1参照

(14) 前掲注9参照。『季寄せ』の奥付は本の裏表紙に糊付けされているため、貼りかえられている恐れがあることには注意しなければならないが、見る限り、奥付部分が貼り直されている様子は看取されなかったので、この奥付に従って考察を進めた。

(15) 西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み』(平成二一年一二月、本阿弥書店)

(16) 「ホトトギス」第四三巻第一号(昭和一四年一〇月)「各地座談会」中「京城」での発言に、「固有の季題といふと〈中略〉此頃では外寝かな。尤もこれは満州支那あたりでもやるらしいが。」「外寝と云ふのは実に大陸的」「朝鮮の中流以下の家は温突の焚口と炊事の方の焚口とが一緒になつてゐて、飯を焚くと常に温突が暖くなつて、夏はとても家の中に居られないんで、勢ひ外寝といふことになるんでせうな。」「結局朝鮮の冬は寒い。従つて家を建てるにしても冬ばかり考へて居る。家の構造は温突にして、部屋も窓も可及的に小さくするし、夏はとても家の内に寝て居られない。」等が見られ、当時の外地俳人が、「外寝」に、外地における固有性を見出していたことが窺える。

(17) 虚子編『季寄せ』、『新歳時記』各版の、「季題」「甘蔗刈」項の「季題」解説文を左に引用する。

A『新歳時記』改訂版戦後修訂版(『新歳時記』改訂版も同文)

甘蔗刈 三　台湾の甘蔗成熟期は十二月初旬に始まり翌年四月に及ぶ。即ち十二月初旬から甘蔗刈を始めるのであるが、刈つてそのまゝ置くと糖分が減るので、刈る一方、畑から製糖工場へと搬入する。内地でも九州辺では甘蔗を耕作し十二月頃刈る。葉を除いて、石車で搾つて其汁を煮詰めて黒砂糖を製するのである。甘蔗は一般に砂糖黍といふ。

B『季寄せ』初版修訂版

甘蔗刈 三　台湾の甘蔗成熟期は十二月初旬に始まり翌年四月に及ぶ。それを刈るのである。甘蔗

は一般に砂糖黍といふ。

C『季寄せ』改訂版

「甘蔗刈」項見られず

D『新歳時記』増訂版

甘蔗刈㊂　刈つてそのまゝ置くと糖分が減るので、刈る一方、畑から製糖工場へと搬入する。九州辺では十二月頃刈る。葉を除いて、石車で搾つて其汁を煮詰めて黒砂糖を製するのである。甘蔗は一般に砂糖黍といふ。

（18）虚子編『季寄せ』、『新歳時記』各版の、「季題」「目貼剥ぐ」項の「季題」解説文を左に引用する。

A『新歳時記』改訂版戦後修訂版（『新歳時記』改訂版も同文）

目貼剥ぐ　満州や朝鮮の極寒の地では、冬中は窓の隙間といふ隙間を目貼りしてある。春になつてこれを剥ぐのである。

B『季寄せ』初版修訂版

目貼剥ぐ　満州や朝鮮の極寒の地では、冬中は窓の隙間といふ隙間を目貼りしてある。春になつてこれを剥ぐのである。

C『季寄せ』改訂版

「目貼剥ぐ」項見られず

D『新歳時記』増訂版

目貼剥ぐ　極寒の地では、冬中は窓の隙間といふ隙間を目貼りしてある。春になつてこれを剥ぐのである。

（19）虚子編『新歳時記』増訂版「目貼剥ぐ」項

（20）虚子編『季寄せ』、『新歳時記』各版の、「季題」「ペーチカ」項の「季題」解説文を左に引用する。

A『新歳時記』改訂版戦後修訂版（『新歳時記』改訂版も同文）

ペーチカ㊂　ロシア建の家に特有の暖房装置で、数室の境界に円柱をつくり、その下に多く石炭を焚いて暖をとるのである。朝晩一回づつ焚けば終日終夜暖かい。満州地方の家に多く見られ、特異な風趣がある。

B『季寄せ』初版修訂版

ペーチカ㊂　ロシア建の家に特有の暖房装置で、数室の境界に円柱をつくり、その下に多く石炭を焚いて暖をとるのである。

C『新歳時記』増訂版

ペーチカ㊂　数室の境界に円柱をつくり、その下に多く石炭を焚いて暖をとるのである。朝晩一回づつ焚けば終日終夜暖かい。

（21）虚子編『新歳時記』増訂版「ペチカ」項

（22）童謡「ペチカ」は北原白秋作詞、山田耕筰作曲で、「南満州（現中国の北東部）を舞台に作られたこの歌は、大正十二年十二月に作曲され、同十四年五月「子供の村」に発表され」た（野ばら社編集部編『童謡（増訂版）』一九九四年、野ばら社）。つまり、虚子編『新歳時記』初版の刊行される約十年前に発表され、『新歳時記』増訂版には二十五年以上先行している。したがって、主に満州を舞台に設定された「季題」でありながら、『新歳時記』増訂版にまで「ペーチカ」が「季題」として残された理由として、この童謡からの影響は考えられてよいものと思われる。

（23）ここでの忌日「季題」は「〔人名〕忌」の形のものに限定し、「涅槃」「御命講」「大師講」などは除いた。
（24）虚子編『季寄せ』改訂版「西鶴忌」項
（25）忌日「季題」の中でも「四迷忌」は、「墓碑がシンガポール郊外共同墓地にある」ため、「旧日本の植民地や進駐地域にかかわる季題」に含まれ、したがって「〈植民地季題〉の整理の中で必然的に削除された」ことが、先行研究によって指摘されている（筑紫磐井「歳時記の百年　第八回虚子編『新歳時記』」（「俳壇」一七巻九号、平成一二年八月））。

終章　注

（1）青木亮人「菊の詠みどころ―明治期俳諧宗匠と正岡子規達の作品から―」（『アートリサーチ』一〇号、平成二二年三月）

（2）『俳句問答』において、「新俳句と月並俳句とは句作に差異あるものと考へらる。果して差異あらば新俳句は如何なる点を主眼とし月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや」の問いに対し、子規は、「第四、我は音調の調和する限りに於て雅語俗語漢語洋語を嫌わず、彼れは洋語を排斥し漢語は自己が用ゐなれたる狭き範囲を出づべからずとし、雅語も多くは用ゐず」と答えている。

（3）虚子は昭和九年（一九三四）一一月刊の虚子編『新歳時記』（三省堂）の序において、「季題の取捨　季題は俳句の根本要素であるが、既刊の歳時記を見るに唯集むることが目的で選択といふことに意が注いでなく、世上一般の字書の顰に倣ふことが急で作句者の活用に供するといふ用意が欠けてをつたかと思ふ。例ば春の風・春の水・春暁・春書等があるから踵的に夏の風・夏の水・秋の朝・秋の書等もなければならぬとして共等の題を設けたり、二十四気や七十二候も氣候であるからとして之を入れたり、外国の記念日や凡有る神社の祭礼等を選択なく取入れたり、季題だけで十三四字甚しいのは十七字を超過するのがあったり、これ等は季はあるには相違ないが俳句の季題には不適当なものである。本書は季題の取捨に最も重きを置いたが、其方針としては／俳句の季題としてあるものを採り、然らさるものは捨てる。／現在行はれてゐるゐないに不拘、詩として諷詠するに足る季題は入れる。／世間では重きをなさぬ行事の題でも詩趣あるものは取る／語調の悪いものや感じの悪いもの、冗長で作句に不便なものは改め或は捨てる／選集に入選して居る類の題でも季題として重要でないものは削り、新題も詩題とするに足るものは採択する。／等で要は文學的に存置の價値如何にある。諺に悪貨現れて良貨影をひそむといふことのある通り、季題も玉石混淆しては佳題も目立たず、一々其選択の煩累に堪へないであらう。実に季題の整理といふことが此

歳時記の一つの目的であった。其捨てた季題は別に掲げて取捨の跡を明にする考へであったが紙敷の関係等もあり実現しなかつた」と述べている。

あとがき

本論文を執筆するに当たり、ご指導賜った主指導教官の堀竜一先生、副指導教官の廣部俊也先生・足立幸子先生に、心より御礼を申し上げる。

本論文をまとめる以前に雑誌などに発表した論文は以下の通りである。ただし、旧稿の誤りを修正するとともに、その後の研究成果を取り入れるなど、それぞれ改稿を施した。

序章　（書き下ろし）

第一章　『連歌俳諧研究』一二三号、平成二四年九月、俳文学会

第二章　『三田國文』五九号、平成二六年一二月、三田國文の会

第三章　廣木一人先生退職記念論集編集委員会編『日本詩歌への新視点　廣木一人教授退職記念論集』平成二九年三月、風間書房

第四章　『現代社会文化研究』七五号、令和四年一一月、新潟大学大学院現代社会文化研究科

第五章　（書き下ろし）

第六章　『三田國文』五〇号、平成二一年一二月、三田國文の会

第七章　『三田國文』五一号、平成二二年六月、三田國文の会

終章　（書き下ろし）